

令和5年度 文部科学省委託 「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」に関する実践研究報告書

文部科学省委託

令和5年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業

地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進

「重度医療的ケア者対象の 訪問型生涯学習支援」に関する実践研究 報告書



重度障害者・生涯学習ネットワーク

令和6年3月1日

令和5年度 文部科学省「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」

「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」に関する実践研究 報告書

重度障害者・生涯学習ネットワーク

令和6年3月1日

文部科学省委託
令和5年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業
地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進

「重度医療的ケア者対象の
訪問型生涯学習支援」に関する実践研究
報告書

重度障害者・生涯学習ネットワーク

目次

項目		頁
はじめに		1
I 研究計画		2
1. 目的		2
2. 方法		4
3. 事業経過		7
II 結果・考察		8
1. 訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム		8
(1) はじめに「重い障害のある方の学びの必要性」		8
(2) 訪問カレッジにおける学習活動の類型化		9
(3) 実践事例の紹介		10
(4) おわりに～学びのかたちは、無限大		36
2. 運営・地域連携		38
(1) 運営・地域連携に関する実践研究		38
(2) 地域啓発資料「訪問型生涯学習地域連携リーフレット」の効果的な活用方法		53
(3) 「運営・地域連携」に関する考察		56
3. 人材育成		59
(1) 日野市障害者訪問学級		59
(2) NPO 法人ひまわり Project Team		63
(3) NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会		66
(4) 「人材育成」に関する考察		74
4. 理解啓発		80
(1) 第2回「訪問カレッジ『学びの実り アート&ミュージックミュージアム』」の概要		80
(2) 第2回「訪問カレッジ『学びの実り アート&ミュージックミュージアム』」開催結果		82
(3) 「理解啓発」に関する考察		90
(4) 「学びの実り アート&ミュージックミュージアム」写真及び動画記録		91
III おわりに		95

はじめに

重度障害者・生涯学習ネットワーク 会長 飯野順子

今年度、文部科学省の委託事業を受託し、滞りなく事業を展開することができました。多くの方のご協力に感謝申し上げます。特に、「訪問カレッジ enjoy かながわ」の神奈川チームの精力的な活動によって成果をあげることができました。大きな拍手!!です。

「目標や楽しみがあって、肯定してくれる存在があることは、本人はもちろんのこと、家族にも生活を広げてくれます」と神奈川の案内パンフレットに書かれています。訪問カレッジについて、一言で言えば、このことそのものです。これを詳しく言いますと、次のようになります。

「訪問カレッジ」の意義と役割を、次のように考えて、推進してきましたが、今回、多くの方に活動の趣旨を伝えることができました。

1 医療的ケアの必要な方の心豊かな人生への支援

- ①生命と夢を育み、生きる力を強める。
- ②日常生活の空間を、知的好奇心を促し、知的刺激のある学びの環境へ整え、生活の質を高める。
- ③家族以外の人とのつながりを広げる。
- ④本人主体の活動を創出する。
- ⑤かけがえのない人生のかけがえのない「時」を、学びたいことを学ぶ「時」とする。

2 家族の方々への支援

- ①家族からの側面的・主体的・積極的支援がある。
- ②家族の孤立化を防ぐ～話し相手・心理的な支え。
- ③喜びを分かち合い、共感によって関係性を築ける。

3 地域社会への発信

- ①生命を尊重し、生命の価値を伝える。

私たちは、これまで医療的ケアの必要な方々の生涯学習の種まきをし、その芽が育ち、双葉になり、本事業を経て、青葉が繁りつつあるような気がしています。「訪問カレッジ」は福祉と教育の谷間にあると、痛感してきましたが、その溝も、少しずつ埋まってきたと思っております。

今、直面していることは、運営面での諸課題です。各団体によって事情は異なりますが、安定した資金の確保と人材育成が困難なことです。生涯学習のニーズは、年々高くなっていますので、その期待に応えて、医療的ケアの必要な方々の「訪問型の学びの場」を拡充するには、せめて。講師の報償費等のステップアップが必要であると切実に感じています。

最後になりますが、ネットワークを構成する団体は、それぞれの地域で活動しています。その団体の数も、16団体と増えてきています。誰でも、いつでも、始め易い制度が創出されて、小さな力が大きな流れとなり、重度障害者の生涯学習の裾野が全国に広がる日を、待ち望んでいます。

I 研究計画

I. 目的

平成29年4月7日に発信された松野文部科学大臣メッセージ「特別支援教育の生涯学習化に向けて」の中で、「中でも印象的だったのが、特別支援学校での重い知的障害と身体障害のある生徒とその保護者との出会いです。その生徒は高等部3年生で、春に学校を卒業する予定であり、保護者によれば、卒業後の学びや交流の場がなくなるのではないかと大きな不安を持っておいででした。」と紹介された保護者は、「重度障害者・生涯学習ネットワーク」の副会長である。

「重度障害者・生涯学習ネットワーク」（以下、「ネットワーク」）は、「医療的ケアを必要とする障害の重い方の多くは、在宅生活を余儀なくされている。心豊かな生活の実現のために、学校時代に学んだことを継続し、更に、新たな知識等を身につけたいと希求している。このような生涯にわたり学び続けたいという夢や願いに応えるために、これまで『カレッジ』等の名称を冠した学びの機会と場を創出してきた。（中略）関係団体が連携して『重度障害者・生涯学習ネットワーク』を結成し、生涯学習の充実を図る。」を目的に平成29年12月25日に発足した。会員団体は、令和5年11月3日現在15団体である。「ネットワーク」は、発足時期（平成24年から現在）も、活動地域（事務局所在地）も、事業母体の形態（NPO、一般社団、国立学校法人等）も異なるが、いずれも「医療的ケアを必要とする重度障害者対象の訪問型生涯学習支援」（以下、「訪問カレッジ」）に取り組んでいる団体によるコンソーシアムである。

一方で「訪問カレッジ」は、福祉や教育などの制度的な背景のない、独自の事業であり、事業継続を行うための財政基盤が無いというのが大きな課題となっている。そこで社会の制度に位置づけたいというのが「ネットワーク」の願いである。国連総会採択のSDGs（持続可能な開発目標）に「すべての人々へ包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」が掲げられた。令和5年3月発表の障害者基本計画（令和5年度～令和9年度）には、「障害者が生涯にわたり教育やスポーツ、文化などの様々な機会に親しむことができるよう、訪問支援を含む多様な学習活動を行う学びの場やその機会を提供・充実する」とされた。こうした情勢は、訪問型生涯学習支援の制度創設に対する追い風である。

本事業では、会員団体が行っている「医療的ケアを必要とする重度障害者対象の訪問型生涯学習支援」の効果的な学習プログラムや、地域の中での支援者人材育成のノウハウを提供する。

連携協議会では、昨年度の研究を踏まえて、自治体が民間団体と組織的に連携して

訪問型の保育・療育・教育等

就学前	福祉	居宅訪問型保育	平成27年度～
	福祉	居宅訪問型 児童発達支援	平成30年度～
学齢期	福祉	居宅訪問型 児童発達支援	平成30年度～
	教育	訪問教育	昭和54年度～
学校 卒業後	福祉	生活介護事業所からの 居宅訪問	自治体・法人
	教育	訪問型生涯学習	民間（法定外）
	教育	青年学級（訪問）	自治体事業

根拠となる制度・事業は現在ない

障害者の生涯学習支援に取り組むための組織体制づくりや連携方法を検討する。併せて、その成果は事業モデル及び実践事例集（成果報告書）としてまとめ、地方公共団体等と共有する。さらに、共生社会及び生涯学習社会の実現に向けた啓発事業として「医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム」を事務局のある神奈川県で開催し、神奈川県を核として本事業の普及を図る。その活動の中心を担う事務局は、「NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会」に置く。

「医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律（医療的ケア児支援法）」（令和3年9月18日施行）により、「医療的ケア児」（日常生活及び社会生活を営むために恒常的に医療的ケアを受けることが不可欠である児童）への支援について現在注目が集まっている。本事業では、18歳以上の「医療的ケア者」に対する生涯学習の実践を通じて、障害が重度であっても生涯学習の対象であり、そのニーズがあることを明らかにする。社会生活をおくる上で最も困難を抱える重度障害者に対する社会理解を深めることは、あらゆる障害のある方々への理解推進を図ることにほかならない。したがって本事業は、共生社会・生涯学習社会の促進に寄与できると考える。

(1) 重度障害者・生涯学習ネットワーク

(a) 会員団体（令和6年2月1日）

	事業名	法人等事業者名
①	日野市障害者訪問学級	日野市障害者問題を考える会
②	訪問療育 いるか	NPO 法人かすみ草
③	訪問カレッジ@希林館	NPO 法人地域ケアさぼーと研究所
④	ひまわり Home College	NPO 法人ひまわり Project Team
⑤	訪問大学おおきなき	NPO 法人訪問大学おおきなき
⑥	訪問事業 i.porte(あいぼると)	NPO 法人あいけあ
⑦	訪問カレッジ静岡	静岡県障害者就労研究会
⑧	在宅訪問学習支援事業「SHJ 学びサポート」	認定 NPO 法人スマイリングホスピタルジャパン
⑨	みんなの大学校	一般社団法人みんなの大学校
⑩	訪問カレッジ Enjoy かながわ	NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会
⑪	訪問カレッジ・オープンカレッジ@愛媛大学	愛媛大学
⑫	NPO 法人こどもホスピスプロジェクト	NPO 法人こどもホスピスプロジェクト
⑬	未実施	医療型障害児入所施設カリヨンの杜
⑭	訪問カレッジ@きーぼ岡山	きーぼ岡山
⑮	訪問カレッジ Be Prau	一般社団法人ケアの方舟
⑯	障害の重い人の地域支援「ふりかけプロジェクト」	明石市立ゆりかご園

(b) 役員等

氏名	所属・役職等	備考欄
飯野 順子	NPO 法人地域ケアさぼーと研究所・理事長	会長
成田 裕子	NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会・理事長	副会長

藤原 千里	NPO 法人ひまわり Project Team・代表理事	副会長
相澤 純一	NPO 法人訪問大学おおきなき・理事長	会計
下川 和洋	NPO 法人地域ケアさぼーと研究所・理事	事務局長
安部井聖子	東京都重症心身障害児(者)を守る会・会長	顧問
柿沼 亮介	社会福祉法人天童会秋津療育園・医師	顧問
新井 雅明	田園調布学園大学・教授	顧問
奥野 康子	明治学院大学・非常勤講師	顧問

(2) 事業推進担当者

氏名	所属・役職等	備考欄
成田 裕子	NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会・理事長	
繫 里織	NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会・経理	
新井 雅明	田園調布学園大学・教授	
奥野 康子	明治学院大学・非常勤講師	
山口 秀子	神奈川県立スポーツセンター健康パラスポーツ課・主事	
片山 由美	神奈川県教育委員会特別支援教育課・専門員	
下川 和洋	NPO 法人地域ケアさぼーと研究所・理事	

2. 方法

令和4年度「『重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援』に向けた実践研究」(以下、本事業)では4つの研究課題を設定して、会員団体が行っている訪問カレッジの実践を収集・分析、連携協議会を通じて自治体との組織的な連携等の研究を踏まえた実践研究に取り組んだ。その研究成果は、以下の通り。

(1) 研究課題①訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム

ネットワーク会員団体を通じて、授業記録等の実践を収集・分析して、学習プログラムの類型など考察を行った。研究を通じて、訪問型の学習スタイルと学習プログラムの類型化を行うとともに訪問カレッジの教育的意義・社会的意義を明らかにした。

(2) 研究課題②運営・地域連携

事務局の NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会がある、神奈川県の実地や先進的に取り組む自治体(東京都日野市・東京都新宿区)の参画を得て連携協議会をつくり、自治体が民間団体と組織的に連携して障害者の生涯学習支援に取り組むための組織体制づくりや連携方法を検討した

これまでの実践を、①主体的な学びを支える学習支援員の体制 ②大学との連携 ③地域との連携」の3つの視点で整理した。その上で、地域との連携には、①特別支援学校との連携 ②福祉との連携 ③社会教育資源との連携 ④自治体との連携(協働事業へ)が重要であることを明らかにした。

(3) 研究課題③人材育成

会員団体のうち、「日野市障害者訪問学級」「NPO 法人ひまわり Project Team」「NPO 法人フューションコムかながわ・県肢体不自由児協会」の人材育成に関する取り組みを取り上げ、人材育成の在り方を検討した。

各訪問カレッジは毎年新しい受講生を受け入れていて、受講生は毎年増加している。これに対して学習支援員を十分に確保することが喫緊の課題である。会員団体全体への調査では、多くの訪問カレッジが特別支援学校元教員を採用していた。特別支援学校教員以外の場合には、①市民、②専門家、③学生が学習支援員になっていた。

(4) 研究課題④理解啓発

「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」の制度創設のためには、医療的ケアを必要とする重度障害者に生涯学習ニーズがあること、そしてそのニーズに応える訪問型生涯学習支援「訪問カレッジ」の取り組みが行われている事実を広く社会に対して発信していくことが重要であると考え。その方法として、学生自身の学習成果と本事業の実践研究の成果を発表する場としてイベントを企画・開催し、理解啓発の在り方について研究を行った。

イベント参加者に対して、参加前と参加後における理解度の変化をアンケート調査で調べ、学生の学びの発表の場やフォーラムの開催は理解啓発に効果的であることを明らかにした。さらに、訪問カレッジ学生や保護者に対して「訪問カレッジ学生・家族の満足度調査」を実施し、高い満足度と今後に対する期待を把握することができた。

令和5年度「『重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援』に関する実践研究」では、令和4年度の4つの研究課題に対する成果を踏まえるとともに、そこで示した「今後の課題」に沿って研究を推進する。

(1) 研究課題①訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム

令和4年度の研究で今後の課題として上げたのは、①訪問型学習のプログラムの類型化の検証 ②学びの履歴の在り方についての調査研究 ③集合型の学び・行事に関する調査研究

の3点である。引き続き、ネットワーク会員全体を通じて、事業記録等の実践を収集・分析して、これらの課題についての調査研究を行う。

(2) 研究課題②運営・地域連携

令和4年度の連携協議会では、自治体が民間団体と組織的に連携して障害者の生涯学習支援に取り組むための組織体制づくりや連携方法である「かながわモデル」を提案し、事業を持続可能なものにするための具体的な方向性を提案した。その実現に向け、実践研究を推進する。

また、令和4年度の本事業で作成した地域啓発資料「訪問型生涯学習地域連携リーフレット」の効果的な活用方法を研究する。

(3) 研究課題③人材育成

訪問カレッジの学生の学びを支援する学習支援員には、特別支援学校教員の他に①市民、②専門家、③学生が担当していた。文部科学省・厚生労働省・経済産業省から「インターンシップを始めとする学生のキャリア形成支援に係る取組の推進に当たっての基本的考え方」(平成9年9月18日、令和

4年6月13日一部改正)なども踏まえて、人材育成について継続的な研究を行う。

(4) 研究課題④理解啓発

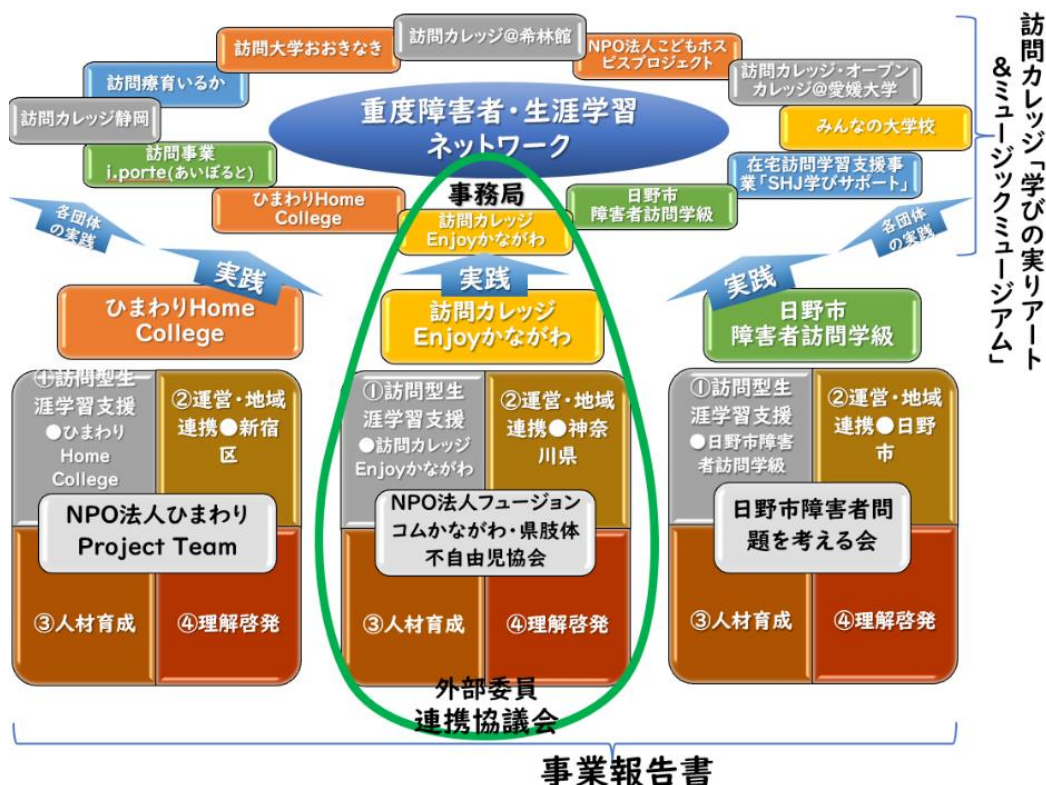
令和4年度の本事業で、イベント等に参加した人には、十分理解を得ることができたが、一方で「生涯学習」の「学習」という言葉によって「学習＝学校教育」という狭い理解のされ方も根強いことが明らかになった。学生の学びの発表の場や、理解推進のためのフォーラムの継続的な開催が必要であり、その効果を継続的に検証していく。

「研究課題②運営・地域連携」は、本事業の事務局である「NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会」が、神奈川県助言や協力を受けながら進める。それ以外の「研究課題①③④」については、ネットワーク会員団体それぞれの実践を収集・分析して、在り方を提案する。

本事業を通して、障害が重度であっても生涯学習の対象であり、そのニーズがあることを明らかにし、効果的な学習プログラムを開発することで、「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」の制度創設に寄与することを目指す。

社会生活をおくる上で最も困難を抱える重度障害者に対する社会理解を深めることは、あらゆる障害のある方々への理解推進を図ることにほかならない。したがって本事業は、共生社会・生涯学習社会の促進に寄与すると考える。

【研究の全体像】



3. 事業経過

4月	会員団体による訪問型生涯学習支援「訪問カレッジ」の令和5年度開始
4月23日	第1回 重度障害者・生涯学習ネットワーク会議役員会議
6月 3日	令和5年度「第1回 重度障害者・生涯学習ネットワーク会議」：協力依頼
7月23日	第1回 連携協議会
8月	(日本特殊教育学会自主シンポジウム)
9月	
10月 8日	第2回 連携協議会
11月 3日	訪問カレッジ「学びの実りアート&ミュージックミュージアム」2日間
4日	第4回 医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム
12月18日～	第2回 重度障害者・生涯学習ネットワーク会議役員会議
1月16日	令和5年度「第2回 重度障害者・生涯学習ネットワーク会議」
2月10日	第3回 連携協議会
3月	会員団体による訪問型生涯学習支援「訪問カレッジ」令和5年度修了 報告書完成：関係先配布

ネットワークを通じて、重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援の授業記録等の実践収集・分析



Ⅱ 結果・考察

1. 訪問型生涯学習支援における効果的な学習プログラム

(1) はじめに「重い障害のある方の学びの必要性」

私たち、「重度障害者・生涯学習ネットワーク」では、生涯学習は、余暇活動ではない！ キャリア形成の場。かけがえのない人生のかけがえのない「時」を、学びたいことを、学ぶ「時」とすることです。訪問によるカレッジ活動です」と訴えてきました。「障害が重くても、学びたいと思っている！ 学びとは、生きる喜び。生涯にわたって、学び続ける喜びを！」がモットーです。

しかしながら、「重い障害のある人に、学びは、可能か、或いは、学びは必要か」という声が、聞こえてきます。始めてから、10数年たっています。その間、訪問の度に見せるカレッジ生の満足感を表す笑顔は、学びの必要性を表現しています。本稿における一つ一つの事例は、重度障害者の学びの意味を示しています。この間、カレッジ活動は、少しずつ広まってきましたが、そのニーズは、年々高まっています。今後のために、下記のようにプログラム開発が、求められていますので、各団体における学習プログラムをまとめて紹介し、訪問型の生涯学習（以下、訪問カレッジ、とする）を拡充していきたいと考えています。

下記の生涯学習ニーズ調査も参照してください。

「障害者の生涯学習の推進方策について」(報告)31. 3(重度・重複障害者の学び)
東京都重症心身障害児(者)を守る会の各分会の協力を得て、地域ケアさぼーと研究所が実施した調査(平成28年)によれば、重度・重複障害者の生涯学習ニーズとして、音楽を楽しむことや健康・体づくり、アロマセラピー、読書活動等が挙げられた。重度・重複障害者が、学校卒業後も生活年数を重ねることで感情の表現なども豊かに成長することに鑑みると、ICTを活用した意思伝達、意思表示装置を使用した学習や、タブレット端末を活用した音楽に関する学習、身体活動等に関するプログラム開発を行っていくことも重要と考えられる。(以下略)
「訪問カレッジ@希林館」の経過
平24.7.12 (あきる野学園説明会 青梅分会主催)
平30.6.14 「学校卒業後の障害者の学びの推進に関する有識者会議」において「訪問カレッジ@希林館」の取組報告

スクーリングで取り上げたいこと
生涯学習ニーズ調査: 学びたいこと・学ばせたいことから

今後設けたい講座 一覧	人数
①ミュージック・セラピー～音楽を楽しむ	54
②健康・体づくり～からだを緩め、緊張を解く	49
③アロマ・セラピー	45
④読書活動～読み聞かせ等を通して、本に親しむ	41
⑤スヌーズレン～感覚を磨く	38
⑥コミュニケーション支援機器(iPad等)を操作する	32
⑦ボウリング・ゲーム等	29
⑧スイーツづくり～ティータイムを楽しむ	27
⑨物づくり～絵画・紙粘土などの制作活動をする。	23
⑩地理・歴史～映像で世界を旅する～世界の文化・歴史に親しむ	23
⑪文学～創作活動～詩作・作曲・お話づくりにチャレンジする	20
⑫福祉～生活に関する身近な福祉を学び、生活に生かす	18

「訪問カレッジ」の学習を進めるにあたって、下記の留意事項を確認しました。

(1) 「訪問カレッジ」の学びは、その人、一人のものであり、他の誰とも取り換えることができないこと。

したがって、個別のプログラムである。

(2) 本人主体の取組とすること

(3) 学びは、本人のペースで進めること

(4) 親ごさんの願いや期待に寄り添えるプログラムとすること

(5) 学校で学んだこととの継続性・発展性があること

(6) 学ぶ喜びや楽しさが体感できること

- (7) その人の願いや夢が実現できること
- (8) ライフステージに応じた内容であること
- (9) 学びの始まりを終わりがはっきりしていること
- (10) 学びの履歴が明確になっていること～終了証・評価表

(2) 訪問カレッジにおける学習活動の類型化

私たちの活動は、「カレッジ活動」です。多くの方が特別支援学校の高等部を卒業しています。18歳以上の方が対象ですので、目指しているのは、「カレッジ」としての扱いです。「カレッジの要件」は

- ①カリキュラムがあり、系統的・継続的に学べる年間計画・支援内容・個別の目標・評価を設定している。
- ②専門的な知識・技能のあるスタッフがいる。
- ③健康で生きがいのある生活のために、自らの個性や得意分野を生かす環境がある。
- ④希望と夢の実現に力を尽くす。

と考えています。系統性のある大学活動の体裁を整えるために、今後のために、学習プログラムの類型化を試みてみました。下記の類型は、実際に行っています。今後は、学びの履歴に関する評価表を作成し、記録として残せるようにしたいと思っています。

■訪問型生涯学習の類型■

【自然科学分野】(⇒理科の授業) 物理・化学 生活に身近な実験 科学 動物 (好きな動物・恐竜等の古代の動物) 生物 植物 栽培活動(野菜・草花・樹木) 宇宙や星空の学習 プラネタリウム
【社会科学分野】歴史(古代の歴史・時代の変遷 絵本による日本の歴史) 地理(日本・世界～世界遺産) 新聞等による社会的知識の習得(社会 経済 住んでいる地域研究)
【人文科学分野】(⇒国語・数学・美術・音楽の授業) 文学 読書活動(絵本の読み聞かせ) 創作活動(俳句・短歌・詩・絵本・小説) 外国語(英語)
【家政学分野】調理実習・栄養管理・摂食指導・手工芸 染色・生花 縫製(ミシンでエプロンづくり)
【文化・芸術分野】音楽療法 音楽 歌唱 器楽演奏 鑑賞 作曲 身体表現・ダンス 創作発表 美術 絵画 粘土 版画 シルクスクリーン 鑑賞 美術館巡り(オンライン)・書道・演劇 映画鑑賞
【保健体育分野】体操 健康管理 体への取り組み ボッチャ ハンドサッカー トランポリン フワフワマット 車椅子卓球
【言語・コミュニケーション分野】ICT機器の活用(視線入力・スイッチ操作等の入力方法の開発と表現活動) トーキングエイド・文字盤などコミュニケーション方法の修得 メールやフェイスブックの活用 ことばの学習
【「自立活動」の継続に関する分野】身体の動き 健康の保持 感覚の活用 人間関係の形成 アロマセラピー スヌーズレン
【伝統文化分野】季節の行事 獅子舞 豆まき 夏祭り
【校外学習】社会見学 乗車体験 図書館 買い物 レストランで食事

【特別講座＝重度障害者向けの工夫・開発 再掲】ICT機器の活用（視線入力、個々にあったスイッチの開発と活用、アプリの開発と活用）

※自立活動とは、特別支援学校における専門的な指導で、学習指導要領に6区分 27 項目の領域が設定されています。障害の重い方の学校時代には、学習の基盤として自立活動を位置付けて、授業に取り組んでいます。学校卒業後も自立活動の視点を取り込んだ取り組みとすることは必要です。

- 1 健康の保持 2 環境の把握 3 心理的な安定
- 4 身体の動き 5 人間関係の形成 6 コミュニケーション

2の「環境の把握」の下位項目は、①保有する感覚の活用 ②感覚や認知の特性についての理解 ③感覚の補助及び代行手段の活用 ④感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動 ⑤認知や行動の手がかりとなる概念の形成

6の「コミュニケーション」の下位項目は、①コミュニケーションの基礎的能力 ②言語の受容と表出 ③言語の形成と活用 ④コミュニケーション手段の選択と活用 ⑤状況に応じたコミュニケーション

(3) 実践事例の紹介

(a) 日野市障害者訪問学級

①事例Ⅰ Y・F 女性 重度心身障害（肢体不自由でほぼ寝たきり状態。発話はない。）

(1) 学習 月に2回ほど活動。年間約20回。本人が楽しめる活動を工夫している。

活動時間は一時間半（3時45分～5時15分）

(2) 学習内容（Yさんは寝ころんだまま活動）

①音楽（ハンドベル演奏＝きらきら星、チューリップ、海、赤とんぼ、大きな栗の木の下で Yさんの片方の手を握って、一緒にハンドベルを鳴らします。Yさんは、ハンドベルの音色に耳をすませて音楽を味わっています。意欲的にハンドベルをやりたいということが伝わってきた時もありました。

②絵本の読み聞かせ

Yさんのお隣と一緒に寝転んで絵本を見ます。Yさんは可愛らしい絵本を好まれるので、絵を見て本を選んでいきます。お気に入りのお話のときは自然と笑顔になります。内容がいまいちな時には、本から目をそらしがちになり、集中力も低下してしまいます。例えば、「おおかみだあ！」（文：セドリック・ラマティエ、絵：ヴァンサン・ブルジョ、訳：たにかわしゅんたろう）…おおかみがだんだん近づいてくる…Yさんは、目を大きく見開いて見ていました。ときどきしていることがこちらにまで伝わってきました。

③コミュニケーションタイム（ガールズトーク）

Yさんを囲んで、お母さんとガールズトーク（内容は最近のYさんについて）。

Yさんは、目をキラキラ、にこにこしながら話に耳を傾けます。時折、お母さんからの問いかけに、手の先をピンと伸ばして「はい」と答えてくれます。このトークの時間は、Yさんにとってかけがえのない大切な時間になっています。

②事例2 T.A 男子 障害の状態 重度心身障害

(1) 学習 殆ど寝たまま、自力での寝返り困難 随時吸引 必要に応じて酸素吸入・留置チューブでの経管栄養等医療的ケアが常に必要

(2) 学習内容等

【テーマ】OYES・NO や二者選択の意思を伝えて、作品作りに生かす。

○形や色などの自分のイメージを「こうしたい」「ああしたい」等と伝えて作品作りをする。

○活動の中で積極的にスイッチを操作して、自分で作品作りをする。

【学習プログラム】

①X-JAPAN『YOSHIKI になろう』

XJAPAN を聴き、演奏体験。

②紙相撲

スイッチをつかって、好きな相撲を体感する。

③版画

カラータッグを使って作品づくり

(3) 使用教材

①X-JAPAN『YOSHIKI になろう』:

スイッチを握ると、バーが上下して、ドラムセットを叩く。Ipad の映像や

音楽に合わせて演奏体験をする。握力は弱い握るスイッチを意識し、握る操作をすることで結果を目的的に意識できる。→「握れば音が出る」好きなアーティストがいるので、一緒に演奏をする体験ができる。

②紙相撲:スイッチを操作すると「電動の肩叩き器」が動き、振動を起こし、力士を動かす。肩叩き器は、リレースイッチを使い家庭用コンセントから繋ぐ。握るスイッチを操作し、目の前の土俵に振動を伝える。Tさんの力士」が倒れにくいように事前に工夫をしてある。勝敗を黒と白の磁石をならべ、どちらが多いか 数の比較にも繋げている。勝者に優勝杯を渡す。

③カラータッグ版画セット:事前にはさみで素材をいろいろな形に切り

準備しておく。台紙の上で T さんが指先で置きたい場所へ動かす。指先にほんの少だけ「糊」をつけ、置きたい場所まで動かしてやる。写す紙の方に水をつけ、軽く刷る。馬簾の操作は難しい。版画用のローラーと一緒にもち転がす。ゆっくり剥がせば、版が写る。

(4) 学習の様子

①X-JAPAN の『YOSHIKI になろう』

	創作活動などを通して手や道具・スイッチを操作することを意識し、表現することを楽しむ学習
4 ~ 6月	○『版画』 ○カラータッグを使って多色刷り作品をつくってみよう 白黒の水墨画のような作品やコラージュ版画も作ってみよう
7 ~ 9月	○『染色』ビニール袋の中で染物体験をしよう。 絞り染めや指筆での色抜きをやってみよう ○和紙を染めて、団扇やランタンを作ってみよう
10~ 12月	○クレヨンで「万華鏡作品づくり」 ○クリスマスの作品づくり
1 ~ 3月	○すごろくや紙相撲など『日本の文化に触れよう』 ○節分やひな祭りなどの作品づくり



「XJAPAN と共に演奏体験。」を今回しました。目の前に YouTube から流れる「^{くれない}紅」を再生、左下側臥位姿勢で見ると。そして握るスイッチを持ち、機器の操作です。大好きなリズムに気持ちに乗っています。Tさんは、握るスイッチ操作の意味（握るとその目的の動作が出来る）を十分知っています。ただ、気持ちが乗り過ぎるとにぎりが強くなり、逆に ON・OFF の交互操作が難しくなる傾向があります。

今回の機器のスイッチ操作は、順調です。適度に力が抜け、補助で支えている手には、ON・OFF が上手に伝わってきます。ところが、まさか「好きな曲を聴きながら、傾眠していくのは、なんて気持ちいいのでしょうか。」と解説したくなる程の、秒殺で眠りについてしまいました。

大好きな「紅・YOSHIKI」なのに。いいえ、大好きな XJAPAN だからこそ眠りたいのでしょうかね。

演奏の途中で見せてくれるパフォーマンスですが、スイッチを取って握らず、しかし、すぐに握れる距離をキープし、曲の流れの中でスイッチを握ったり、また指を泳がせるように離し、また握る様子がありました。お母様の話ですと、座位姿勢の時などによく見られる「動き」らしいのです。

自分の中でリズムをとり、強い緊張のある身体と「どうすれば思い通りの動きを引き出せるのか」という会話をし、操作できるポジションを確認しているかのような動きなのかもしれないと想像しています。

②紙相撲

このままでは深い眠りが来てしまうといけないので、お母様の「すもう」の一言で、YouTube の画面を、大好きな相撲の取り組みに変え、再生しました。「すもう」の効果は抜群でした。喜々と目を輝かせ、眠気を飛ばしてくれました。すもう繋がり、前回同様に紙相撲を急遽準備して、取り組みを始めてみました。紙相撲だけでは、目がくっついてしまいます。なので、音だけ相撲中継。活動は、紙相撲の学習をしました。ナント、負けず嫌いな Tさんは、2回も負けてしまいました。それでも怒らず活動をしてくれました。（きっと、気持ちの半分は聞こえてくる相撲中継に依っていた可能性が大きいかもしれません）

厚紙で出来た力士に「しこ名」をつけ、Tさんの顔写真を貼りつけました。Tさんの側臥位の位置から、丁度土俵の上の厚紙力士の戦う様子がみえるようにします。スイッチを押したいのですが、力のコントロールがうまくいかずに、つらそうにしている時があったり、逆に力が入り過ぎて、握りこんでしまって動かなくなってしまう場合もあるので、ラッチタイマーをつけてみました。（これで、チョットした力で、ゲームを再開することが出来るようになりました。） 白い○・黒い●を結果に合わせをボードで提示。数概念の確立はまだ難しいようですが、勝ち負けは理解しているので、最後に優勝杯を渡し勝利を称えるようにしています。

③版画

なんとか起きていてくれるので、カラータッグ版画をやってみました。いくつかの形の中から、青い○・黄色い△・オレンジの□の形を、選びました。指先でその形を動かし、自分で置きたい場所を決めます。Tさんから見て、下の方に指を動かしました。次の選択では、2つの○を置くことを選びました。次に好きな飛行機の形を選び、場所を探しました。Tさんは、飛行機は「上 : 空にあるもの」と決めています。指先が、先ほどの青い○から離れた場所へ、飛行機を誘導します。途中、みどりの飛行機も提示したのですが、却下でした。好きな色（今日は、ピンク）のイメージがしっかり有ります。他の形や色を追加で、使うか使わないかを尋ねると、これも明確に「もういらぬ」と意思を伝えられました。こういうところもハッキリ

りと伝えられて素晴らしいです。写しとる紙を水で濡らしているのも、興味を持ってくれたらしく笑顔を見せてくれました。その後、Tさんにローラーを使って紙の上を転がしてもらいました。馬簾の操作ですが、ローラーなら補助すれば動きを体感できます。「コロコロ」「クルクル」などのオノマトペを繰り返すと、声を出して笑っていました。出来上がった作品を、写真立てに入れて完成です。シンプルですが、きれいな作品になりました。

Tさんの色の選択は、初めのころはピンクとか比較的固定した傾向がありましたが、創作活動の積み重ねのなかで、赤や緑、濃い青など周りの予想に反した色の選択が多くなってきました。これも自分の中のイメージが広がってきているからなのかなと思っています。

(5) 家族の関り

- ・その日の体調の様子・最近の出来事等を教えていただく。
- ・吸引・注入・酸素吸入等 必要に応じた医療的ケアの実施。
- ・ポジショニングの配慮 時には後方からの座位介助をしてもらい学習する。
- ・学習場面では、声掛け等共に働きかけてくださる。
- ・学習の様子を写真や動画に撮り、学習グループラインにアップしてくださる。
- ・講師がまとめたその日の学習の記録を確認する。

(b) 訪問療育いるか

①M・J 男性 40歳 難治性てんかん 脳性マヒ 人工呼吸器使用

②学習の年間計画

- ・目覚めている時間を延ばし、活動を楽しめるようにする。
- ・いろいろなやり取りをする中で瞬きや口角を動かして意思表示する力を伸ばす。
- ・覚醒時に発作になりやすいので、見守り、声かけや必要な手当てをする。
- ・緊張しないように気を付けて身体に触れ、優しくマッサージする。
- ・お天気調べ、歌や絵本読みなど好きなことを楽しみ、さらに増やしていく。
- ・見たい方に目を向け、視線を合わせる。

③訪問記録

令和5年11月20日(月)	14:00~15:00	訪問者 水野
内容	様子	
1.手のマッサージ「10のうた」 「あしたのためのダンス」	午前中慌ただしかったようで、訪問時は入眠中。お母様により頭部を拳上させ、ベルハーモニーを近くで鳴らすと目を覚ます。	
2. はじまりのうた 「よんでみよう」:名前呼び	1.2.カシシを両手に持って左右交互にタッピング。カラー鈴も含め、音のする方を目で追う様子あり。歌が始まると数回口をもぐもぐ動かす。	
3. お天気調べ	3.陽射しがJさんの顔にかかる程の晴天だったのでカーテンを閉め	

<p>4. 音楽活動② ・「パッヘルベルのカノン」 「さんぽ」他 ドレミファキヤット、打楽器他</p> <p>5. 写真集鑑賞 絵本朗読 「なにかがいる」 「ありとすいか」 「そらまめくんのぼくのいちにち」</p> <p>6. スヌーズレン ・焚き火ライト 紅葉ライト</p> <p>7. おわりのうた</p>	<p>ていたが、一旦カーテンを開ける。「晴れ」マークを選択。</p> <p>4.ドレミファキヤットを両手に添えて「パッヘルベルのカノン」を流し、柔らかい感触を体験しながら演奏。終了後「もう一回ですか?」の問いに口を動かし、2 回目を演奏。</p> <p>続いて右手にキャンディドラムのマレットを握って頂き、左手にオーシャンドラムを添えて、介助で交互に叩いて「さんぽ」「ミッキーマウスのマーチ」を演奏。ここまでは覚醒していたが、この後介助でミニウクレレを弾いているうちに再び眠ってしまい、以降手のマッサージへ変更。予定していたアート製作は次回に延期する。</p> <p>5.目覚めたところで写真集鑑賞、絵本朗読へ擬態する動物や昆虫の写真を集めたものを鑑賞。左ページをじっと見つめた後に、答えとなる右ページへ視線を移す様子あり。ページをめくるごとにしっかり開眼していく。</p> <p>続いて鮮やかな色合いの絵本を 2 冊朗読。特に「ありとすいか」では、ページ中に細かく描かれたアリを探して視線を上下にも動かす様子あり。</p> <p>6.7.焚き火ライト、紅葉ライトで周囲を照らす。紅葉のひとつひとつに視線を動かす様子あり。「たきび」「紅葉」の伴奏に合わせて、口を動かしている。そのままおわりのうた。</p> <p>活動開始時の吸引以降、訪問中は吸引せず過ごせた。</p>
<p>特記事項(体調・覚醒状態・呼吸状態・機嫌・その他)</p>	
<p>・訪問日は体調良好であったが、前回〇〇退所後(11/11)に CRP:2.6mg/dL、WBC:11,000μℓ。抗生剤開始。11/13にはCRP:0.6mg/dL、WBC:6,000μℓに回復。</p> <p>・次回訪問は12/11(月)14:00~16:00。</p> <p>・ショートステイ:次回も〇〇で12/12(火)~12/15(金)。〇〇の都合で火~金しか予約出来ないとのこと。</p>	

令和5年12月11日(月)	14:00~16:00	訪問者 水野
内容	様子	
<p>1.手のマッサージ「10のうた」 「あしたのためのダンス」</p> <p>2. はじまりのうた 「よんでみよう」:名前呼び</p>	<p>※眠ってしまってなかなか目覚めず、目覚めると眼球上方固定させて顔面紅潮させ、時々上肢伸展も見られる発作が30秒~1分程あり。その後しばらくは起きていられるが、また眠気が襲う。</p> <p>概ね以上の一連のパターンが続く為、起きていられる時間を狙って療育活動を試みた。</p>	

<p>3. お天気調べ</p> <p>4. 音楽活動 ・「パッヘルベルのカノン」 「さんぽ」他 ドレミファキャット、打楽器他</p> <p>5. 工作 スノードーム製作</p> <p>6. 図鑑鑑賞・絵本朗読 「おしゃべりなもり」 「そらまめくんのたからもの いちにち」</p> <p>7. スヌーズレン ・ミラーボール 他</p> <p>8. おわりのうた</p>	<p>1.2. 手のマッサージ中はほとんど眠っている。はじまりのうたでベルハーモニーを 2 個鳴らしたところ目覚める。カシシを両手に持って左右交互にタッピング。音のする方を目で追う様子があるが、長くは続かず眠ってしまう。</p> <p>3. 曇天でカーテンを開けており、目覚めたところでお天気について伺うと窓の方に視線を向ける。「曇り」と「晴れ」マークで口を動かす。</p> <p>4. 手に棒状の鈴を握って頂き、主にクリスマスソングを演奏。「あわてんぼうのサンタクロース」の歌詞に合わせて振って鳴らす、太鼓に棒をぶつけて叩く等の鳴らし方を試みる。目覚めている間は左右の音がする方へ視線を向け、口を動かすことが出来ているが、数分で瞼が閉じてしまう。一番長く反応していられたのは、寒色のオーガンジーを眼前に提示して「北風小僧のかんたろう」に合わせて揺らした時。</p> <p>5. ペットボトルでスノードーム製作。音楽活動の時よりも長く目覚めていられた。中に入れるビーズやラメの色等は口の動きで返事して選択。目覚めている時間を狙って、右手にスプーン用のおたまを握って頂き、漏斗を取り付けたペットボトルに向けて介助でビーズ類や洗濯糊を運んで入れる。完成品をライトの上に乗せて提示するとしばし眺める様子あり。</p> <p>6. 目覚めている間は、左右のページに登場する鮮やかな色の鳥や虫へ視線を向けることが出来るが、すぐ眠ってしまう。</p> <p>7.8. 壁や天井に雪のように見える光を映し出すミラーボールを照射。スヌーズレン中は眠ることなく、発作を起こすこともなく、あちこちに視線を向けていた。</p>
<p>特記事項(体調・覚醒状態・呼吸状態・機嫌・その他)</p>	
<p>次回予定は 2024 年 1 月 22 日(月) 14:00~16:00</p> <p>お母様より:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今月に入り発作が多く、12 月の短期入所は中止となった。 ・体調不良のバロメーターとして手汗や手足に現れる発赤疹があるが、今回は顕著なものはみられず。 <p>7 月以降細かい発作が続くことはなかったが、なかなか不調から抜けられずにいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・訪問時は SPO2:95~96%。活動前の吸引時は赤色の粘稠痰が引かれた。 	

(c) 訪問カレッジ@希林館

①事例1 Aさん 女性 呼吸器使用 カリキュラムに基づいて、修了証を出した事例

Aさんは、10年選手です。気管切開をして声と表出手段も失い、絶望感のなかで、希林館の活動とで出会い、元担任の先生の熱心な指導によって、自分を取り戻し、学習意欲を高め、学びの実りを実現しています。現在は、一人暮らしをするほどになりました。以前にも紹介しましたが、修了証の一例として参照してください。

学習の内容 & 訪問時のプログラム


14:00～身体への取り組み
(静的弛緩誘導法)

14:20～学習① 生物(約30分)
14:50～学習② 文学(約20分)
レポートや創作の評価、
文章の書き方


15:10～学習③ 歴史学(約30分)
(百人一首、平家物語、他)

15:40～学習④ 社会科学(約10分)
情報・ニュース
(気に合ったニュースの報告)

15:50～身体への取り組み
(静的弛緩誘導法)



身体への取り組み



「生物」「歴史学」「文章表現」は大型テレビのスクリーンを見ながら学習しています

今年度の取り組み

単位制学習のカリキュラム

- ① 学習内容の整理
 - ・学習意欲を喚起するために、単位制学習カリキュラムを提案
 - ・本人の希望を尊重して学習計画をたてる。
 - 前期のテーマは「人体について」「フランス革命」
 - 終了時に、次回の学習内容の希望を聞き、次回の準備
 - ・前期で10単位取得を目指す。
 - (9月末現在、13.6単位を認めている)
- ② 学習方法の改善
 - ・パワーポイントの活用
 - 見て、聞いて、学ぶ事が出来る。
 - ・毎回、講義の内容に関してのレポートを宿題にする。(次回の学習時に評価を行う。)
 - 正確に伝わっていなかったことが確認できるようになった。(理解力、見る・聞く力の確認。)

学習はパワーポイントで

レポートを提出

「生きること」を、学ぶ～自己実現への支援】* 学習支援員がサポートしていること

- ①本人と家族への支援→生活上の困難を解消するための情報を提供(コミュニケーション機器の操作・サービス利用等)
- ②学ぶ機会の提供→関心ある事を、狭く、深く学ぶ(歴史・創作)
- ③「呼吸器をつけて生きていく」生活の意義を見出す。
- ④学ぶことを通して、自分らしい生き方を言葉と文字に表現する
- ⑤在宅生活に「外の風」を送る。(ニュースを通して社会の出来事を一緒に考える。)
- ⑥希望や願望を行動に移せるように励ます。本人が思っている「壁」を乗り越える方法を、一緒に考える。

世界史では「ベルばら」ファンなのでフランスの歴史を学習しています。約1時間授業中は吸引無しだそうです。

訪問カレッジ@希林館
単位取得証明書

山本利恵殿

あなたは訪問カレッジ@希林館の学習(平成30年度前期)において「13.6単位」取得されましたのでこれを証します

平成30年11月10日

特定非営利活動法人
地域ケアさほーと研究所
理事長 飯野順子

前期は13.6単位取得できました。頑張りました!

Aさんの学習支援員の支援に関する考えです。支援員への信頼はその人の生き方を左右するほどです。

②事例2 Bさん 男性 呼吸器使用 笑いのヨガによって、家族も元気になっている事例】

授業記録より

- ①蒸し暑い日であるが、SPO2は98、脈拍が50後半である。お母さんとお父さんに散髪をしてもらいすっきり。
- ②始まりの会:あいさつ、塚本先生からの手紙を読む(内くるぶしにひびが入り、当面は入院)、始まりの歌
- ③笑いのヨガ:はじまるよ、なまえよび、お花がパツ!

④絵本：溝井「じいさとばあさ」 お母さん「雨の日のふたり」

うた：ギター伴奏で 「サトウキビ畑」「カモメの夏」からだの取り組み：手足を触れて、腕や脚をさする。おなかや胸を触れる。鎖骨のところ、首、顔を触れる。おなかや胸を触れると音が手に感じた。手が動くのを感じた。

⑤終わりの会：うた、あいさつ

今日は、姿勢の中で SPO2の値が変わる。左下の時に SPO2が95であるが右下の時に98になる。言葉かけをもっと意識しよう。

蒸し暑い日であるが、SPO2 は96、脈拍が50の後半。

①始まりの会：前日、八王子が39度で日本で一番熱いところになったことを話す。あいさつ、うた

②笑いのヨガ：はじまるよ、なまえよび、お花がパツ！

③絵本：詩集「ほしとたんぼぼ」より

絵本 ふたりともだちより「アイスクリーム」 絵本「もけら もけら」

うた：ギター伴奏で 「サトウキビ畑」「カモメも夏」「グリーングリーン」

④からだの取り組み：手足を触れる。腕と脚をなぞり、動かす。おなかや背中を触れる。首や顔を触れる。掌が動くのを感じた。

⑤終わりの会：うた、あいさつ

今日は SPO2の変化がほとんどしなく95, 96で動いていた。姿勢が変わっても同じであった。首や口周りを触れるのも行ったが、動かす様子は見られなかった。丁寧に触れることを次回も行っていこう。

訪問した時に SPO2 が95であったので、母親が酸素を 0.5 入れる。SPO2 が 97 になる。脈拍は 50 の後半

①始まりの会：あいさつと歌

②笑いのヨガ：はじまるよ、おなまえは

③絵本：「かみなりむすめ」

うた：ギター伴奏で、「カモメの夏」「サトウキビ畑」「グリーングリーン」「夏の思い出」

④からだの取り組み：手足を触れて、腕と脚をさする。おなかや背中を触れる。首や顔を触れる。おなかの動きを感じられない。

できるだけ声をかけて、感じ取るようにと思っているが、掌の「ズッキン」という動き以外、今日はあまり感じられなかった。脈拍もあまり変化がなかった。

(d) ひまわり HomeCollege

①年間指導目標と計画

- ・自分が住んでいる地域や社会生活に関わり、体験的な学習、調べ学習等を通して、社会の一員としての意識をもつ。
- ・理科的、社会的な学習を通して、感じたことや見たことを自分なりに表現する。
- ・活動を行うことで自分を意識し、他者とのかかわりを深めることができる。

月	単元名	単元の目標	主な活動内容	教材
4	・住んでいる地域の昔の暮らし(江戸時代) オリエンテーションのみ(入学式)	・自分の家は新宿区のだのあたりにあるのかを知る。 ・新宿区の地勢を知る。	・牛込・落合・四谷・早稲田・高田馬場・新宿地域の位置を二者択一で選びながら確認する。 ・新宿区甘泉園についての紹介	新宿区の地図 甘泉園スライド
5	・甘泉園の歴史	・人々の生活の変化や生活に対する願いを知る。 ・自分の住む町にある文化や遺跡に関心をもつ。	・時代の移り変わりをスライドを活用して視聴する (江戸時代明治時代大正昭和現在) ・江戸時代から明治にかけて (・江戸時代の暮らし・江戸城の位置と新宿区・妙正寺川と神田川と関連させて) 地名の変遷	新宿区の地図 甘泉園スライド
6				
7	・都電荒川線について	・新宿区交通の江戸時代から現在にかけての交通の変化について	・江戸時代から現在に向けての交通手段の変化を面影橋で撮影したビデオを使って視聴する。 ☆質問は二者択一で選びながら確認する。	新宿区の地図 タブレット スライド
8	・生活と文化の結びつき① ・水稲荷神社 ・高田馬場跡 ・亮朝院	・歴史の中の生活と信仰との結びつきについて知る。	・江戸時代からの神社の祭りや地域の文化のつながり①スライドおよびビデオを視聴。 流鏝馬 夏祭り ☆質問は二者択一で選びながら確認する。	
9				
10	・生活と文化の結びつき② ・諏訪神社 ・玄国寺 ・田植地蔵		・江戸時代からの神社の祭りや地域の文化のつながり② スライドおよびビデオを視聴。 ・岩倉邸 ・田植え地蔵 ☆質問は二者択一で選びながら確認する。	新宿区の地図 タブレット スライドオンライン見学
11				
12	・学習してきたことをまとめよう	・江戸時代の製本の仕方を体験する。	・色染でまとめ用の表紙を作る。 ・和綴りを体験する。 ・新宿区の印刷・製本産業のつながり	和紙 タコ糸

1	・西洋化日本の最初の頃	・地域における明治時代の西洋化文化の最初の頃の重要文化財を知る。	・学習院女子大学正門スライドを見る。 ・戸山公園の歴史をスライドで知る。 ☆質問は二者択一で選びながら確認する。	新宿区の地図 タブレット スライド
2				
3	・学習をまとめよう	・自分の学習のまとめをする。	・自分の住む地域の文化遺産等をまとめ、発表する。 ☆質問は二者択一で選びながら確認する。	新宿区の地図 タブレット スライド

②実践記録k

a) 植物観察①

日時	2023年9月1日(金) 10:30~11:40頃 気温33~34度の酷暑のため室内版に
本日のテーマ	<室内版> ①前回(前々回)からの植物(ねずみもち、クチナシ)の変化を観察する。 ②新しい植物(柿、アベリア、百日紅)を観察し、それぞれの特徴と実の感触や中の状態を観察。いろいろな植物への関心を深める。
教材	ビックマック(録音式コミュニケーションスイッチ) 植物紹介カード(クチナシ・ねずみもち・柿・アベリア・百日紅) 植物(クチナシ・ねずみもち・柿・アベリア・百日紅) *おうちで用意していただいた物 実を切る包丁、まな板
環境設定	おうちのリビング 介助椅子 講師は丸椅子 写真は母が撮影 *吸引1回

<流れ>

1. 始まりの挨拶(朝ドラ「愛の花」の曲をバックに母が開始の言葉を録音) 講師が手を添えて、スイッチを押す。

2. 植物カードで今日観察する植物を簡単に説明

3. 植物観察

●ねずみもち(実・葉・茎) ●クチナシ(葉・実・枝) ●柿(実・葉・枝) ●アベリア(花・葉・茎・枝) ●百日紅(花・実) *枝からの収穫はできなかったため、花と実の部分のみ

アプローチ法 嗅覚(花や実の匂いを嗅ぐ) 触覚(手や指で触れて感触を確かめる) 聴覚(講師や母の説明を聴く等) 視覚(目前に示されたものを観る) 以上を通して、植物の匂いの違い、感触の違い等を知る。

<本人の様子と観察の展開>

●ねずみもち=カレッジの1回目から継続観察。1回目は開花中、2回目は小さな実ができ、今回その実

がやや変化ありか。大きさ、色、硬さなど目前に示したり、手のひらや指で触れて確認。

- クチナシ=2回目からの継続観察 2回目に白く開花していた花は終わり、つぼみのような形の実が出来ていた。母が実を半分に切ると、鮮やかな黄色で、小さな種も並んでいた。目前に示し、匂いも嗅いでもらった。母が実を煮ると黄色くなり、布を入れるとわずかに染まる様子も観てもらおう。
- アベリア=今回初めて、甘い香りの花が開花中。香りへの反応は一回目のねずみもちほど顕著ではないように思えた。
- 柿の実=今回初めて。柿の実(まだ青く硬い段階)手のひらに乗せると、ハッと顔を動かし口を動かしていた。(今回、一番反応が大きかった♪)大きめの実と小さい実を触り比べたりし、母に半分に切ってもらって中の様子を観察。表面は青くても中は柿色(オレンジ)そこに小さな種も並んでいる。その様子も目前に示したり、種や実の中身を手で触ってもらったりした。
- 百日紅=今回初めて。公園に行くことができれば木の肌なども観察できたと思われるが、今回は、花と実の部分のみ。ふんわりと柔らかい花を手に乗せてみたり、実の感触を観察。

<講師の感想>

この夏はあまりの酷暑でなかなか公園に行けず残念ですが、室内での観察が行えてよかったです。継続して観察する植物に新しい植物を加えて、時間的にも5種類くらいか適当だったかなと思います。

今回、お母さまのご協力で、柿の実を切って中を観たり、クチナシの実を切って中を観察したり、実際に煮沸して染め色を出すなどの展開ができて観察体験の幅が広がってとてもよかったです!

〇〇さんは、室内版の3回目ともなっていて、なんとなく流れがわかってきたかな、と。落ち着いた様子に見えました。右手に植物をのせた時、やや緊張する様子もありましたが、それほど支障はでなかったかなと思います。次回は、なんとか気候が落ち着きますように!



「はじめま〜す!!」のスイッチオン! 今日観察する植物をカードで確認

<参考知識>クチナシの染色 ネットで検索するといろいろ出ていました。

延喜式にあるように古くから黄色を染めるのに使用されてきました。染料には果実を使用し、発酵処理をすることで青く変化します。梔子染めの色素 クチナシの色素はクロシンと呼ばれるカロテノイド系

の水溶性色素です。サフランの雌しべにも含まれており、食品の着色料としても広く利用されています。また、クチナシの果実から抽出したクロシンとタンパク質分解物の混合物を酵素処理することで、青や赤などに変化させることができます。

草木染め方法

媒染法を用いて染色をする。ステンレス製の鍋に、梔子と水をいれ火にかけて沸騰させ煮煎する。20分ほどしたら布で濾し、できた煎液を染色原液として使用する。4回程煎液を抽出できる。植物繊維を染める際は豆汁などで下染めをする。先媒染法によるアルミ媒染の後に、染色を何度も繰り返し濃色に染め上げていく。また、抽出回数によって色の発色も異なり、回数を重ねると黄みが増す。

b) 植物観察② 戸山公園に出かける

日時	2023年9月15日(金) 10:30~12:15頃 気温 30度程度 曇り 少し風あり
本日のテーマ	<外出版> ①戸山公園に行って植物を観察する。 ②夏の花として、前回室内で観察した百日紅が実際に公園で生息しているところを観察する。その他公園内の木、草、花を観察、可能であれば実際に手で触れ、いろいろな植物への関心を深める。
教材	ビックマック(録音式コミュニケーションスイッチ) スマホ(写真撮影、グーグルで植物の名を検索)
環境設定	車椅子(吸引機など外出に必要なグッズ) 写真は母と講師が撮影 *吸引適宜

<流れ> 10:30 講師到着時には玄関で車いすに乗り、すぐ外出できるようスタンバイ完了。

1. 始まりの挨拶(朝ドラ「愛の花」の曲をバックに母が開始の言葉を録音) 今回は玄関にて。講師が手を添えて、スイッチを押してもらう。

2. 出発(戸山公園まで母が車いすを押す)

3. 園内植物観察

<アプローチ法>

公園内のため、基本的に採取は不可。植物によって枝を曲げて手元まで近づける。ケヤキのような大きな木は手を伸ばせば届く範囲まで近づいて触れる。百日紅など花弁が落ちているものは拾って目前に示したり、手のひらにのせる。(百日紅は枝が柔らかいため、手元まで曲げることができた) つゆ草のような雑草は少しだけ採取して観察。

嗅覚(花や実の匂いを嗅ぐ) 触覚(手や指で触れて感触を確かめる) 聴覚(講師や母の説明を聴く等) 視覚(目前に示されたものを観る)

以上を通して、植物の手触り、匂いの違い等を知る。室内で観察したことのある植物の実際の生息の様子を観察する(百日紅、紫陽花、アベリア)

<本人の様子と観察の展開>

●百日紅=前回(9/1)は、室内で花と実の部分のみの観察だったが、今回、実際の木に近づくことがで

き、枝を手元まで伸ばして触れてみたり、落ちた花弁の香りをかぐことができた。ピンクのみでなく白い花が咲く木もあった。

- けやき=幹に近づいてゴツゴツした木の肌に触れることができた。高い木のため枝や葉は観察できず。
- アベリア=前回観察したアベリアが垣根に植えられているのを発見!
- その他多種の植物観察(P2~) 散策しながら様々な草花を手にとったり、匂いをかいで観察。

<講師の感想>

4回目にして、ようやく公園探索実現!!30度前後で暑さはあるものの雲が多く、少々風もあったため、何とか外出ができました。えりこさん、ちょっと日焼け?顔が赤くなっていましたが、1時間半ほど公園をめぐり様々な木々、花、草を観察。名前がわからないものは、グーグルの撮影検索で名前を確認(一部?の物もありましたが)アジサイなど以前の観察から変化のあったもの、クサギなど今回は花で秋には実がなりそうなもの、など季節の変化をこれからも学べそうで楽しみです。

玄関で開始のスイッチ ON

いよいよ公園へ!



百日紅の枝をのばしてタッチ! 前回より実が大きい?

白い花もありました



公園のあちこちに木や花や草が。けやきの幹はゴツゴツ

キツネノマゴ

ネコジャラシ



つゆ草



ミズヒキ



アガパンサス



ひまわり!!

前回室内で観察したアベリア

触ってみました。



イヌサフラン



クサギ 大きな花です。

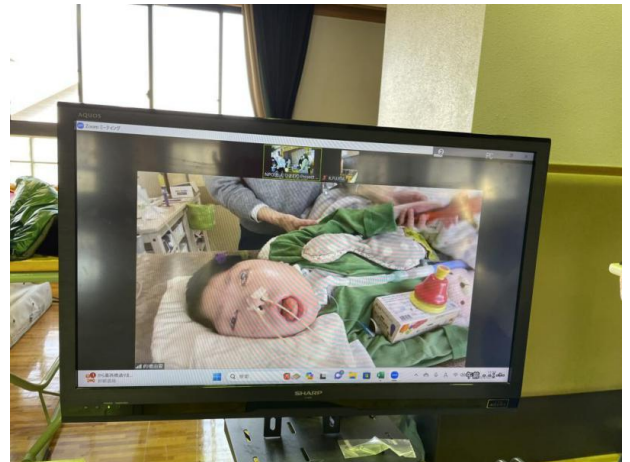


*秋には、こんな実になるらしい是非観察したいね。

c) 音楽療法 2024年2月3日(土) 音楽療法

音楽プログラム	使用楽器	ねらい
1) アイネ クライネ ナハ トムジーク	アップライトピアノ	モーツァルトを学ぶ
2) こんにちは	ツリーチャイム	コミュニケーション
3) 3・3・7拍子で動こう	アップライトピアノ	触覚と聴覚同時刺激

オクラホマミキサー 藁の中の七面鳥		
4) 3・3・7拍子で太鼓	太鼓(大) 和太鼓(小) 締締太鼓 鳴子 タンリン	肢粗大運動 言語的コミュニケーション 目と手の協調 協調性の向上 リズム刺激
5) まめまき	同上 CD ラジカセ	同上 擬音語 擬声語とリズム刺激
6) 雪	同上	同上
7) 星の世界	アップライトピアノ	見当識の確認。星空がキレイな2月に 星にちなんだ曲を鑑賞 モーツァルトっ てどんな人?
8) きらきら星変奏曲	グロッケン、テレビ、シロフォン 鉄琴 アップライトピアノ	作曲家を学ぶ
9) 焚き火	トーンチャイム デスクベル	クールダウン



- ・新宿養護学校体育館で行う集団学習の音楽療法にオンライン参加
- ・使用楽器:ベルハーモニー(自宅へ学校と同じ物をひまわり ProjectTeam で用意)



- ・挨拶ではベルを鳴らししっかり参加できた。・ピアノの演奏もよく聞いていた。
- ・モニター越しではあるが、Mさんの顔の肌の色艶がとても良いように見えた。

(e) 訪問大学おおきなき

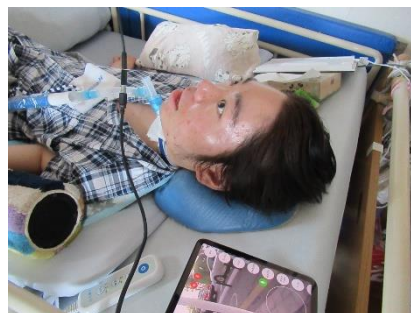
①事例I

2022年8月9日(火) 13:30~15:30	訪問者:相澤 伊藤
学習内容	様子
<p><分身ロボット OriHime を活用した社会見学></p> <p>1日目——</p> <p>OriHime の操作練習 (OriHime-eye + Switch と分身ロボット OriHime) 使用</p> <p>停留時間 800ms を使用</p> <p>・抱っこスピーカーを使用。</p>	<p>・この日の午前中は、1 時間ほど早く起きてしまったので、お母さんは寝てしまうのが心配。でも、着いたときは目がぱっちり開いていて、機材の準備をしている間も起きたまま待っていられた。</p> <p>・今回の目標は OriHime を視線入力で動かすことができることに気づき、自分から視線で入力してみてその変化に注目することにおいた。</p> <p>・はじめの段階で、いくつかの丸の中を注視することで OriHime が決まった動きをしたり、定型文を読み上げさせたりすることができることには気が付いていなかった。顔の横に OriHime をおいても、モニターを見ていると、あるボタンを注視して OriHime に変化を起こさせても、それに気が付いて OriHime を見たときにもうアクションが終わってしまっていた。</p> <p>・そこで OriHime を伊藤さんにも手伝ってもらって、目と同じ高さにまず持ってきた。それでも画面と OriHime の両方を見るのは難しそうで、結局、かなり、画面に OriHime をかぶせる状態で視線入力をするようになった。</p> <p>・OriHime を遠くに持って行って、お母さんを映し、やりとりするのも少しやってみたが、ピンとこないようだったので、また、OriHime は、近くに持ってくることにした。</p> <p>・授業の後半で、W さんが久しぶりの笑顔になった。視線の操作とロボットの動きが頭の中でピピッとつながったようだ。この笑顔の後にしばらく OriHime に変化の起こるボタンを注視して確認することをしていた。</p> <p>・「今回の目標達成したね」と拍手をすることができた。距離を取って腰をかがめて OriHime を持って差し出していた伊藤さんの努力も実ったといえるだろうか。</p> <p>・Wさんは、画面の真ん中を見る習慣が身についていて、モニターの位置をずらしても、ほぼ真ん中を見ていた。そのため、真ん中にある「会話」というところを注視して「50 音表」の画面にすぐ移行することになった。その後、ひたすら文字入力をし続けてしまうのだ。偶然、体の部位「胸」「腹」「足」というような漢字の選択画面に移行して、ずっと体の部位を読み上げ、その時はお母さんがその部位に触れてみたりしてくださった。もちろん、意図的な発信にはなっていないとは思いますが、興味・関心がないとは言いきれないことだと感じた。</p>



②事例2

2022年9月 13 日 (火) 13:30~15:30	相澤 (伊藤、金森)
学習内容	様子
<p><分身ロボット OriHime を活用した社会見学> 2日目—— カワスイ川崎水族館の見学。</p> <p>OiriHime eye +スイッチ →iPad+Zoom 併用</p> <p>・抱っこスピーカーを使用。</p>	<p>・着いたときは目がぱっちり開いていて、特別な日である緊張感を感じているようだった。</p> <p>・始めは、視線入力対応の OriHime eye+switch でスタートしたが、すぐ映像が切れてしまったので、より安心な iPad で見ることにするが、こちらもやや不安定で、動いている時の動画は画像がとても見にくいので、Zoom を早くからつないでもらい、WさんにはZoom のきれいな映像の方を見てもらうことにした。時々、iPad のほうがアップできれいな時に見てもらったが、2つ見るものがあると、集中できなくなる可能性があるため、Zoom に絞ってしまった。その点、OriHime の存在感は薄くなったが、OriHime は常時、On のまま動いてもらったし、ガラスに反射して映像に顔を出るので、存在感を感じることはできた。</p> <p>・通所施設の遠足で、W さんが集中して見ていたという動物の餌やり、はじめに水族館の魚の餌やりを見せてもらい、よく見ていたが、わかりにくさはあったかもしれない。次のカビパラはアップにしてみたら、餌やりシーンは分かりやすかった、W さんの目はびっくりした時のように大きくなり口も動き出し、よく見ていることが分かる。</p> <p>・ちいさな魚の紹介になるとやや目力がなくなっていったが、たくさんの魚が集団で動いているところでは、目が左右に動いていて追視しようとしているのが分かった。カブトガニの裏側のたくさんの足があがくように動いているところなどは、また目が大きくなっていて、よく見ていた。</p> <p>・そして、最後は、14 年ぶりの川崎駅のロータリーを見学。この時も昔の記憶とつながったのか、再び目が大きくなり、ずっとびっくりした表情で見ていた。川崎駅周辺の映像にはこの日初めての笑顔が出た。</p> <p>・画面を終了させた後も余韻が残っていた。W さん、名残り惜しそうな表情だった。</p>
<p>・授業料 1,000 円受領。 ・次回は、10 月 4 日 (火) 13 時 30 分～</p>	



③事例③

2023年10月19日(金) 10:00~11:50		訪問者 相澤
学習内容	様子	
<p>・スライドスイッチの操作</p> <p>1. にぎる</p> <p>2. 左右に動かす</p> <p>3. スイッチインターフェイスでiPad とつなぎ、操作練習。</p> <p>・アプリは「ボイスブック」に「Butter」うや「夜明けに口ずさめたなら」の動画を入れ、10秒ごとの再生をスイッチで行う。</p> <p>→doorsim</p> <p>→sensim</p> <p>・視線入力でsensimのような鉄道シュミレーターをする。</p> <p>→今回は電車を駅から出発させるまで。</p>	<p>・グリップの握り方は、手掌に深く握り込むのではなく、指を伸ばし気味で挟むような握り方になっている。支点になる肘に滑り止めを置き、スイッチの板の下にも滑り止めを置く。・握りは安定している、左右に介助して滑らせてガイドするが、なかなか本人の動きは出てこない。</p> <p>・発作があったようで、余計に力が抜けるまで時間がかかった。</p> <p>・「Butter」が流れるとパツと笑みがこぼれた。しかし、予想を裏切りすぐ止まってしまう。これは期待外れだったのか、少しテンションが落ちたかもしれない。自分から動きはあまり見られず、動きが起こそうとした時に上向きの力となり、スイッチを持ったまま手を挙げることにつながったのが2~3回。</p> <p>・曲を変えても難しい。左に動かす方が楽そうなので、左側のスイッチの底を持ち上げて斜めに見してみる。</p> <p>・途中2方向スイッチも試すが、腕の自重でスイッチが押されてしまうので、こちらでも斜めにし、左下を高くして自重がかかった状態で真ん中にレバーが来るような位置を探した。でも、横への動きより斜めの動きの方が出にくいようなので、これも今回は断念し、スライドスイッチに戻した。</p> <p>・2~3回、自分の動きでスイッチを入れられたが、目の開きが細くなり、ぼーっとしてしまうこともあり、難しいと本人が感じているようなので、今回は取り組みを止める。</p> <p>・視線入力を始めることになると、本人の姿勢がぴんとし、両目を見開く状態に切り替わった。やはり、スイッチより視線入力のほうが自信があり、待っていましたという感じである。</p> <p>・今まで左しか行っていなかった視線が右にも動き、斜視の左目も使っている。</p> <p>・キャリブレーションで苦労したが、ポイントを絞り改善もでき、Sensim(電車のアプリ)を試してみる。</p> <p>・アクセルとブレーキの位置に画面上にシールを貼る。アクセルを黄色、ブレーキを赤にしたが、ブレーキの方が入れやすい、つまり赤色の方が見やすいようなので、色を入れ替える。</p> <p>・警笛の位置は見にくいだが、1回鳴らすことができたら何回も鳴らしている。電車を動かすまで、アクセルを5回見なければならないが、ブレーキと位置が近いので、3回アクセルを見ても2回ブレーキを見てしまい、やり直しになってしまう。</p> <p>・最後は1発勝負にして、1回、アクセルを見るだけで発車できるようにして成功する。</p> <p>・視線はずっと目標に向かっていて、自信のある視線入力で、好きな電車という題材で、成功体験ができ、最後に本人も笑顔で終えることができてほっとする。</p>	
<p>・授業料 1,000 円受領 次回は未定。</p> <p>・10月24日の〇〇区の研修会で、少し話してもらうことをお願いした。</p>		

(f) 在宅訪問学習支援事業「SHJ 学びサポート」

①学習記録I

①活動者・報告者 石橋和子

②開始～終了時間 2023年12月27日10時30分～12時00分

③対象児氏名(〇〇さん) 保護者(ヘルパーさん)

④活動内容 音楽

⑤活動の様子

今回は私が伺う直前に、少し大きな発作があったとの事で、ヘルパーさんと一緒に暫く様子を見守りました。少し落ち着いてきたら、今度は深い眠りに入ったみたいで、また暫く様子を見ることになりました。



静かなお部屋には、Kさんがお花の先生と一緒に活けたというお正月用のお花が綺麗に飾られていました。その後ろの壁には、成人式で見事な晴れ着を着て、お母様と一緒に嬉しそうに笑っているKさんの写真が飾られています。改めて素敵な写真だなあと眺めながら、Kさんがいつもこんな表情でいられたら良いなと思いました。さてウトウトしつつも、やっと少し目を開けたようなので、Kさんに挨拶をして、ベッドサイドで静かに歌うことにしました。

アラジンの「A Whole New World」や「Love me tender」などバラードを、ゆっくりと静かめに。でも、どちらかと言うとリズムのあるアップテンポの曲の方が好きらしいので、目を閉じているけど少し反応があったのを見て、アップテンポの曲も歌うことにしました。

まずはKさんの好きな嵐の「ハピネス」を。続いて「パプリカ」、そして「おもちゃのチャチャチャ」と「五匹のこぶたとチャールストン」を。ヘルパーさんもシェーカーを持って、一緒に鳴らしてくれました。すると、Kさんの目が開いてきて、少し笑ってくれたようでした。それを見てヘルパーさんが、「Kちゃんは、けっこうブルースも好きみたいですよ。」との事で、最後はちょっと賑やかにブルースを2曲聴いて頂きました。

終りかけになって、やっとすっかり眼も開いて楽しそうに笑ってくれたようでしたが、今回は残念ながらエイサー太鼓を使う時間がありませんでした。でも、Kさんの発作も治まって、壁の写真程ではありませんが、最後はニコニコ笑って聴いてくれたようで良かったです。

⑤保護者のニーズ

音楽を楽しんで欲しい。何か楽器が出来る様になったら嬉しいとの事。

⑥次回活動予定 ○月○日10:30～

②学習記録2

①活動者・報告者 松本健太郎

②開始～終了時間 2024年01月28日13時30分～15時30分

③参加者 対象児氏名(〇〇さん) 保護者(母)

④活動内容 目と手の協応/文字/スイッチ操作

⑤活動の様子

- ・目と手の協応:スライドスイッチを左手に設置し、ステップバステップにつなぎ、始まりの挨拶をしました。内側に動かす動きの後に、スイッチがつながっている外側にスライドさせて挨拶の言葉を再生できました。ボコボコリングを左右の手で引きました。肘や腕を支えることで動きが出てきました。次にカバサを手のひらの下に置くと、自分の方へ引く動きでチェーンを滑らせて連続的なフェードバックを楽しんでいました。両方の手で良い動きが出ていました。玉落としは、肘や腕を支えると玉を押し込む動きが確認できました。前回同様、落ちた瞬間「あっ、今落ちた」と感じる表情をしていました。スライディングブロックは、特に肘を伸ばしてブロックを前に滑らす動きを確認しました。
- ・文字:練習する文字の決定は、指伝話文字盤をスライドスイッチと一緒に操作しながら決めました。な行のところで瞬きしたので、な行を凸文字をなぞって練習することにしました。「な行にはなにわ男子のなにがあるからお得だね」と話しかけると笑顔になりました。全ての文字を書き終わった後に、指伝話文字盤を使って「なにわだんし」と書いてみようという提案して、書き始めました。スライドスイッチはこちらと一緒に操作したのですが、途中から首の動きがスイッチの「送る」方向と「決定」方向に連動していることに気づきました。そこで、首の動きに合わせて後半はスライドスイッチと一緒に動かし最後の文字まで書いて、iPadに発声させました。満足そうな表情で自分で文字を綴っている実感が持てたようでした。
- ・Keynote スライドスイッチ操作:タッチスイッチを左右の頬それぞれに設置し、なにわ男子の歌の歌詞を覚えるためのスライドを操作しました。固定には、どっちもクリップを使いました。左頬の方がよく動くので、「次に進む」方にして、右頬を「もう一度聞く」にしました。今回は、右頬をほとんど使わず、左頬で進めることが多かったのですが、回数を重ねて、設置位置などの精度を上げていきたいです。



⑥保護者のニーズ スイッチ操作の向上

⑦次回活動予定 〇月〇日13:30～

(g) 訪問カレッジ Enjoy かながわ

①事例Ⅰ A 性別:男 障害の状況:四肢麻痺、全盲

・学生のカレッジへの願い:学校で学んだことを継続したい。音楽、国語(朗読)、情報(ICT 支援)などで楽しみを増やしたい。

	実践 1	実践 2	実践 3
体調	体調は良好。	体調は良い。 二日間の外出の疲れが少しある	少し前に発熱して回復したところ、緊張も少なく手も温かく、良い表情でした。
カレッジの内容	①季節の果物さくらんぼ(果物)とビワ(果物)について ②音楽会の鑑賞 ③本読み「おじさんのカサ」 ④ゆびあみ練習	①ロケット花火 ②暑中見舞い ③ピッチング対抗戦	①紙版画 ②みかん(オレンジ)と冬至祭 ③サンタの本 ④きよしこの夜の合奏
教具や教材	①さくらんぼとビワ 香りと重さによる違い ②ビワの音楽 平家物語の語り 楽器琵琶の音色を聴く さくらんぼの曲 大塚愛「さくらんぼ」iPhone ③本「おじさんのカサ」雨に濡れても BGM マスクゴム	①カサ袋を膨らませたロケット ダンボール箱、花火の映像 ②かき氷の歌 メラミン スポンジ 絵の具 ③布 ブラスチックボール 得点板 高校野球のライブ音	①雪だるまとツリーの紙版・台紙、横須賀海軍カレーの空き箱、きのこの山の空き箱、ハガキ、スタンプインク、のり ②みかん、みかんの枝造花、みかんの歌、みかんの花咲く丘スピーカー、小さいリース ③イタリア語サンタルチアの歌、聖ルチア祭の歌「あのねサンタの国ではね」きよしこの夜ギター演奏の曲 シュシュ鈴、短いレイNSTEICK
学生の様子	①香りの違いは難しいが口の近くに近づけられて口を動かす足も動かし、期待が大きくなり、笑顔が出ていた。二つをやさしくにぎり、違いを感じていた。ビワの音色に表情が動いた。音色が好きだそうです。「さくらんぼ」は、2番、3番と後半になると	①花火の映像音に慣れてから、ダンボールを叩き打ち上げる。カウントダウンに笑顔 ②かき氷の歌にも笑顔。メラミン スポンジに水を含ませ冷たさを感じてから、一緒に制作。 ③右手と左手に交互にボールを投げる。指でボールを掴む、離すを	①胸の上に紙を乗せ、そこでスタンプインクを動かすと面白いようで笑顔になる。右手人差し指で空き箱の点線を押す、鉛とキノコの型を切り抜き、ノリでハガキに貼る。支援員と一緒に白紙ハガキに刷る。2枚目のツリーと雪だ

	<p>笑顔が出てきた。しばらく聴き続けるのが良いそうです。</p> <p>②iPhone に顔を向けよく集中して時々口を開けていた。集中が途切れなかった。</p> <p>③絵本の読み聞かせをしっかりと聞いていて、BGM に笑顔が見られた。</p> <p>④左手の指は最初曲げていたが 5 本にマスクゴムを回すと伸ばして、柔らかくなっていた。数分やって糸を一度戻す。次回、指編みを始めを確認した。</p>	<p>繰り返す。上手く紙容器に入ることもあり 3 対 3 の同点。</p>	<p>るまの版の時は自分で右手を動かしてやる気を見せた。インクを載せ紙を乗せて上から擦る時は手をよくうごかした。版画絵は部屋に飾るそうです。</p> <p>②みかんの皮をむくと香りが広がり口を何回かバクバク動かした。みかんの花咲く丘は知っているという表情を見せた。イタリアのサンタルチアの歌の時は全身に力を入れ歌うように動かし、聖ルチア祭のサンタルチアは聴き入っていた。聞き分けることができている様子 絵本の話よく聴いていた。</p> <p>③曲が流れしばらくして右腕を動かし鈴を鳴らした。</p>
家族の様子	<p>一緒に音楽会の様子もみられ、途中吸引をされ、本人が受けやすいように整えてくださった。</p>	<p>合間に手助けを入れてくださる。</p>	<p>そばにいて、ベッドの高さを調整して下さり、本人の様子を見守って、よく聴いていましたねなどと言ってくさった。</p>

②事例2 B 性別:女 障害の状況:四肢麻痺

・学生(家族)のカレッジへの願い:視線入力装置を使った訓練、パソコンやスイッチの利用、学校の学習の延長(国語、音楽、家庭科、美術など)

	実践 1	実践 2	実践 3
体調	<p>体調よい。吸引が少し多め。休憩なしで活動。声の出る発作が 1 回</p>	<p>体調は安定。心拍数は 90 から 100 と高く、夏は覚醒が高い様子。目に力がある。</p>	<p>体調かわらず</p>
カレッジの内容	<p>①バイオリン ②フェルトボール仕上げ ③フルーツティーづくり ④布裂き</p>	<p>①始まりの音(ツリーチャイム) ②バイオリン ③裂き織り ④お話 ⑤終わりの音(カリンバ)</p>	<p>①始まりの挨拶 ②視線入力 ③三つ編み ④花びら染め</p>
教	<p>①バイオリン</p>	<p>①割いた布</p>	<p>①ツリーチャイム</p>

具 や 教 材	<p>②蒲団針 糸</p> <p>③耐熱ガラスのポット 紅茶 オレンジ リンゴ 蜂蜜 絵本:10分スイーツ ナイフ ミニまな板</p> <p>④布、アームサポーター</p>	<p>②絵本スイカ!夏のスイーツの本</p> <p>③iPad</p>	<p>②視線入力セット(花火 テクノ音楽 スクラッチ お絵かき)</p> <p>③ふわふわ毛糸</p> <p>④さざんかの花びら 酢水 洗濯ネット ハンカチ ジプロップ</p>
学 生 の 様 子	<p>①バイオリンは3回目。右手に弓を持たせると横に動かす。慣れると動きがスムーズ。最後に支援員のバイオリン演奏を胸にあてて聴く。振動も良い。</p> <p>②右手に針を持ちフェルトボールを突き刺し、左手の手のひらにのせ糸を引く。親指でフェルトボールを押す。</p> <p>③材料の香りを楽しみ一緒にフルーツティーを作る。10分スイーツの絵本は良く見る。作ったフェルトボールのなべしきにティーポットのをせ活用してみた。</p> <p>④裂いた布での製品作り一歩として布裂きに挑戦した。アームホルダーに布をはさみ反対側で引っ張り裂いていた。手へのひびき、ピリッと裂ける音を感じながら進めると2枚目では右手をグーンと動かして引っ張ることもできた。</p>	<p>①ツリーチャイムを鳴らし始まりの挨拶</p> <p>②丁度よいクッションにバイオリンを載せ、右手で弓を動かす。はじめの頃より動きがまとまり、連続して音が弾ける。12月に向け、きらきら星を練習しようかと本人に話してみる。</p> <p>③裂き織りした布を三つ編みにする。ベッドに紐を渡し、その真中で交代に紐を持ち、三つ編みする方法が一番適していた。出来上がりをどんな作品にするか思案中。繰り返すことで、動きにまとまりが出てくる感じがする。</p> <p>④絵本 よく見てお話を聞く。スイーツの本を見ながら次回のスイーツづくりの相談。乳製品はアレルギーがあるそうです。iPadのカリンバを鳴らし終わりの挨拶。漸くウトウト。</p>	<p>①始まりのツリーチャイムを5回鳴らしやる気を表現する。</p> <p>②視線入力スタート時は覚醒が落ちる。10分弱休み、視線入力を再開。画面を見るとテクノ系の音楽と幾何学模様が出る導入から段々目覚める。その後のスクラッチゲームは全体の92%まで広範囲に開ける。最後はお絵かき。背面の色を変えたり、スプレーに変えたり、記録したりと時折勝手に操作を交え、書き上げた。30分近く集中できた。</p> <p>③②の途中で休憩。休憩中に毛糸の三つ編みをする。</p> <p>④さざんかの花びらをもぎ取る。酢水ともみ、花卉の色を抽出した。耳もとですり込む音や酢水の冷たさを頬で感じた。上手く染まるか次回のお楽しみ</p>
家 族 の 様 子	<p>バイオリンの弓を持ちやすいようにベルトをつけ見守ってくださる。アームホルダーを出してくださり布裂きでの使い方や三つ編みでの手の動かし方等を一緒に考えて下さった。</p>	<p>色々アイデアを出しながら、活動を見守ってくださる</p>	<p>見やすい位置に姿勢や顔の位置を工夫してくださる。やってみようかなど、やんわりやる気スイッチを押してくださる。</p>

(h) NPO 法人子どもホスピスプロジェクト

	Uさん	Iくん
学習内容	絵本の制作	受験対策
年間計画	2024 年度に向けて絵本の作成、文章構成など	目指した学校に向けた闘病中の抜けてしまった勉強
学習時間	30-60 分	30-60 分
活動記録	①テーマ 子供のやりたい夢を叶える ②学習内容又は学習活動 文章の構成 ③使用教材 児童文学作家の絵本 ④学生の学習の様子 目線入力での会話だが生き生きしている。	①テーマ 子供のやりたい夢を叶える ②学習内容又は学習活動 訪問での学習 ③使用教材 教科書 ④学生の学習の様子 不安を抱えた親子が、訪問で安心して学習指導を看護師から受けられている。
家族の関わり	信頼関係がとても重要、保護者との関係が築いていけないと支援が難しい。悩みが多い。心のケアが家族も必要である。	

(i) 訪問カレッジ@きーぼ岡山

①事例I Aさん 男性 人工呼吸器使用

- ・PC 意思伝達装置「伝の心」をピエゾ ワンスイッチ(左手の甲)のみで操作可
- ・日常的な意思疎通は声での呼びかけ、視線での YES,NO、必要時のみ単語発語。

学習計画	年間計画	・ゲームがしたい。SNS を使えるようになりたい。ユーチューバーになりたい。
	時程	隔週土曜日 13:00~16:00 ふたり訪問(ヘルパーとしてひとり、ゲームボランティアとしてひとり)
活動記録	①テーマ	「ゲームをする!」
	② 学 習 活 動・内容	・ゲーム時は、左右両手足にそれぞれ自作スイッチをセッティング。(持ち込み) ・本人が大好きな NINTENDO「パワフルプロ野球」では、本人が操作できるタイミングや押す長さなどを微妙に調整しながら、かなりのゲーム操作を自分で行うことができるようになってきた。 ・ある程度ゲームができるようになったところで、YouTube チャンネル、Facebook 個人ページ作成。LINEアカウント作成。利用できるように練習。 ・支援者が編集した動画をラインで送付⇒自分でダウンロード、YouTubeチャンネルにアップ、Facebookにお知らせ、友達にLINEでお知らせ。 ・動画編集は練習したが、本人が断念。「難しいのでやってください」

		<ul style="list-style-type: none"> ・本人の世界を広げるために、ゲーム対戦相手(ゲスト)を迎えることに。 ・フレックスコントローラの性能と本人のできるスイッチ操作を組み合わせででき、本人がやりたいゲームを探し、少しずつ増やし、当日の本人選択で遊んでいる。 ・研修会にて、ゲーム操作のデモンストレーションをしてもらった。外に出ることをあまり好まない本人がとても楽しみに出かけ、大勢の人に認められることができた。
	③使用教材	<ul style="list-style-type: none"> ・NINTENDO SWITCH、ゲームソフト「パワフルプロ野球」「桃鉄」他 ・フレックスコントローラ(ホリ) ・スイッチ入力確認用ブザーライト(アクセスエール) ・自作スイッチ4種、固定用具いろいろ
	④学生の学習の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネット上にはいろいろなゲームがあるが、自分でストレスなく操作できるものは少ない。タイミングなどを工夫しながら真剣にゲームに興じている。 ・YouTubeの再生回数の2000回突破をととても喜んでいて。 ・自分からのLINEは少ないが、訪問日の数日前にはスタンプが送られてくることから、楽しみにしていることが伺われる。特にゲスト訪問を楽しみにしている。
	⑤家族の関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・家族はPCやスイッチ操作の知識が少ないため、訪問によりできることが増え楽しい時間を過ごせていることを喜ばれている。 ・家族が必要に応じケア対応をしていただけている。とても安心して活動できる。

②事例2 Bさん 人工呼吸器使用 意思疎通は、視線の動きや表情の変化が主。スイッチ利用を練習中。

学習計画	年間計画	<ul style="list-style-type: none"> ・「何がしたい」(PP 自作教材)や「おはなしノート」(http://ohanashi-daisuki.com/)を用いた聞き取りにより、メイン活動をクッキングにした。 ・視線入力学習(動画再生、ゲーム、描画等)、スイッチ学習などを継続して行う。 ・活動の振り返り、記録としてFacebookによる発信活動にも取り組む。
	時程	毎週月曜日 13:00~16:00
活動記録	① テーマ	<p>「いろいろなことにチャレンジしよう」</p> <p>※クッキング「パフェを作ろう」(夏季は衛生面を配慮し火を通したお菓子に変更)</p>
	② 学習活動・内容 (計画例) (活動例)	<p>第1、第3 クッキングを中心に、生け花、星の話等(ふたり訪問)</p> <p>第2 NINTENDO SWITCH「マリオカート」を中心に(ひとり訪問)</p> <p>第4 季節の話、視線入力等いろいろ(ひとり訪問)</p> <p>「桃パフェ」「いちごパフェ」「なしゼリー」「柿ゼリー」「あんこ」「米粉せんべい」等</p> <p>①計画(インターネット検索と聞き取り)</p> <p>②材料の学習 ⇒ 調理 ⇒ 実食(味見)・・・周囲の方に食べてもらう</p> <p>③写真で振り返り、Facebookに様子をアップ</p> <p>・今日の活動紹介</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・からだほぐし ・材料紹介（たまに味見） 産地や種類などのミニ情報も。 ・調理 <ul style="list-style-type: none"> ～ベッド上での作業を見るため手元を Web カメラで撮り、モニターに映す。 ～ヘルパーと共にナイフやスプーン等の調理器具を持ち、実際に操作する。 （視線入力によるミキサー操作をしたこともあるが、本人が実物の方に目を向けることが多いため、実際の体験の方を重視することにした。） ～途中で舌に載せて味見をする。（ミルクのみの経管栄養のため味見のみ） ・実食（味見） <ul style="list-style-type: none"> ～ヘルパー、母などと共に実食。誰から食べてもらうかを本人指示で決める。 （冷やす時間などを使って、天体（星の話）やお祭りの話、視線入力ゲームなど） ・季節の花による生け花
③使用教材	<p>クッキングに必要なものはほぼすべて持ち込み。（材料、調理器具等）</p> <p>視線入力やスイッチ学習に必要なものは、PC、iPad 等を含めすべて本人所有（保護者が購入）（導入期で本人に有効かわからない期間のみ持ち込み試用）</p>
④ 学生の学習の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・普通小中高に通っており、ベッドサイド学習の経験が少ないため、さまざまな調理用具に興味津々で目をしっかり開けて注目して活動できる。活動中の「重たい」「固い」「柔らかい」「ざらざら」などをみんなでワイワイ言いながら体験することがすべて世界を広げることに繋がっている気がしている。 ・天体（星）にかかわる話も好きなようで、興味深く聞いている。
⑤ 家族の関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・家族の視線入力学習への希望で始まった生涯学習ではあるが、現在はさまざまなことを知りたいという気持ちに応える形で活動している。 ・重度訪問介護を 24 時間利用しており看護師資格のあるヘルパーが必ずいる。さらに、「きーぼ岡山」からは自費利用ということで訪問。 ・家族は、ヘルパーがいろいろ学ぶことで日常が豊かになることを望んでいる。約 1 年半、一緒に活動する中で、ふたりのヘルパーが視線入力やスイッチなどの扱い方全般をマスターされ、3～4 人のヘルパーが視線入力の活動を日中に取り入れることができるようになっていく。さらに一番詳しくなったヘルパーは、「写真を撮る」ことを日中活動に取り入れるために、スイッチや iPad、PC のつなぎ方を自分で考え、実践することもできるようになった。訪問時だけでなく日常が豊かになったことがとてもうれしい。（家族も私たち支援者も） ・本人は大人の年齢であることから、ヘルパーと活動することを好むが、家族が味見の際には必ず来てくれたり、ゲームには一緒に参加してくれたりするなどとても協力的であり支えになっている。

*「何がしたい」の パワーポイント教材は、年度初めに使用。クッキング、ゲーム、おんがく、しぜん、せか

い、そうさくの6択と説明となる下位項目がある。

*視線入力学習では、EyeMoT シリーズ(島根大学 伊藤先生監修)のゲームを中心として、自作パワーポイント教材、ネット上のゲーム、ソフト等を利用。YouTube を選ぶための練習としてのパワーポイント教材を徐々に難易度高くしている。また、NINTENDO SWITCH マリオカートをヘルパーと二人で操作したり、対戦したりしている。

(4) おわりに～学びのかたちは、無限大

◆「学び」というのは、新しい世界と出会って、自分のなかに新しい意味が生まれてくる体験のことです。そして新しい意味が生まれてくる瞬間には、必ず喜びが伴います。この喜びは人間にとってとても根源的なものです。

◆学ぶことを通して、自己肯定と自信を得ることができる。この「学び」の回路を持つ人が「学び力のある人」です。

齋藤孝 「学び力」 宝島社

実践報告をお読みいただいて、カレッジ生の学びについても、新しい世界との出会い、ということに気づかれたと思います。その新しい世界を、学習支援員の方々が、もっともっと喜びのある世界へと広げたいと願いつつ、待っているカレッジ生のところに、運んでくるのです。楽器の事例として、琵琶を上げていますが、その音色は、幽玄で、独特の世界に人々を誘います。「聞き入っています」と書かれています。新しい意味のある体験を、言葉ではない静かな喜びで、受け容れ、楽しんでいます。公園に出かけ、木々の肌や葉に触れて、手触りや匂いから、木の存在を学んでいます。戸外で、風のそよぎや太陽の温かさを感じることも、気持ちを覚醒させ、家庭ではできない学びを展開しています。

障害の重い方の学びに当たって、重要なことは、感覚に働きかけることです。聞いて、見て、触って、匂いを嗅いで、知ることです。感覚を活かすことは、どんなに障害が重い方でもできることです。「分かった!」「気づいたよ!」という喜びは、だれにとっても根源的なものです。訪問カレッジは、体験・体感できる機会と場を提供することが使命です。

次に重要なことは、入力装置の工夫によって、文を書いたり、絵を描いたり、コミュニケーションのツールとして、オンラインでの交流ができています。入力装置を一人一人に合わせて作成し、その可能性と活動世界を広げています。分身ロボット OriHime を活用した社会見学など、訪問カレッジならではの質の高い取り組みです。入力装置の紹介とフィッティングは、カレッジ活動が担っている大きな役割です。そこに活動の特性と意義があります。訪問カレッジのまなびのかたちは無限大です。

訪問カレッジの活動は、学習プログラムの展開とともに、家族支援という役割を担っています。在宅生活の場合、ご家族は孤立しがちです。訪問学習の場合は、ほぼ、同席していますし、ご協力をいただきながら、学習が展開しています。時には、学習プログラムのアイデアを出して下さったりしています。ご家族にとっては、本人の笑顔を何にも代えがたい宝になっています。

学習支援員の献身的な活動も、この事業の信頼感を増しています。

本人支援は、家族支援となる 本人主体の活動を！

- 毎日点滴が必要で、外出がままならない中、学習支援員の先生方の授業を楽しみにしています。血圧や水分量のコントロールのための入院が増え、通所したり、リハビリを受けたりする機会がめっきり減り、身体のかたさや変形の進行が気になっています。(ターミナルのケース)
- 「からだ」の取り組みの後には、身体がとても楽になるようで、その日は一日中機嫌良く過ごせます。
- 私が抱き上げることが難しくなってきたので、抱っこで身体を起こしてもらうことで、排痰もスムーズになり、視界も広がりますし、色々な姿勢をとり続けることができとても助かっています。
- 最近覚醒している時間が増えてきたので、「楽しいことをたくさんしよう」と考えて下さっている先生方に応じて、笑顔で勉強できる日も近いのではと今後が楽しみです。

最後に、重い障害のある方の学びに当たって、重要なことは、価値観・人間観です。その人の良さや得意分野を尊重し、できることを活かして「学び」を進めることです。表出が困難な方も多いのですが、学習支援員が「できること」を見つけ出し、そこを手がかりに学びにつなげて行く営みが、学習支援の基本です。下記の提言は、学校時代だけではなく、生涯を通じての学びにつながっています。

「学びたい」という願いは、誰でももっているという価値観・人間観を基盤として、今後も「学び」を広げていきたいと考えています。

支え、支えられる関係づくり

- 学習支援員の方は、「障害のある方は、発語はなくても『ことばの世界』に生きています。周りの人からの言葉かけをよく聞いています。それは生活年齢からくる言葉の積み重ねと考え、生活年齢を大事にしています」と話し、「ご家庭が協力的で、家族のあり方などを学ぶことも多く、やりがいにつながっています。『私自身の生涯学習』でもある」と結んでいます。
- 「訪問カレッジ」の学びには、可能性へのチャレンジがあり、感動の瞬間に立ち会える時もあります。学びによって学生を「支えている」のですが「支えられている」と、双方向の関係性が成立しています。このことは、人を動かす「支え合い」のサイクルです。 「はげみ393号」

キャリア教育留意点7つのポイント（一部改変）

「いま、対話でつなぐ願いと学び」キャリア発達支援研究8」

- ① 本人の困難性に目を向けて「できない」と捉えるのではなく、児童生徒のもつ「よさ」や「可能性」に目を向ける。(得意分野の把握)
- ② 「ありたい」「なりたい」という本人の「思い」や「願いの理解に努める
- ③ 「思い」や「願い」を踏まえて、「できる」ことを生かした学びを追求する。
- ④ 「学び」における人・こと・ものとの関わりを工夫する
- ⑤ 本人のより良い学びのために様々な他者との連携・協働する。
- ⑥ 本人が物事に向き合い、持つ力を発揮する姿について、内面を含めて捉えるようにする。
- ⑦ 児童生徒のいまの学びと将来をつなぐために「対話」に努め取り組みの過程を意味付け、価値付ける

(文責 飯野順子)

2. 運営・地域連携

(1) 運営・地域連携に関する実践研究

(a) 第1回 連携協議会

1. 日時 令和5年7月23日(日曜日) 10:00~12:00

2. 開催方法・場所 会議室にて対面およびオンライン会議システム(Zoom)によるハイブリッド会議

(1) 会議室で対面参加の場合は、会場へいらしてください。

会場名: かながわ労働プラザ(住所 〒231-0026 神奈川県横浜市中区寿町1丁目4)

JR 京浜東北・根岸線「石川町駅」中華街口(北口)徒歩 3分

(2) オンライン会議システム(Zoom)

3. 連携協議会名簿

	氏名	所属・役職	備考
委員	飯野 順子	NPO 法人地域ケアさぽーと研究所・理事長	
	山根 千知	神奈川県教育委員会生涯学習部生涯学習課	
	鳥井 健二	神奈川県子どもみらい局福祉部障害福祉課・課長	
	柏木 雅彦	神奈川県立茅ヶ崎支援学校・校長	
	名里 晴美	社会福祉法人訪問の家・理事長	欠席
	岩永 浩二	一般社団法人ピッカ・代表理事	オンライン
	高橋 幸子	國學院大学・教授	
	新井 雅明	田園調布学園大学・教授	
	奥野 康子	明治学院大学・非常勤講師	
	山口 秀子	神奈川県立スポーツセンター健康パラスポーツ課・主事	
	橋詰 理香	訪問カレッジ Enjoy かながわ保護者	オンライン
	小林 芳枝	訪問カレッジ Enjoy かながわ保護者	オンライン
事務局	新井 雅明	田園調布学園大学・教授	委員兼務
	奥野 康子	明治学院大学・非常勤講師	委員兼務
	山口 秀子	神奈川県立スポーツセンター健康パラスポーツ課・主事	委員兼務
	片山 由美	神奈川県教育委員会特別支援教育課・専門員	
	下川 和洋	NPO 法人地域ケアさぽーと研究所・理事	
	成田 裕子	NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会・理事長	
文科省	五十嵐 ^{ゆたか} 裕	文部科学省 総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課 障害者学習支援推進室 室長補佐	
	福澤 ^{しんすけ} 信輔	文部科学省 総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課 障害者学習支援推進室 障害者学習支援第一係 専門職	

4. 次第

司会: 新井 雅明(田園調布学園大学)

(1) ご挨拶

10分

①飯野順子（重度障害者・生涯学習ネットワーク代表）

②五十嵐^{ゆたか}裕様（文部科学省障害者学習支援推進室 室長補佐）

(2) 委員紹介 10分

(3) 令和5年度文部科学省「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」 10分
『重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援』に関する実践研究について説明
下川和洋（NPO 法人地域ケアさぼーと研究所・理事）

(4) 研究協議

①訪問型学習支援 訪問カレッジ Enjoy かながわの令和5年度の事業展開について 20分

ア 訪問型生涯学習支援の新たな取組

成田 裕子（NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会・理事長）

イ 訪問型生涯学習地域連携リーフレット作成と配付配布の方法について

片山 由美（NPO 法人フュージョンコムかながわ・県特別支援教育課専門員）

ウ カレッジ生関係者（保護者）から

・自宅で開催、地域の祭

小林 芳枝（訪問カレッジ Enjoy かながわ保護者）

・様々な学生との出会いと学びへの期待

橋詰 理香（訪問カレッジ Enjoy かながわ保護者）

エ 支援員から

②持続可能な事業運営に向けて研究協議 70分（途中休憩有）

(5) その他・次回に向けて

第2回 連携協議会 10月 8日（日）午前 かながわ労働プラザ（JR石川町徒歩3分）

訪問カレッジ「学びの実りアート&ミュージックミュージアム」（フォーラム含）

11月3日（金・祝）～4日（土） かながわ労働プラザ

第3回 連携協議会 2月10日（土）午前 神奈川県社会福祉センター（反町徒歩1分）

5. 配付資料

資料①令和5年度文部科学省「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」『重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援』に関する実践研究資料

資料②訪問型生涯学習支援 訪問カレッジ Enjoy かながわの令和5年度の取組

資料③訪問型生涯学習地域連携リーフレット

6. 会議記録

議題 司会：新井 ※以下、敬称略

(1) ご挨拶

①飯野：伝えたいことは「活動の豊かさ」「楽しさ」。分かったうえで広げ伝えてほしい。アイデアを支援員で交換しあい豊かさにつながっている。さらなる活動の豊かさを見てほしい。夢と希望を期待している。

②五十嵐：障害者学習支援推進室は設置 7 年目。全国37団体で取り組んでいる。本ネットワークも加盟団体が増えたと聞いている。学ぶことは生きること、という考え方には共感している。学びの届きにくい方、出向きにくい方への取り組みを今後も広げていってほしい。文科省実態調査より、広報誌 HP での情報提供を自治体はしているものの、当事者は知らないという結果も。情報を届けるあり方の検討をしていきたい。

(2) 委員紹介（※名簿に沿って紹介。）

(3) 文科省実践研究についての説明（下川）

- ・重度障害者・生涯学習ネットワークの団体のこれまでの取り組み。
- ・昨年度の取り組み。イベントのアンケートより。「学習」は苦手でも「学び」には前向きなものも。
- ・学びの履歴をどのように残していくか、というテーマや、持続可能な制度化をしていくためには地域で財政基盤となるものが必要であること、人材育成、理解啓発。権利としての生涯学習も伝えていきたい。
- ・本年度スケジュールについて。連携協議会は 3 回予定。11 月にオープンカレッジ的な位置づけのアート&ミュージアムを計画中。
- ・障害者基本計画の中に「生涯にわたり・・・訪問支援を含む多様な学習活動」

(4) 研究協議

①訪問型学習支援についての説明

ア 訪問型生涯学習支援の新たな取組(成田)

- ・12 年間訪問指導だった一人の生徒。卒業後の生活。大学との連携、地域とのつながりを大事にして事業を開始。通学通所を前提にしない。学びあい。一人に対して複数名のチームで訪問。5 年間で地域の広がりもあり、現在 19 名カレッジ生。
- ・学生証、入学式、修了証、年間 5,000 円、支援員 2 名、
- ・今年度の取り組み

イ リーフレット作成について(片山)

ウ カレッジ生関係者から

- ・自宅で開催している朝市について(小林)・・・二か月に 1 回開催。長後でバリアもあるが地域の様々な人が参加。
- ・学生との関わりについて(橋詰)・・・自宅に来ていた学生が教員になったと聞いて喜んでいる。本人は大学生がくるのを楽しみにしている。学生生活を話してもらえたり、学生からの発信もあつたりするとおもしろい。

通所先での交流はあっても地域での交流はなかなかできない現状。

視線入力は秋のフォーラムがきっかけで始めた。

エ 支援員から

- ・支援員から(奥野)・・・「ともに学ぶ」楽しさ。出会ってみると面白いことがたくさんある。ピッカさんとの連携の広がりもある。学校での学びを継続したい、学校で学んだことをやってみたい、という声も聞く。
- ・支援員から(山口)・・・支援員間の共有をライングループでしている。支援員を増やすアイデアをもらえるとありがたい。

②持続可能な事業運営に向けて研究協議

(柏木) 茅ヶ崎支援学校のことを知らない地域の人も多い。共生社会実現に向けては地域で学ぶ場、地域企業等を進めている。朝市もいい活動。周知活動として「元気村マルシェ」に参加。推進担当者を学校においている。

視線入力装置セットを作って持ち歩けるようにした。

(成田) リーフレット配布の協力を学校にお願いしたい。

(柏木) 校長会でも伝えていきたい。

(岩永) 小林さん宅に出向いた。こうした形態は初めてで新たなアプローチを考えるきっかけになった。

(奥野) 歌、マジック、アートなど様々なエンターテイメント体験に広がる。

(高橋) 大学で教員養成課程に関わっている。教職免許には特別支援教育が必須になっているが、大学生は知らないことがほとんど。大学生も忙しいが、ボランティアサークルもあり日程調整がうまく機能すると可能性が広がる。大学でのフェスティバル等での取り組みを一緒に考えていけたらと思う。

(下川) 昨年度の報告書で、大学はインターンシップを単位化できないかという話も出ていたが。
 (高橋) 国学院では選択制で2単位。インターンシップ制度がある。
 (五十嵐) 福島大学でもボランティアサークルがあり、そこうまくつながるのが良いのではと。
 (鳥井) 話を聞いて重要な取組をしていると認識。福祉サービスに関わっているが、卒業後はすぐに成人のサービスに放り込まれる。活動費の厳しさも想像できる。まずは一緒に考えていけたらと。福祉側の課題も多々あるが、一緒に考えていきたいと思っている。
 (山根) 障害者の生涯学習という新しいキーワードだと感じている。お金の面でのことも一緒に考えられたら良い。県立図書館でのボランティア講座を開催。広報面ではまずは協力できる。そこに出向いて話をしてもらうことも可能。
 (成田) ボランティア講座として、市町村に協力依頼することを考えている。
 (山根) 県民センターのボランティアセンターに話をつなげ情報交換が可能。
 (鳥井) 社協が市町村ボラセンターとのつながりはつけることは可能。
 (福澤) 長野の社会福祉協議会からの出向で文科省に来ている。地域社協に登録している団体は意欲も高い。やる気にさせる話を直接していくこと、ハードルをあげずできそうなこと、イベント出店などさまざまな紹介してもらえと思う。
 (下川) ボランティアだけでなく落としどころはどんなところが考えられるか。制度化するには。
 (福澤) 継続するためには認知度アップ、また取り組みをどう進めていくかを検討はしていく必要を認識している。
 (5) その他・次回に向けて ・第二回 10月8日(日)
 まとめ(飯野)
 「財政基盤を整える(制度化)」について
 ①18歳までは居宅サービスを認めてもらった。これを延長することはできないか。
 ②サポートする人が必要。講師料が必要。
 ※各団体がどの程度のお金でやりくりしているか、示すことはできる。ニーズに応え広げるには財政制度が必要。

(b) 第2回 連携協議会

1. 日時 令和5年10月8日(日曜日) 10:00~12:00

2. 開催方法・場所 会議室にて対面およびオンライン会議システム(Zoom)によるハイブリッド会議

(1) 会場名: かながわ労働プラザ 9階特別会議室

(2) オンライン会議システム(Zoom)

3. 連携協議会名簿

	氏名	所属・役職	備考
委員	飯野 順子	NPO 法人地域ケアさぽーと研究所・理事長	
	山根 千知	神奈川県教育委員会生涯学習部生涯学習課	
	鳥井 健二	神奈川県子どもみらい局福祉部障害福祉課・課長	
	柏木 雅彦	神奈川県立茅ヶ崎支援学校・校長	
	名里 晴美	社会福祉法人訪問の家・理事長	オンライン
	岩永 浩二	一般社団法人ピッカ・代表理事	欠席
	高橋 幸子	國學院大学・教授	

	新井 雅明	田園調布学園大学・教授	
	奥野 康子	明治学院大学・非常勤講師	
	山口 秀子	神奈川県立スポーツセンター健康パラスポーツ課・主事	欠席
	橋詰 理香	訪問カレッジ Enjoy かながわ保護者	オンライン
	小林 芳枝	訪問カレッジ Enjoy かながわ保護者	オンライン
事務局	新井 雅明	田園調布学園大学・教授	委員兼務
	奥野 康子	明治学院大学・非常勤講師	委員兼務
	山口 秀子	神奈川県立スポーツセンター健康パラスポーツ課・主事	欠席
	片山 由美	神奈川県教育委員会特別支援教育課・専門員	
	下川 和洋	NPO 法人地域ケアさぼーと研究所・理事	
	成田 裕子	NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会・理事長	

4. 次第 司会:新井 雅明(田園調布学園大学)

(1) ご挨拶 10分

飯野順子(重度障害者・生涯学習ネットワーク代表)

(2) 委員紹介 10分

(3) 第2回訪問カレッジ「学びの実りアート&ミュージックミュージアム」について 10分

11月3日(金・祝)~4日(土) かながわ労働プラザ

下川和洋(NPO 法人地域ケアさぼーと研究所・理事)

(4) 研究協議

①訪問型生涯学習支援の新たな取組(令和5年度の事業展開の中間報告) 20分

②取組についての意見交換 70分(途中休憩有)

・リーフレットの展開

現況の詳細説明 :社協 奥野 新井 アンケート 下川 協議 柏木 山根

・ゲストティーチャー(他団体との連携)

現況の詳細説明 :ICT 支援・音楽 片山 美術:奥野 協議

・大学との連携

現況の詳細説明 :橋詰 片山 協議 新井 高橋

・施設・通所先の日中活動の支援

現況の詳細説明 :奥野 協議 名里 障害福祉課鳥井

・朝市の出店

現況の詳細説明 :小林 奥野 協議

・行政との繋がり

ポンチ絵の説明 :下川 協議

(5) その他・次回に向けて

第3回 連携協議会 2月10日(土)午前 神奈川県社会福祉センター(反町徒歩1分)

5. 配付資料

資料①第2回訪問カレッジ「学びの実りアート&ミュージックミュージアム」開催要項・チラシ

資料②訪問型生涯学習支援の新たな取組(令和5年度の事業展開の中間報告)資料

資料③文部科学省令和6年度予算概算要求主要事項学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業ポンチ絵

6. 会議記録

(1) ご挨拶(飯野)

・令和 6 年度概算要求に地域における学びに関する実践研究への計上。「重度重複障害者向けの生涯学習プログラムも対象」が記載された。これまでの取り組みの評価ととらえている。

(2) 委員紹介(※名簿に沿って自己紹介)

山根:報告を聞き勉強になる

鳥井:医ケア児をふくめ広く福祉に取り組む部署。

柏木:選択肢を広げるツールになることを期待。リーフレット配布も各校で実施。

高橋:意欲的な学生もいる。情報を得て勉強していきたい。

橋詰:息子(26歳)がカレッジ生。

新井、奥野、片山、成田

名里:「朋」

(3) 第2回訪問カレッジ「学びの実りアート&ミュージックミュージアム」について(下川)

11月3日、4日に神奈川労働プラザで実施(チラシ参照)

内容説明(チラシ裏面)

シンポジウムのメンバーについては次の通り。

安部井:内閣府障害者政策委員会の委員。

道躰:R2から現職。厚労省で障害者福祉全般に関わってきている。

津田:文科省の検討委員会メンバー、アドバイザーで全国支援。

小林:現受講生の立場からの話。

(飯野)全国をどう引っ張るか、など広い視野で話してもらうことを期待。

(4) 研究協議

① 訪問型生涯学習支援の新たな取組(令和5年度の事業展開の中間報告)(成田)

・リーフレット:自分たちの活動紹介ツール、退職後の一つの関わり方紹介ツール、訪問担当教員への紹介ツール、社協へボランティア依頼ツール、障害者支援センターへ、等々。課題としては応援者増加。配布プラスアクションが必要。

・ゲストティーチャー:専門性を生かした取り組みについて。音楽、美術、朗読、鉄道ビデオ、ICT。

・大学連携:大学生の体験の声をまとめられるとよいか。

・施設入所者:施設の日中活動の充実につながる可能性もあるのでは。

・朝市出店:活動を知ってもらう機会にも。制作活動モチベーション向上につながる。ズームでつながれる。家族が作成したものも出店できる可能性。

・かながわボランタリー活動推進基金21申請。

② 取組についての意見交換

・リーフレットの展開

(奥野) 横浜市青葉区の社会福祉協議会が HP にアップ、ボランティア紹介、団体登録、ボランティア団体会議出席(予定)、ボランティア講座(予定)

(新井) 川崎市麻生区社協へ配架を依頼。県、市という形で生涯学習のことが伝わることを期待。

(下川) 表紙 QR コードでアンケート。現在 20 名。うち 10 点をつけた人が 18 名。

(名里) データを HP などにアップしてもらえるとよい。→ 掲載します(成田)

(山根) 国も進めているところは承知。(福祉計画に入っているかどうか・・・)

(鳥井) 障害者福祉計画に生涯学習課からあげてもらえると入れやすくなる。

(柏木) 県立特別支援学校校長会議で紹介した。その後、各学校に配布。卒業後の生活を考えるときに、一つの選択肢として加わると豊かな生活につながるだろう。退職は定年が延長。5 年たつと 65 歳定年。R5 年度未定年退職者はいない。短時間も選択できるので、この活動を紹介するのもありかも。

・ゲストティーチャー

(片山) ICT アドバイザーとの連携。マニュアル、操作動画作成(予定)。

(奥野) ピッカさんのプログラム、鉄道動画を撮った人の訪問。山登りの足音など新たな視点の経験ができた。プラレール好きだったが自分で駅舎や電車の作成、ものづくりに没頭している。

(橋詰) 去年のミュージアムがひとつのきっかけ。視線ゲーム、軌跡を絵にするなど自分で動かせることが嬉しかった様子で、2 時間もやり続けた。バイオリンでもとてもいい表情。楽しんでいる様子が伝わり、いい表情になってきている。

(新井) 「まりな大学」(北海道) の紹介。

・大学との連携

(橋詰) 大学生が近隣公園の写真を見せてくれたこと、一緒に音楽(縦笛)を聞かせてくれたこと、など。同年代の人との関わりが持てて、大学生の役にも立っている喜び。

(片山) 両者にとっていい体験ができていると感じる。

(高橋) 大学生からも行ってよかった、という感想。一度関われるだけでも、大きな学びにつながっている。

・施設・通所先の日中活動の支援

(奥野) 月 1 回ソレイユ。外出機会がない状況。ものづくりを余暇活動にし朝市販売(予定)。終了後に施設と事後相談の機会を持っている。施設からも日中活動として関心をもたれている。

(名里) 支援法「兎者一貫」になり、日中活動を充実させることが求められている。が、集団活動はできても、個人に焦点が当たる活動は難しい。個人に焦点があたる楽しみや喜びが広がり、施設が実感できることが大事だろう。マンネリ化する活動も、外の人が入ることでひろがる。続けてほしい。

(飯野) 秋津療育園の理事長。長く在園して亡くなる人の人生を考える。また教育と福祉の大きな断絶を感じる。学校でやっていることは日中活動につながる。療育園では「けやき大学」月 1 回。人生をつくっている。ソレイユでも例えば名称をつけ、節目のあるものにし、日中活動で何をしていけばよ

いか。

(鳥井) 生活介護事業所などでは事業所でプログラムを考える限界もある。外から来た人がある意味提案のように活動をしていけると、ヒントを与えてもらえる。

(飯野) 施設では生涯学習の視点はゼロ。刺激にもなる。

・朝市の出店

(小林メール) ケアしながらの社会参加の難しさを誰もが感じている。朝市は活力になる。参加者が楽しんでいるのが一番。人とのつながり。

(成田) 地域の人が集まる場でカレッジのことを知ってもらえる。

(奥野) 売上は本人と事務所で折半。カレッジ生も参加、ポスター掲示、製品づくりへの質問をする教員、など。

・行政との繋がり

(下川) 障害者基本計画。

(山根) 都道府県で計画をたて、それを市町村が見て取り入れていく構図がある。計画に位置付けることは大事だと思う。

(鳥井) 県の施策に、どこかのタイミングで入れ込めないかも探っていきたい。協働事業負担金という枠組みで施策に入れられるかは要検討となるが。

(5) その他・次回に向けて

・第3回 2月10日(土)

・情報提供

重症心身障害学会 市民公開講座で、10月27日に生涯学習について話をする(下川)

まとめ(飯野)

文科省担当者が学会で「このままでは制度化はできない」と明言した。

中身を充実させる。報告書に成果をきちんと盛り込んでいく。

(c) 第3回 連携協議会

1. 日時 令和6年2月10日(土曜日) 10:00~12:00

2. 開催方法・場所 会議室にて対面およびオンライン会議システム(Zoom)によるハイブリッド会議

(1) 会議室で対面参加の場合は、会場へいらしてください。

会場名:神奈川県社会福祉センター 4階 403 研修室

(2) オンライン会議システム(Zoom)参加の場合、Zoom ミーティングで入室ください。

3. 連携協議会名簿

	氏名	所属・役職	備考
委員	飯野 順子	NPO 法人地域ケアさぽーと研究所・理事長	
	山根 千知	神奈川県教育委員会生涯学習部生涯学習課	

	鳥井 健二	神奈川県子どもみらい局福祉部障害福祉課・課長	
	柏木 雅彦	神奈川県立茅ヶ崎支援学校・校長	
	名里 晴美	社会福祉法人訪問の家・理事長	
	岩永 浩二	一般社団法人ピッカ・代表理事	欠席
	高橋 幸子	國學院大学・教授	
	新井 雅明	田園調布学園大学・教授	
	奥野 康子	明治学院大学・非常勤講師	
	山口 秀子	神奈川県立スポーツセンター健康パラスポーツ課・主事	
	橋詰 理香	訪問カレッジ Enjoy かながわ保護者	オンライン
	小林 芳枝	訪問カレッジ Enjoy かながわ保護者	欠席
事務局	新井 雅明	田園調布学園大学・教授	委員兼務
	奥野 康子	明治学院大学・非常勤講師	委員兼務
	山口 秀子	神奈川県立スポーツセンター健康パラスポーツ課・主事	
	片山 由美	神奈川県教育委員会特別支援教育課・専門員	
	下川 和洋	NPO 法人地域ケアさぽーと研究所・理事	
	成田 裕子	NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会・理事長	
文科省	福澤 <small>しんすけ</small> 信輔	文部科学省 総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課 障害者学習支援推進室 障害者学習支援第一係 専門職	オンライン

4. 次第

司会：新井 雅明（田園調布学園大学）

(1) ご挨拶 10分

①飯野順子（重度障害者・生涯学習ネットワーク代表）

②福澤 しんすけ 信輔（文部科学省障害者学習支援推進室 障害者学習支援第一係）

(2) 報告 下川和洋（NPO 法人地域ケアさぽーと研究所・理事） 10分

①第2回訪問カレッジ「学びの実りアート&ミュージックミュージアム」

②「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」に向けた実践研究の報告

(3) 協議事項

①訪問型生涯学習支援の令和5年度新たな取組の報告

②取組についての意見交換

(4) その他次年度に向けて

5. 会議記録

(1) ご挨拶

① 飯野（重度障害者・生涯学習ネットワーク代表）

・回を重ねるごとに深まってきている。

・各地の実践研究をまとめていて感じることは①感覚を最大限に生かした活動をして学びを楽しんでいる②入力機器を使って意思を表現し学びを深めている。私たちの活動の大きな特徴である。どの人もご家族も学びの日を待っている。

② 福澤(文部科学省障害者学習支援推進室 障害者学習支援第一係)

・広がりが生まれているのを実感している。
・次年度は 3600 万円の委託事業予算。同じ予算規模だが応募が増えそうな見込み。これまで地域別のみだったが、テーマ別コンファレンスを進めていく。
・表彰があった件。
・「ケアの箱舟」など新たにスタートするところも出て輪が広がっていると感じる。

(2) 報告(下川)

① 第2回訪問カレッジ「学びの実りアート&ミュージックミュージアム」

・重度障害者・生涯学習ネットワークは現在 16 団体に増えた。
・11月3~4日それぞれ 100 人を超える参加者。
・当日の様子を写真で紹介(受付バルーン、展示、朗読、アート、大学生の部屋、支援機器の部屋、学び発表、立体紙切りパフォーマンス、マジックショー(ピッカさん)、フォーラム)
・参加者の感想は報告書に掲載予定。

② 「重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援」に向けた実践研究の報告

・現在まとめている最中。①効果的な学習プログラム②運営・地域連携③人材育成(大学連携)④理解啓発(フォーラム)、でまとめている。

(3) 協議事項

① 訪問型生涯学習支援の令和5年度新たな取り組みの報告(成田)

・<資料1参照> 昨年度以来のテーマに向けて、令和5年度の取組6つの柱で報告。
・①リーフレット作成活用は有効だった。応援者を増やすためにボランティア講座を開催した。②ゲストティーチャー活用は連携すると継続が可能。配信、ICT 支援、朗読、などの継続をしていきたい。③大学生同行訪問は4大学、のべ15回以上実施。学生と大学にアンケートを実施<資料2~4参照>。
④施設入所者の昼の活動の充実については、本人の楽しみや職員の安心感があるが、無理なく広げていく方法が課題。⑤地域の朝市出店は、発信や地域と繋がり、学習の発展になる。⑥かながわボランティア活動推進基金21に申請。審査会の意見は資料参照<資料1>。
・行政との連携は不可欠。東京都では都の生涯学習担当課が推進していく方向と聞いている。

② 取組についての意見交換

【大学との連携】

(高橋)今年度3名参加。日程調整の難しさはある。サークルがあるので大学祭を活用できるかもしれない。発達障害学会10月5・6日開催、そこに登壇してもらい訪問カレッジについての話題提供を依頼することも考えている。

(新井) 学生ボランティアサークルを立ち上げて参加している。今年度カリキュラムが変わり学生のスケジュール調整が難しい。ボランティア講座は有効だった。また初代部長が今年度「超福祉の学校」シンポジウムに登壇した。

(橋詰) 先日はボランティアの学生が管楽器を持参し支援員と合奏するのを鑑賞。「春の海」では波の音を担当し合奏。ボランティア学生の多くが特別支援の教員になっていると聞いて嬉しく思っている。大学生にとってもいい場になっているし、それが自分たちにもでき学びの場になっているというところで両方にとってメリットがある。

(奥野) 学生が育つ場所、両方にとっての学びの場になっていると感じる。

(橋詰) 学生の緊張感をとるために、カレッジ生紹介ビデオを学生に見せるのもよいのでは。

(高橋) 待ち合わせのところから、訪問全体をビデオにするのもよいと思う。

【学習支援ボランティア講座】(資料4)

(奥野) 社会福祉協議会で開催。広報では3名参加、他大学生。広報や運営に課題はあるが、学習支援員の発表の場にもなる。

(福澤) ボランティアコーディネーターが声をかけたりするなど、地域で活動している人に口コミで広がる可能性を感じる。

【福祉施設とのかかわり】

(名里) 「朋」では重度化や、またコロナ禍から外に出られなくなっている人もいる。通所スタッフが訪問することもあるが事業として組み込むのは難しい。通えなくなってしまった人が孤立せず生活できるようにするために訪問カレッジもひとつの形かとも思う。訪問カレッジは日中支援型グループホームで支援の手伝いなども一つの可能性に思う。

また「学習支援ボランティア」という名称がとてもよい。ただのボランティア募集より自分のやりたいことを生かせるかもという思いがボランティアにはある。

(奥野) 励みになるコメントに感謝。神奈川全体にニーズがあっても、すべてを網羅するのは厳しい。法人の中で事業を立ち上げる難しさはどこにあるのか。

(名里) ニーズのある存在はわかっているけど、たまに訪問するくらいしかできていない。訪問カレッジという方法もあることが知られていけば、と思う。事業所は自分のところを運営することで精一杯なので、制度があれば活用したいと思う。

(鳥居) 将来的にはあってもいいかと思う。訪問事業は生活を支えるプラス学習をしたいというニーズ、余暇面の支援を、在宅を余儀なくされている人に届けるという方向性もありか、と。訪問系に入れていく、とか。

(成田) 入所者から相談を受けたケースでは、昼の活動が不十分だと。本人のことを考えると実施したいが制度はない。昼の活動を必要としている人がいることを伝えたい。ニーズにどうこたえるか。

(名里) 介護だけやっていたらいいのではなく、実際、様々なことをやっている。それを発信していけばよいのだろうと思った。

【地域との協働】

(柏木) 卒業時に学びの場が減ることを心配する声を必ず聞く。複数個所を利用する重度の方もいる。ここに訪問カレッジも含んで進路選択ができるようになってほしい。制度になることを期待している。

(山根) 県との協働事業。新しい視点、どうせやるなら夢を持って、と高く評価されている。

(下川) 日中活動として療育を考えると、どのように話題になっているか。

(名里) 訪問の形、外部リソースなどはあまり話題になっていない現状。職員数、報酬、通所人数の話が多い。

(下川) 通えなくなっている利用者をなんとかしたい、という声は聞く。障害福祉として継続した支援ができるよう、こうした課題があることを話題にしてほしい。

(福澤) 必要性、重要性は認識している。学習や人のつながりが生活の豊かさにつながる声をきく。行政も含め社会でどう位置付けていくかを考えていかななくてはならない。

(飯野) 秋津療育園にかかわって6年目。入所者の学びの機会はほぼないが、世代ごとに月1回の〇〇大学、など実施。ライフステージに応じて生涯学習をやるという視点を根付かせることが大事。療育を「療育活動」と呼び職員が変わってきた。学びは喜びに通じる、この活動が何につながるか、が見えること、雰囲気をつくること、学びの環境を作ることが大事。その日を楽しみにし、体調を整える姿も見られるようになってきた。ソレイユでもそうした一歩につながり、そんな施設が一つでも増えていくようにしていけるとよい。

(4) その他次年度に向けて

(下川) 次年度からは東京都で連携協議会を開催していく方向で調整中。学びの実りは神奈川で継続予定。コンソーシアムはテーマ別で、と考えている。

(福澤) この2年間の取組の形を発信してほしいと思う。

(橋詰) 動画編集は学生ボランティアに頼む方法もあるのでは。

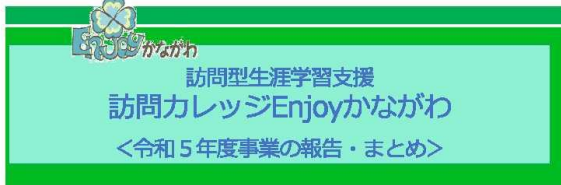
まとめ(飯野)

カレッジというからにはシラバスなど形は整える必要があると思っている。今後やる人たちへの参考にもしていきたい。(資料参照) 詳しくは報告書で。

何を自分が学んだか、を示す道具にもできるとよいと考えている。

国に動いてもらう必要があり、東京都は国と近いところにあるのでその責任を感じながら次年度すすめていきたい。

閉会



NPO法人フュージョンコムかながわ
・ 県肢体不自由児協会
成田 裕子

昨年度からのテーマ

・訪問型学習支援の持続可能な展開

- ・ 財政基盤を整える（制度化）
- ・ 訪問型学習支援の拡大
- ・ ノウハウを提供して他の機関でも実施する
連携機関を増やす
支援者を増やす
学習支援員を増やす
行政との繋がりを増やす

令和5年度の新しい取組

- 取組① リーフレットの作成・活用
- 取組② ゲストティチャーの要請（他団体との連携）
- 取組③ 大学生の同行訪問の増加
- 取組④ 福祉施設等との関り
- 取組⑤ 地域の朝市への出店（訪問カレッジのお店）
- 取組⑥ かながわボランタリー活動推進基金
令和6年度協働事業負担金に申請する

取組①

リーフレットの作成・活用

目標 私たちの取組・実践を広く知ってもらい
応援して下さる方を増やしたい

- ・ 「一人ひとりの小さなできる」を応援につなげたい
- ・ カレッジ生を核に、応援の輪を広げられないか？

⇒リーフレットを有効に活用したい

リーフレットは非常に有効な媒体である

結果 入学に関する問い合わせ増
リーフレットを活用し、行政、支援学校
社協、福祉（相談支援）等と、様々な
つながりはできたが、**応援者増×**

課題 応援者を増やすには？

↓
様々なつながりから、応援者の育成へ（試行）
令和6年2月3日実施（育業社会福祉協議会）
「学習支援員ボランティア講座」

学習支援員ボランティア講座の内容

- ①ご挨拶 ……
NPO法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会理事長
- ②「訪問カレッジEnjoyかながわ」について……成田学長
- ③障害の重度の方の生涯学習の様子……片山学習支援員
- ④誰でもボランティア ……奥野学習支援員
- ⑤ボランティア体験について……田園調布学園大学
ボランティアサークルBONDS渡部部長
- ⑥「参加者おしゃべりタイム」
- ⑦まとめ…… 田園調布学園大学 新井教授

2024/2/13

6



取組②

目標 ・ **ゲストティチャーの増加**
(色々な方と色々な学びあい)
配信することで、**横のつながりが出来る**

一般社団法人ピッカさんのJENIさんとの音楽会を配信しました。



ICT支援アドバイザーと



結果と課題

- ・連携すると継続可能（一社ピッカ）
→毎年1回は音楽会を配信
- ・学習支援員の知り合いからゲストティーチャーを依頼出来た。
→準備等の関係で配信は難しい。配信用には〇〇会の設定が必要
- ・あっきーテック工房とICT支援の連携ができた
→ICT支援の機会が増え学びが拡大



課題→社協等のボランティア人材の活用が課題（学習支援員の補充）

取組③

目標 大学生の同行訪問の増加

- ・同世代との関わりを設定する
- ・「訪問型生涯学習」に同行訪問した大学生の体感が未来に繋がる



結果

- 4大学の学生が15回以上実施
カレッジ生も5名・5家族が体験
- 参加学生及び大学の先生にアンケートを実施し同行訪問の振り返りを行った

課題

- 月末に訪問日程を調整しているので、大学生が予定を立てにくい。
- 事前説明会や事前体験の場を検討し参加の不安を取り除く工夫が必要

大学の先生方へのインタビュー

アンケートまとめ		
どのような方法で、学生さんに「訪問カレッジEnjoyかながわ」の事業や同行訪問について、紹介していただいているのでしょうか？		
方法	該当する場合○	意見・感想等、ご記入ください。
履修時間に多務の学生へ説明	3	・推薦をされている先生方の職歴について情報（鎌倉女子大学） ・接待不自由教育！ 産後ケア教育推進等が説明（田原野学園大学）
担当ゼミで説明	3	・推薦をされている先生方の職歴について情報。（鎌倉女子大学）
研修等でお話し	1	
担当授業でチラシを配布	3	・授業の紹介時などに使用（田原野学園大学） ・関心がありそうな学生に質問に声掛け（田原野学園大学）
大学のボランティアセンターを通して紹介		
教職員からも紹介してもら	1	
その他の方法（具体的に記述してください）		

2「訪問カレッジEnjoyかながわ」の紹介に際して、学生さんの声をお聞かせください。

方法	返響の状況	学生さんの声をお聞かせください
授業時間と多務の学生へ説明した場合は	多い 1 少ない 1 わかりにくい 1	・他のボランティア等に参加しており、追加での活動が難しい。（鎌倉女子大学） ・関心のある学生には、参加につながる（田原野学園大学） ・追加での活動が難しいが、必要な経験と考えると、何とか参加したい。（鎌倉女子大学） ・私が説明するより、当事業や支援員さんをお招きしたのが、関心はるかに高まる（田原野学園大学） ・行ってみたいと思う方が増えつつある（田原野学園大学）
担当ゼミで説明した場合は	多い 2 少ない 1 わかりにくい 1	
出張研修等とお話しした場合は	多い 1 少ない 1 わかりにくい 1	・行ってみたいと思う方が増えつつある（田原野学園大学）
担当授業でチラシを配布した場合は	多い 1 少ない 1 わかりにくい 1	・他のボランティア等に参加しており、追加での活動が難しい。（鎌倉女子大学）
大学のボランティアセンターを通して紹介した場合は	多い 1 少ない 1 わかりにくい 1	・参加がぜひ行ってみたい。（田原野学園大学）
教職員からも紹介してもらった場合は	多い 1 少ない 1 わかりにくい 1	
その他の場合（方法：）	多い 1 少ない 1 わかりにくい 1	

貴大学において、学生が「訪問カレッジEnjoyかながわ」の活動への参加の促進方法についてお聞かせください。

良い方	該当する場合○	補足説明等、ご記入ください。
推薦出席と関係に合う		
学生のボランティア活動としての扱い	4	・他の良い現状では無い。（鎌倉女子大学）
交通費等の確保がある		
その他（具体的に記述してください）		

4「訪問カレッジEnjoyかながわ」の事業に、大学生が参加する意義について、先生のお考えをお聞かせください。

・特に、特別支援学校や福祉施設に赴く学生が、障害のある方の特別支援学校や福祉施設の一部を知ることは、その方の「人生」という観点から、特別支援学校や福祉施設に必要となる知識・支援等を考えるうえで、極めて重要な知識となる。（鎌倉女子大学）
・数少ない貴重な機会であるため、学びの機会をお話ししていただくこともとても大切なことだと思います。（鎌倉女子大学）
・学生の生活や学習の場にとらまらずに、社会生活の場でも、生涯を通じて学ぶことの大切さを具体的に学ぶことができると思います。（田原野学園大学）

5参加させる際の心配・不安な点等をお聞かせください。

・特にありません。説明がしやすいように、スケジュール等をこまめに調整していただければありがたいと、勉める態としても承知しています。（鎌倉女子大学）
・カレッジ生や訪問先、支援員さんに失礼はしない。（田原野学園大学）
・特にありません。（田原野学園大学）

6今後も大学生との関わりが継続されるために、「訪問カレッジEnjoyかながわ」に期待する事等をお聞かせください。

・県と貴大学の協力が継続して一つのことができればよいと考えます。例えば、共生推進本部主催の「共生社会実践セミナー」への参加など、また、特別支援学校や福祉施設に訪問する機会にもあります（大学の機会、児童学習にもあります）。大学の機関の特色や強みを生かして、貴校と連携していただくこともとても大切なことだと思います。（鎌倉女子大学）
・ご多幸と拝見しますが、当事業や支援員さんが継続できると願っています。（田原野学園大学）
・可能な限り、呼びかけたいと思います。自衛隊等大変なことですが、どうぞ宜しくお願いします（田原野学園大学）

貴大学において、「訪問カレッジEnjoyかながわ」の事業へご支援・ご協力頂けるお取り組み等をご教えてください。

・引き継ぎ、学生には説明の機会とサポートについて、丁寧な説明をしていきたいと思っております。（鎌倉女子大学）
・必要なことがあれば、できる限り協力します。（田原野学園大学）
・大学における交流活動など（田原野学園大学）

取組④

目標 施設入所者の昼の活動の充実

社会福祉法人 三篠会

重症児・者福祉医療施設 ソレイユ川崎



第3土曜 14:00～15:00
学習支援員2名が訪問
1名の入所者とカレッジで学習
15:00～15:20
施設の職員と事後面談

結果 カレッジは、
→施設生活内の本人の楽しみの一つ

→施設内でカバーしきれない部分
の補完は職員の安心にも繋がる

課題
→生活介護事業所からの入学相談もある
→無理なく広げていく方法はあるか

<朝市の様子>



取組⑤

目標 地域の朝市に出店する

カレッジ発信の場
社会と繋がるツール

- ・作品展
- ・製作品の販売
- ・売り子体験
- ・地域に混じる
(活動紹介)



結果

- 売値や価格等の話から契約まで学習が発展できた
- 製作活動のモチベーションアップに繋がった。
どんなふう工夫したら売れるか商品製作に発展
- Zoom等で繋ぐことで、お客様と繋がる。
- 家族の関心も高く、家族がお家で制作したものも売れないか相談を受けた。
- 地域で行う訪問カレッジの文化祭の形である。
→次年度も、年2回(4月・10月)定期開催する

課題

- 配信力を高める。
(カレッジ生間・地域のお客さまと繋がる)

取組⑥

かながわボランティア活動推進基金21の
令和6年度協働事業負担金に申請する

協働事業負担金

地域や社会の
課題解決に向け
県と協働して効果的に
事業を行っていく制度

目標

- ・県と協働して
重度障害者の生涯学習支援事業を
効果的に推進する

(審査会意見)

- ・これまで支援の届いていなかった重度障害者、特に医療的ケアを必要とする人たちの学び続けたいという思いをくみ取り、訪問により生涯学習支援を行う本事業の取組について、審査会で高く評価しました。
- ・プレゼンテーションでは、地域における広がりや、事業の最終目標について確認できました。社会福祉協議会と連携した学習支援員の養成に加え、思いを同じくする県内各団体との連携に向けて、課題認識の共有だけではなく、事業ノウハウの蓄積と情報、教材、機器等の提供が期待されます。
- ・協働事業としては、令和2年度から4年度までの基金21ボランティア活動補助金による事業の結果をどう生かすのが、課題としてあげられます。

補助金事業の経験を踏まえ、さらに県と協働することにより、事業の目標・成果がどのように達成できるか、意識的に取り組んでほしいと思います。

・例えば、本事業の目標のひとつに、「重度障害者の訪問型生涯学習支援の制度創設」に寄与することが掲げられています。制度創設は、行政との連携が不可欠です。県との協働事業を通してその可能性や課題が明らかになり、制度創設に向けた取組が前に進むことを期待しています。

・受益者負担が難しい重度障害者の人々には、何らかの公的支援・社会的支援が必要だと思えます。訪問型生涯学習支援を通じた重度障害者の学ぶ権利の認知を高め、共生社会、生涯学習社会を促進する課題意識を大切にして、協働を希望する県の担当部署との協議を進めていただきたいと思います

結果

→令和6年度協働事業負担金に決定見込
担当課(生涯学習課・特別支援教育課)

課題

→県との協働事業というマントを
羽織ることで、推進が進むか

(2) 地域啓発資料「訪問型生涯学習地域連携リーフレット」の効果的な活用方法

今年度は、地域啓発資料として作成したリーフレットを様々な場面で配布し、活用してきた。作成した目的は、訪問カレッジという取組みや実践を広く知ってもらい、それによってこの取組みを応援して下さる方を増やしたい、というものである。これまでは訪問型生涯学習のことを伝える際に、実際おこなっている活動の様子は口頭で話すことが中心で、伝える範囲も限定的であったため、リーフレットでは写真や具体的な実践を多く掲載して、実践内容が視覚的に伝わるよう工夫した。

このリーフレットを効果的に活用して応援して下さる方を増やしていくために、誰に、どうやって、どんな機会に、どんな経路で届けたのか、またどのような反応や手ごたえがあったのかをまとめるとともに、それを踏まえて今後に向けた課題を整理する。

<配布状況について>

配布時期と枚数は次の表のとおりである。最初に印刷した 3,500 部は配布を完了したため、さらに 600 部を増刷して配布を継続している。

配布時期	配布枚数
令和 5 年 8 月～ (現在も継続中)	3,500 部(配布完了) + 600 部(増刷) (配布を継続中)

主な配布先、配布方法、部数は次の表のとおりである。また会議の場で説明補助資料として使ったり、活動概要を説明する際に使ったりするなど、必要に応じて活用している。

配布先	配布方法	配布部数
訪問カレッジ受講生・家族	手渡し	各 10 部
訪問カレッジ学習支援員	手渡しまたは郵送	各 10 部
県内の特別支援学校 (県立、横浜市立、川崎市立)	特別支援学校校長会を通して肢体不自由教育校に配布	各 50 部
大学	田園調布学園大学、明治学院大学、國學院大学、鎌倉女子大学の各大学で学生同行に協力をいただいている方を通して配布	各 30 部
行政機関(神奈川県)	県との協働事業に向けた事業説明の際に、関係課の担当者に配付	30 部
県内の社会福祉協議会	神奈川県、横浜市青葉区、川崎市麻生区の各社会福祉協議会に持参して配布や配架を依頼	200 部(県) 各 50 部(区)
障害者支援センター(横浜市)	支援センター事務局を通じて横浜市内の各関係団体に配布を依頼	1,200 部
県内の訪問教育担当教員	訪問教育研修会の際に配布	50 部
「学びの実り」の来場者	「学びの実り」受付にて来場者に配布	150 部

「朝市」の参加者	「朝市」で参加者に配布	50部
「ボランティア講座」の参加者	「ボランティア講座」で参加者に配布	30部

<効果について>

配布したことにより得られた効果としては、次のようなものがある。

- 受講生の家族が、親戚・福祉・医療など受講生をとりまく周囲の関係者に、訪問型生涯学習支援を説明したり知らせたりすることに活用できた。一人ひとりの活動がリーフレットに写真掲載されており、親近感が得られている。受講生や家族にとってリーフレットを周囲と共有することで所属意識につながっている面がある。
- 神奈川県立特別支援学校の訪問教育部会において、訪問型生涯学習支援の話をする機会があり、その際にリーフレットを活用することができた。
- 社会福祉協議会等はリーフレットの配架など概ね協力的であった。またボランティア向けの説明会の開催につながったところもあった。
- 神奈川県社会福祉協議会では、大学生のインターンシップの事前学習に訪問型生涯学習支援について取り入れることを検討するというお話をいただいた。
- 行政との連携を目指し協働事業にエントリーした際に関係課に配付したところ、各担当者が熱心にリーフレットを見ていた。対象者や学びの内容がより具体的に伝わり、事業説明に有効であった。
- リーフレットにはQRコードをつけてアンケート回答ができるようにしている。アンケートの返信数は少ないが、双方向につながる試みとして今後も継続したい。

<今後に向けて>

リーフレットは、口頭での説明を補完する媒介としての効果が大きく、活動を紹介する上で有効なツールとして活用できる手ごたえを感じている。今後も訪問型生涯学習を紹介する場面等で引き続き活用し、取り組みや実践を広く知ってもらい応援して下さる方を増やしたいという目的にさらに近づきたいと考えている。

一方で、作成した目的である「応援して下さる方の増加」という点では、今後の推移を見守っているところである。そして今後に向けては、リーフレット配布を契機にして何らかのアクションが必要ではないかと考えており、さらに工夫を重ねていきたい。

生涯学習を応援しよう

フュージョンコムかながわでは
サポーターを募集しています

- 支援員と一緒に関わってくださる方
- 特技がある方
(楽器演奏/歌/読書/書道/美術/手芸/知能/ICT/等々)
- 地域の行事への参加を紹介できるという方
- 作品展示の場所を提供できるという方
- 一緒に文化祭を企画したいという方
- その他一緒にやってみたいアイデアがある方
- 障害のある方と関わったことのある方

大学等との連携例

- 研究に基づく学習支援
- 生涯学習支援の啓発講座
- 訪問カレッジへの参加
- 学生のサークル活動との連携

ボランティア団体等との連携例

- 訪問カレッジへの参加
- フォトボランティア
- イベントへの誘い

特別支援学校との連携例

- 生涯学習支援の理解啓発
- 教材教具の紹介
- 卒業後のキャリア支援

社会福祉協議会等との連携例

- ボランティア講座への協力
- フォトボランティアの派遣
- ボランティア団体等との連携
- 生涯学習の場所の提供
- 生涯学習支援の理解啓発

地方自治体との連携

- 日野市「日野市障害者訪問学級」
- 新宿区「障害者の生涯学習及び移動支援のサポート」
- 神奈川県「かながわボランティア活動推進 基金21」

企業との連携例

- 企業の社会貢献活動との連携
- ICT支援活動
- 教材の提供

サイバー空間(株)ファンタスカー株式会社



お問い合わせ先 NPO法人 フュージョンコムかながわ 県肢体不自由児協会
 住所: 〒221-0825 神奈川県横浜市神奈川区反町3-17-2 神奈川県社会福祉センター5F
 電話: 045-311-8742 FAX: 045-324-8985
 メール: jimukyoku@kenshikyoku.jp
 URL: <http://www.kenshikyoku.jp/index.htm>

学ぶことは 生きること



～生涯にわたって 学び続ける喜びを～

医療的ケアを必要とする障害者の重い方の多くは、在宅生活を余儀なくされていますが、心豊かな生活の実現のために、「大学へ行きたい」「もっと勉強したい」「みんなとつながりたい」との「学び」を希望しています。生涯にわたり学び続けたいという夢や願いに応えるために、「訪問カレッジ」という学びの機会を創ってきました。障害のある方々が、学校卒業後も生涯を通じて教育や文化、スポーツなどの様々な機会に親しむことができるよう、みなさんの力を必要としています。

このリーフレットは、令和4年度文部科学省「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」～『重度医療的ケア対象の訪問型生涯学習支援』に向けた実践研究～の研究をおこなって作成しました。

カレッジ生の声

宇宙の勉強が大好きです
いろいろな人と話してみたいです
視覚入力でパソコンやゲームができるようになりたいです

月2回の学習で、海外や英語について興味が増えています

ミンや編み物を続けたいです

世界遺産の勉強で、旅行へ行きたい気持ちが高まりました

いろいろな楽器を演奏したいです
科学の実験が楽しいです

学生ボランティアの声

大学の授業では知る機会がない訪問カレッジに参加でき、とても勉強になりました

言葉かけの仕方や関わり方、パソコンの活用やスイッチの使い方など、勉強になりました

二回目の訪問ではカレッジ生の発信するサインがわかってうれしかったです

カレッジ生やご家族の方が学生ボランティアの参加を喜んでいてと知って、安心しました

カレッジ生に自分の話を真剣に聞いてもらい、また訪問したいと思いました

学びのかたちは無限大

～重度重複障害者の生涯学習～



保護者の声

外出が困難な子どもにとって、社会とつながることができる貴重な場です

目標や楽しみがあり、肯定してくれる存在があることは、本人はもちろん家族にも生活の幅を広げてくれます

支援員とのやり取りで、家族が気付かなかった好きなことを発見しました

今度は「大好きな電車の話をしたい」と楽しみにしています

支援員の声

カレッジ生との学びが自分がかかると感じます

学ぶことへの意欲に感動しました

一緒に学びを進めていくと、自分も新しい世界が広がります

カレッジ生との出会いは、少し難しくても楽しい時間です

人と人の関わり方を学ばせてもらっていると思います
自分にとっても「生涯学習」だと気が付きました

*重度重複障害のある方とは

このリーフレットでは、重度の身体障害や知的障害がある方、医療的ケアが必要な方（重症心身障害者、重度肢体不自由者、医療的ケア者等）を「重度重複障害のある方」としています。



学び続けるには地域の力が大切です

***生涯学習は障害者の権利**
 教育基本法の第三条に生涯学習の理念が掲げられているのは、これら、あくまでも理念です。私たちの取組を支えているのは、平成26年に批准された「障害者の権利に関する条約」です。つまり、その二十四条に「締約国は、教育についての障害者の権利を認める。この権利を差別なしに、かつ、機会の均等を基盤として実現するため、障害者を包摂するあらゆる設けの教育制度及び生涯学習を確保する。(略)」とあるからです。

(3)「運営・地域連携」に関する考察

3 回の連携協議会と地域啓発資料「訪問型生涯学習地域連携リーフレット」の効果的活用の取組を本年度は行ってきた。その取組を踏まえて、これらによって、本実践研究の目的の「18 歳以上の『医療的ケア者』に対する生涯学習の実践を通じて、障害が重度であっても生涯学習の対象であり、ニーズがあることを明らかにしつつ、訪問型生涯学習支援の持続可能な展開についてどこまで迫れたのかを考察する。

その考察は、本年度の取組の項目である(a)リーフレットの展開(b)大学との連携(c)他団体との連携(ゲストティーチャー) (d)福祉との連携(e)自治体との連携について項目毎に述べる。

(a) リーフレット

「訪問型生涯学習地域連携リーフレット」(以下、「リーフレット」と略)については、(2)で述べられており、詳細はそちらをご覧くださいことにして、ここでは連携協議会での議論をもとに述べる。

「リーフレット」は、去年の連携協議会の成果である。今年度は、配布に取り組んだ。主な配布先は、地域の社会福祉協議会である。

実際に配布することで、「リーフレット」は、様々な機関施設などに配架するという本来の使い方だけでなく、それらの場所で、担当者に「訪問型生涯学習」の説明をして理解を促すツールとしても役立つことが分かってきた。この気づきが「学習支援員ボランティア講座」の開催に繋がり、会場の社会福祉協議会との関わりが深まった。

さらに、この「リーフレット」をもとに、「訪問型生涯学習」のパネル作成のアイデアが出され、短時間で完成した。このパネルは、既に、「ボランティア講座」や第3回連携協議会なども紹介された。今後も「学びの実り、アート&ミュージックミュージアム」のような機会に展示することができよう。

「リーフレット」が、「ボランティア講座」「パネル作成」などに拡大したといえる。これらのことによって、訪問型生涯学習支援の理解者は、実際に増えたといえる。

さらに理解者を増やすために、関係ができた社会福祉協議会等との繋がりを単発に終わらせず、継続していくことが課題と言える。そのために、「リーフレット」を更新して配架を依頼するなどしてはどうだろうか。

(b) 大学との連携

大学との連携について、本年度広がりがあった。昨年度までの田園調布学園大学、鎌倉女子大学に、國學院大学、明治学院大学が加わった。参加した学生は、延べ15回以上ということである。

また、参加した学生にアンケートを実施して、8名から回答が得られた。

項目は、次のとおりである。参加の動機、参加前に思ったこと、参加後に思ったこと、今後、様々な人がこの取り組みに参加してもらうためには、である。

カレッジ生と支援員の間で行われる授業に感銘を受ける等、全員肯定的に受け止め、可能な限り今後も参加したいということが異口同音に書かれていた。

一方で、参加前に思っていたことは、5名が「不安」を述べていた。

このことは、連携協議会でも話題となり、初回訪問時の不安解消のため「訪問型生涯学習」のプロモーション動画を作成してはどうかということになった。

作成に向けて、プロに依頼するという意見があったが、その費用をどのように捻出するかという課題が指摘された。費用面の解決には、動画編集の得意な学生がいるので、そのような学生に依頼してはどうかという意見もあった。早急に対応を検討する必要があると考える。

(c) 他団体との連携（ゲストティーチャー）

「学習支援ボランティア講座」を社会福祉協議会で開催した。

社会福祉協議会の広報により、一般参加が、3名であった。他は、大学生であった。

社会福祉協議会との連携の深まりが、「ボランティア講座」開催につながった。その結果、一般の人への「訪問型生涯学習支援」への理解も事実として広がった。同時に、学習支援員の発表の場という意義を見出すこともできた。

参加者に、ボランティアコーディネーター研修会に関わっている人もおり、地域で活動している人に口コミで広がる可能性を感じたという委員もいた。

単発で終わることなく、広報などの課題を解決した上で、適当な時期に第2回のボランティア講座を開催すべきと考える。

(d) 福祉施設との関わり

現在、「訪問型生涯学習支援」の利用者の1名が、重心施設に入所している。支援員は月に数回施設を訪れ、授業の後には、施設職員と面談をしている。その面談で、カレッジは本人の楽しみの一つになっているということが報告されたそうである。施設職員では取り組みにくいサービスの提供しており、施設職員さんからも感謝されている。

生活介護事業所の理事長をしている委員からもその意義に共感するという感想が述べられた。しかし、ニーズは認識してはいても、人手不足が常態化している現状では、これまで行ってきた本来業務で手一杯であるという厳しい現実が語られた。

一方で、疾病等によって、通所が困難になる方も存在している。通所スタッフがたまに訪問することもあるが事業として組み込むのは難しいということも語られた。何よりも制度化が望まれるということであった。

福祉行政に携わっている委員からは、「学び」というと、文部科学省の管轄と従来は考えがちであったが、居宅介護サービスの一環に位置付けることは、不可能ではないと述べた。

そのためにも、「訪問型生涯学習支援」への理解をより一層進める必要があると考える。一方、生活介護事業所などの福祉事業者側も、介護だけでなくこのような「学び」も同様に必要であることを発信していただければと思う。

(e) 協働事業としての発展性について

成田理事長から会議の冒頭で、令和6年度ボランティア活動推進基金21の「令和6年度協働事業負

担金」(生涯学習課・特別支援教育課)に申請して、決定見込みとなったということが報告された。

来年度から、生涯学習課と特別支援教育課との協働事業として訪問カレッジが位置づけられて、推進することが神奈川県では可能になったということである。

行政の施策になった訳ではないが、ここ数年は基金という財政面の裏付けのもとで展開することになる。

また、生涯学習課と特別支援教育課とともに訪問カレッジを進めることになり、本連携協議会は神奈川県では役割を終える。

そこで、来年度からは、東京都で開催することになり、既に第1回会議の準備がされているとの報告が下川理事からされた。来年度は、神奈川県と東京都で「訪問型生涯学習支援」について、行政を含めた関係者が集い検討されることになる。

主催者の福澤氏が述べたことだが、いずれにしても「訪問型生涯学習支援」について行政を含め社会で公に位置付けていくことが必要である。ボランティア基金の審査会意見にも「受益者負担が難しい重度障害者の人たちには、何らかの公的支援・社会的支援が必要」と述べられている。

この2年間の実践の積み重ねでも、カレッジ生の学習や人とのつながりが、生活の豊かさに直結することを明らかにしてきた。この意義ある事業を連携協議会のテーマにあるように、いかに「持続可能」なものとするかが問われているということを再認識せざるを得ない。これは、あたかも出発点に戻ったと思われる方がいるかもしれない。

しかし、これがスパイラル化した道筋であつたらどうだろうか。横から見ると、確実に上昇を遂げているといえる。私たちの議論はスパイラル化しており、質的な上昇していることを否定する人はいないだろう。

つまり、制度化に向けた一歩が踏み出せた訳ではないが、神奈川県の連携協議会の2年間を通して、暗中模索状態から何本かの道筋が見えてきたと言っても過言ではない。それを記すことを本節のまとめとしたい。

(f)まとめに替えて(神奈川県での連携協議会を終えるにあたって)

まず、培ってきた関係団体の連携をさらに強め、リーフレット配架やボランティア講座などの事業を通じてより一層、理解者を増やしていくことである。

理解者をさらに一歩進めて、カレッジ生の家に向くボランティアになっていただくために、事前に視聴して、不安を減らして、興味関心を増すような動画を制作することも必要であろう。

行政に対しては、生活介護等での余暇支援に「生涯学習支援」も位置付けられることを事例によって説得力を持って示すことである。

さらに、生活介護等の利用者の中に通所が困難になり、在宅を余儀なくされる人々が存在するということ、その在宅介護のサービスにも「生涯学習支援」が位置付くことへの理解を促すことである。

本連携協議会は、神奈川県では今年度で終了して、日本の中核である東京都に引き継ぐ。東京では議論をより一歩進めて、制度的営みに一歩でも二歩でも近づけることが期待される。

学校における医療ケアが、この20年で大きく進展したように。

3. 人材育成

(1) 日野市障害者訪問学級

(a) はじめに

今年度当初、日野市障害者訪問学級は定期的な大学生のボランティアの参加はなかった。10年以上前には近隣の大学のボランティアサークルが30年にわたり毎年数名の学生が講師として障害のある学級生の自宅を訪問していたことがあるが、その後ボランティアサークルの解散と共に途絶えてしまった経緯がある。

(b) 今年度の活動

再度、数年前に同大学のボランティア担当の学生課に出向いてボランティアの依頼を相談したことがあるが、現状での学生にとって「講師」はハードルが高いので、難しいと言われたとのことで、実現していないまま、現在に至っている。

今年度は研究活動としては、重度障害者の学級生対象なので、すでに障害者について興味関心を持っていると思われる医療系、福祉系の大学生へのボランティアの依頼を考え、近隣の大学に直接お願いに出向くための依頼状の作成をまずは試みた。日野市障害者訪問学級は日野市の委託を受けて、「日野市障害者問題を考える会」（以下「考える会」）が実施しているので、「考える会」のみではなく「日野市」との連名で依頼状を作成することにして原案を検討した。

その過程で、日野市はすでに独自に別の件で近隣大学と連携しているのもので、その大学への依頼をするときには、すでに連携している部署から大学の担当部署を通すこととなり、依頼状の件は複雑な道筋となり進まず、結局今年度中の大学訪問は実現できずにいた。2024年2月になり近隣の大学との連携の話し合いがオンラインで開始されるとの情報もあり、次年度は少し進展がみられるかもしれない。

(c) 遠足の実施にボランティア大学生が。

そのような中、秋の遠足では昨年同様大型バスを貸し切り“スカイツリー”と“すみだ水族館”へ行く企画を立てた。あいにく講師の参加が少なく、学級生の介助の不足が心配された。そこで、保護者から学級生の理学療法で世話になっている先生のご紹介で、関連する大学の理学療法科の学生へのボランティアの募集をかけた。いただいた。

遠足1週間前位であったにもかかわらず5名の申し出があり、別のルートでの紹介の学生も含めて6名のボランティア学生の参加があった。当日の学級生の参加も6名で、それぞれに一人ずつ介助役として入ってもらった。学級生には保護者と、講師、ボランティア学生、が同行して、移



動、食事、ケアを行った。

医療的ケアの必要な学級生が3名だったので、二人の看護師も同行してもらった。特に事故もなく、少し忙しい時程ではあったが、交通渋滞もあまりなく、日野市から都心を通過して葛飾区までの遠足(朝7:00-18:00)を楽しく無事に終了できた。

それぞれのボランティア学生が食事時の注入の様子や、時折の吸引をつぶさに観察する機会があり、吸引機を背負ってお手伝いする場面もあった。また、トイレには一定以上の広さが必要であることを実際に体験することにもなり、医療的ケアを必要とする人の外出の際のさまざまな日常的なケアの実際を見て、体験することとなった。学生からの感想では、とても貴重な経験になったこと、障害のある人との直接のかかわりの中でのコミュニケーションの取れた時の楽しさ、充実感などが語られた。(別紙1)



当日の費用は全員参加費(学級生保護者 9000 円、講師 8000 円、学生 5000 円、現地集合学生 4000 円)をいったん支払ってもらい、臨時に講師をお願いした方々もあったので、学生ボランティアもその扱いに加えて臨時講師料を支払った。結果として、学生ボランティアは差し引き謝礼分としては、1600 円程度(交通費無し)となった。食事代は自前で支払った。

(d) 参加した学生がその後講師に。

その後、当日の学生ボランティアの中から、日野市に住む学生が講師の登録を希望して、1月の段階で新しく講師としてベテラン講師と同行して、Sさんの訪問授業を開始している。立教大学の文学部教育学科3年生なので今後就職活動や卒業を控えて忙しくなることも想定されるので、月に1回程度となるかとおもわれ限定的ではあるが、貴重な人材となっている。

当学生は、遠足に参加したことで丸一日同行する中で、学級生Sさんの様子がある程度知り、お互いにやりとしたということで、講師をするための予備知識ができたことが、登録に至った大きな要因と本人も語っていた。

(e) 別のルートでの学生も講師に

また別のルートでの学生が1名、今年度12月よりベテランの講師と同行で訪問授業を始めることとなっている。こちらは、明星大学特殊教育学専攻の3年生で日野市内の放課後等デイサービスで、すでに訪問学級の講師となっている方と仕事上で同僚として働いていた。その放課後等デイサービスの閉鎖により、時間が空いたことがきっかけとなり、訪問学級講師の登録に至った。やはり大学の3年生であることから大学の授業の関係で月に1回程度となるが、卒業までYさんの訪問講師を続けたいと希望をされている。

(f) 派遣先の大学との関係

今回の上記 2 例はどちらも個別の対応となっているが、今後の継続も考えると、何らかの学生の団体、またはサークルの存在があると、見通しが持ちやすくなる。そこで、遠足時に学生を派遣して下さった理学療法科の先生への接触を試みている。現段階ではまだ、直接の連絡は取れていないが、間に入って下さった理学療法士の先生を通して、連絡を取れるように働きかけている最中である。

重度障害者生涯学習ネットワークのひまわり ProjectTeam では、首都医校、東京医科歯科大学等との連携を 10 年以上つなげてこられていることから、日野市障害者訪問学級もそれに学んで大学の医療科、福祉科などを中心として、連携を模索していく方向を考えている。

(g) ボランティア大学生の資格・研修について

また、現段階では学生への研修は特に設定していないため、講師登録してからは「講師手引書」を渡して、どのような形で記録するか、など伝えている。学級生にたいしての訪問時の課題や内容についてはそれぞれの学級生で異なるので、同行して指導中のベテラン講師からその場で伝える、言ってみれば OJT (On the Job Training) となっている。場合によっては、学生を対象としたもう少し実践的なマニュアルのようなものが今後必要になるのかもしれない。

(h) 今後について(考え方の変化)

当初考えていた、大学を訪問して教員・学生部にお願いするスタイルでの学生の獲得より、イベントに招待して学生に直接参加してもらうことで、実際に障害のある学級生に会って、笑い合って、手を取り合っ感じた経験をもとに、講師のボランティアを考えてもらう方法がより有効なのではないかと考えるに至った。実際にボランティアを始めてから、その後で、その学生の担当の大学の教員との連携がうまく取れれば、その学生のボランティアの講師としての活動について、インターンシップ(*)として考えていけるのではないかとこの協議を始められるのではないかとと思われる。

まずは、学生のボランティアを受け入れる体制を作り、日野市障害者訪問学級のイベントごとに大学生のボランティアを呼び掛けていくこととしたい。

幸い日野市障害者訪問学級は毎年何回かの交流学习を企画している。例えば 6 月頃には八王子東特別支援学校の体育館を使った「体育交流会」また、7 月には八王子東特別支援学校の学校プールを使う「開放プール」、秋には「遠足」また 1 月頃には「ハートフル・サポーターになりませんかの講座(旧講師養成講座)」、3 月頃には「音楽交流会」などである。

その時に、実際に講師希望者が見つからなくても、このような呼びかけを続けていくことで、障害のある学級生が学びたいと思っている現状を広く理解してもらうことにはつながり、それはひいては重度障害者の生涯学習ということの社会的認知のベースともなっていくと思われる。来年度もこれらの活動を継続していきたいと考えている。

(*) 文科省、厚労省、経産省の 3 省合同の文書「インターンシップをはじめとする学生のキャリア形成

支援に係る取り組みの推進にあたっての基本的考え方」(平成9年9月作成、平成26年、平成27年、令和4年一部改正)

■学生ボランティアの感想■

遠足参加当日から数日の間にいただいた感想文です。掲載の許可もいただきました。

(2023年11月12日日野市訪問学級 秋の遠足「スカイツリー・すみだ水族館」参加の東京工科大学リハビリテーション学科理学療法学専攻、杏林大学リハビリテーション学科理学療法学専攻、立教大学教育学部などの学生)

SSさん(石坂さん担当)

本日は誠にありがとうございました。学内では学べないことや障害を持つ方々の、実際の日常の様子を目の前で感じられ、とても良い経験となりました。コミュニケーションが難しい方であっても、できるかぎり意思を尊重し、ストレスを軽減させて快適に過ごすための工夫を沢山されていると分かりご家族や周りの方々からとても愛されているのだと感じました。

また、理学療法に関するお話も具体的にさせていただいたので、今回学んだことを今後を活かし、より一層努力していきたいと思います。あらためて本日は誠にありがとうございました。

SKさん(佐藤君担当)

この度は貴重な体験をありがとうございました。一日を通して皆さんと関わりあうことができ、想像ではなく医療的ケアの必要な方の実際の様子を知ることができ、大変貴重な時間となりました。

また、お母様や講師の方とお話させていただくことで、今の私にできることを考えるきっかけとなりました。ご家族の話や普段の生活についてもお話させていただいたのがとてもうれしく思いました。現時点で自分ができる支援の形についても考えることが出来たと思います。

このボランティアを通じて、支援の幅を増やせるように、より学びを深めていきたいと感じています。本日は誠にありがとうございました。

MIさん(藤川さん担当)

今までボランティアをしたことがなく、実際に医療的ケアが必要な方に触れ合うことが無かった私にとってとても貴重な一日になりました。

この機会を無駄にせず、今後の学びや将来に活かしていきたいと思います。

最後に、とても楽しかったです!ありがとうございました。

SSさん(山梨さん)

本日は大変貴重な時間を設けていただきありがとうございました。私はこれまで医療的ケアが必要な方々と関わったことが無かったため、お話を聞き、実際に触れ合うなかでとても多くの学びがありました

た。

なかでも、皆さんがとても明るく楽しそうに学級生の方々と関わっていたのが印象的でした。私も実際に何かしらの反応をくれたり、笑顔に向けてくれたり、声を出して楽しそうにしている姿を見たときは凄く嬉しかったです！

また同時に、車椅子やケアが必要な方々が外出する大変さも実感することが出来ました。

今回ボランティアを通して学んだことを今後活かして、これからの勉学にも励んでいきたいと思えます。

改めて、本日はありがとうございました！

MKさん(福永さん担当)

本日はありがとうございました。学級生の方々と一日一緒に過ごして、たくさんの笑顔を見ることが出来て私自身もとても嬉しかったです！皆さんの話を沢山聞かせていただく中で、この学級の温かい雰囲気や学級生の笑顔は、ご家族や学級のスタッフの方々の細やかな配慮があって生まれるものなのだと実感しました。この素敵な場に、また参加させていただけたら嬉しいです。

また、私は小学校教諭と社会教育主事の資格取得をめざしていますので、学びの場・支援についても改めて考えるきっかけになりました。貴重な経験をさせて頂き本当にありがとうございました。

TAさん(東君担当)

皆様と一日過ごすことができ、とても嬉しかったです。また、車椅子を押しながら、翼君のちょっとした表情の変化やしぐさにドキドキしたり、嬉しくなったり、私の方が沢山の思い出を頂けたなと思っています。

今回、感じた温かい雰囲気や皆様の優しさというものを忘れず、いつか私も一人前の理学療法士になれる様に、今回の経験を生かして勉強を頑張りたいなと思います。

改めて本日はありがとうございました。とても嬉しかったです。

(2) NPO 法人ひまわり Project Team

(a) 学校法人日本教育財団 首都医校 (医療系専門学校)

活動に参加する学生は四年制の高度看護学科1・2年生である。

参加の流れは以下のとおりである。まず学生の受け入れが可能な、新宿区立新宿養護学校内で行っている集合型学習の活動日程が決まった時点で、首都医校の担当教諭へ連絡する。担当教諭は参加希望者を募るポスターを作成し掲示板へ掲示する。その後担当教諭が参加希望者を取りまとめ、参加するための注意事項を学生に周知した



上で活動当日引率する。

首都医校では、学生がひまわり HomeCollege に参加することで、自己の職業適性や将来設計について考える機会となるなどの教育的効果やキャリア形成への効果を期待するとともに、学生が地域との関りを持つことの大切さも学ばせたいと言う方針から、活動には必ず教員が同行し適切な指導を行っている。

活動中は学生がマンツーマンで受講生の介助に入り、受講生に同行している保護者やヘルパーの助言を受けながら介助を行う。

同行の教員は学生のフォローに入り適宜指導する。

頻度：年 3～4 回

謝礼：なし

(b) 東京医科歯科大学

参加する学生は、医学部医学科、医学部保健衛生学科、歯学部歯学科の学生で、以前よりひまわり ProjectTeam と関りのある学生が学内で声をかけ参加を希望する学生である。

参加方法はまず、参加の動機・自己PR・参加したことを今後どのように生かしていきたいかなどを記入するボランティア登録書を提出し、参加するための注意事項を理解したうえで参加してもらう。

活動中は学生がマンツーマンで受講生の介助に入り、受講生に同行している保護者やヘルパーの指示を受けながら介助を行う。

参加する多くの学生が、ひまわり HomeCollege での経験を将来患者と向き合う際に生かしたいとしていることから、学生のキャリア形成を支援すると言う点で、ひまわり HomeCollege での活動は有効な取り組みであると考えている。

また現在、参加している学生たちで、障害児者と関わるためのコミュニティとなる学生団体の立ち上げを検討している。ひまわり HomeCollege の活動を通して、多くの学生がこういった活動にもっと参加できるようにすると良いと思うようになったとのこと。医療的ケアが必要な子どもや同世代の友達と交流できる機会は医科歯科にはなく、授業では習っても、なかなか実感が湧かない学生が多いように感じているようで、働いてから関わるのではなく、学生のうちに友達として知り合えることはとても貴重な機会だと考えていると言う。

今後は医科歯科や来年から合併する東工大などの学生にも広めていき、ひまわり HomeCollege の参加を中心に活動する学生団体創設を、大学の学生課に相談している段階とのことである。

ひまわり ProjectTeam としては、連携校の新宿区立新宿養護学校にも協力を要請し了承を得ているので、今後は情報や環境などを広く提供するなどして、学生団体の創設と運営をサポートしたいと考えている。

頻度：月 1～2回

謝礼：1,500 円+交通費 500 円/1回



《体育：新宿養護在校生とハンドサッカー合同練習》



《音楽：合奏》

(c) その他の学生

不定期に参加している立教大学大学院スポーツウエルネス学研究科の学生は、現在身体障害者のスポーツ環境に関する研究を行っており、ひまわり HomeCollege の活動に参加することで、障害者スポーツの現状と課題、現場の声を論文に活かし、障がい者スポーツの環境をよりよくするための一助にしたいと考えている。今年度行われた『学びの実り アート&ミュージックミュージアム』の医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラムも視聴しており、重症者のための生涯学習に関する情報や知識を積極的に深めている。



謝礼：なし

(d) 今後の活動について

このように、ひまわり HomeCollege では事業を開始した2013年から専門性の高い学生の受け入れを行ってきた。

このことは、受講生が多くの同年代と係わりを持ち、関係を深める事ができるのはもちろんのこと、参加する学生の教育的効果やキャリア形成に効果をもたらすこと以外に、運営する我々にとっても、学生の意見や感想を聞くことにより、新しい気付きがあり、活動内容をブラッシュアップさせることができている。今後増えるであろう受講生の受け入れが、講師を含めたマンパワー不足で、年々難しくなっていることが大きな課題ではあるが、これからも積極的に学生が受け入れられるよう広く支援を仰ぎ、多くの学生と太く長く繋がれるような活動を行っていきたいと考えている。

(3) NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会

(a) はじめに

令和元年、「卒業後も学びたい」訪問教育高等部 3 年生の一人の声に答え、訪問型生涯学習支援の事業を立ち上げました。事業のスタート時から、地域との関りを目指し、まずは大学に協力を依頼しました。学習支援員が主に退職教員で構成されており、年齢の偏りを是正するためにも、同行訪問（大学生が学習支援員と一緒に、カレッジ生宅を訪問する）が必要だと考えました。

平成31年 1 月に、その当時田園調布学園大学で特別支援教育を担当されていた鈴木文治教授に相談したところ、大学生が学習支援員の訪問に同行することは、障害の重い方との出会いの場にもなり、ベテラン教員の指導に直に触れる機会にもなると、快諾いただきました。

実際に、大学生の訪問を希望される方（家族）は多く、在宅で過ごすカレッジ生には、同世代の関りが不足し欠けています。同世代との関りを通して、「世の中の今」を肌で感じているようです。学習支援員（退職教員）も、通訳者のように大学生とのやりとりを支援し、若い世代の輝きに触発されています。

(b) 大学生の同行訪問の様子

現在、田園調布学園大学、明治学院大学、鎌倉女子大学、國學院大学の 4 大学の学生が、教授や講師のご協力・ご支援を得て、同行訪問を体験しています。ご協力を頂く先生方には、訪問型学習支援のリーフレットとボランティア募集のチラシの配布をお願いしています。事務局が大学生の参加可能日と訪問日の調整を行い、同行日を決めています。大学生には、ボランティア保険を整え、交通費相当を支給しています。

令和 5 年度は 1 月末現在で、カレッジ生の体調が整わず中止もありましたが、12 名が同行訪問に参加しています。これまでの取組を中心に、同行訪問の状況を報告したいと思います。

障害者の生涯学習の訪問サービス事業 **2023 年度** 訪問カレッジ Enjoy かながわ 学生ボランティア（サポーター）募集

NPO 法人フュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協会

あなたも障害の重い方と一緒に学びを楽しんでみませんか？ ICTに関心のある方や楽器、読みきかせ、スポーツ、芸術など好きなことある方大歓迎です。1 度、訪問カレッジに同行してみませんか！

「特別支援学校卒業後も学びたい」という声に答え、「訪問カレッジ Enjoy かながわ」を立ち上げました。特別支援の経験のある退職教員が学習支援員となり、各家庭に出向き、学習の機会を提供しています。学習の内容は、カレッジ生と支援員で相談して決定し、お互いに学びを楽しんでいます。

2020 年から大学生ボランティアの同行訪問も始めました。大学生のサポーターが訪問すると、表情が輝き、楽しんでいるのがわかります。大学生も「始めは緊張したが、少しずつ表情の変化がわかった」との感想もきかぬ、何より本人・家族が大学生の訪問を楽しみにしていることがわかり、感激したそうです。

活動に際しては、傷害保険に加入し、交通費相当額をお支払いたします。あなたも一度参加してみませんか？

■訪問カレッジ事業と事業展開 ■訪問カレッジの授業風景

生涯学習の訪問サービス事業とは
訪問カレッジ Enjoy かながわの取り組み

事業の展開

その人らしく生きる支援
「生き生きとした笑顔」が目標です。

お申し込みから訪問まで

申込み 1
メールで申込
氏名、連絡先をご記入の上、
同行訪問希望とご連絡ください。

事業説明 2
事業についての説明
場所 神奈川県社会福祉センター

同行訪問 3
可能な日程を調整
同行訪問

神奈川県社会福祉センター

住所 横浜市神奈川区反町 3-17-2
アクセス 東急東横線「反町駅」より徒歩 1 分

問い合わせ先
NPO 法人 フュージョンコム神奈川・県肢体不自由児協会
住所：〒221-0825 横浜市神奈川区反町 3-17-2 神奈川県社会福祉センター5 階
TEL：045-311-8742（10：00～16：00） FAX：045-324-8985 Mail：jimukyoku@kenahikyoku.jp

ボランティア募集のチラシ

①大学生の同行訪問の流れの例

1) 同行訪問の流れの例

1. 日程調整が決定したら、大学生には自己紹介を依頼する。カレッジの保護者には事務局から学生の参加を知らせ、了解を得ておく。

2. カレッジ生のお宅の最寄り駅で待ち合わせ
3. 簡単な打ち合わせ（授業の流れ、カレッジ生の様子やコミュニケーション手段、配慮事項等）を、訪問宅への移動中に行う。
4. 訪問時は 自己紹介、授業の参観 学習支援員の指示のもと授業への参加
5. 終了後、感想を聞く

2) 大学生同行訪問の時の写真



② 田園調布学園大学

(a) 取組開始

神奈川県立特別支援学校を校長で定年退職して、本学で教員となったのは、平成31年4月でした。その同時期に成田理事長（以下）から依頼もあったので、訪問カレッジの取組を大学としてどのように対応するか検討しました。そして、令和2年から専門演習（ゼミ）で取組むことにしました。

訪問カレッジに参加することを前提に、まず重複障害者と係る上での基礎理論を3年の前期に学ぶことを始めました。具体的には、梅津八三「重度・重複障害者の教育のあり方」と、桂聖、小貫悟「授業のユニバーサルデザイン」をゼミで輪読して、障害の重い人と個別に係る時の視点と、誰にでもわかり

できる授業の方法を学びます。これは、令和6年現在でも続いています。その上で後期には、特別支援教育の課題の一つとして、障害の重い人の生涯学習の「訪問カレッジ」の具体的な話をします。令和2年には、コロナ流行の波の切れ間に学習支援員さんに実際にゼミに来ていただき説明をしていただきました。そして、ゼミ生から、訪問する前に自己紹介の動画を作って、カレッジ生に見てもらおうという提案がありました。そこで、ゼミ生の自己紹介動画を作り、学習支援員さんに託して、カレッジ生に視聴していただきました。

ゼミ生が4年になり、3年のゼミでの学びを基礎に、実際に訪問を開始しました。ゼミ生は、教育実習や採用試験の準備で忙しい時期ですが、その合間を縫って大学の程近くに在住のAさん宅に訪問を始めたというわけです。初回は、筆者も同行しました。以降は、学習支援員さんとともに訪問しました。

(b) サークル結成

カレッジ生宅の訪問を学生は、厭うことはなく、むしろ喜びと感じたようです。「この喜びを後輩に繋げていくことが最優先」と考えて、ゼミ生の一人が、わずかな期間で「BONDS」(絆)というボランティアサークルを立ち上げました。そして、初代サークル長(私たちは、部長と呼んでいます)に就きました。サークル化することで、学生の活動が引き継がれるであろうこと、大学からの支援も得られるということが動機のようなものでした。

学生が自分事として訪問カレッジを捉えていること、自分では思いもつかないような柔軟な発想に感心しました。令和6年現在、部長は第4代が決まったとのことでした。

(c) 周知のために

訪問カレッジは、本県では令和元年からの事業であり、一般の人にはほとんど知られていないというのが現状です。周知する必要があります。そのために、筆者がコーディネータとなって、本大学で次のようなシンポジウムや講座を開催しました。

- ・令和元年(平成31年)8月シンポジウム「障害の重い人の暮らしを支えるためにはⅠ」
- ・令和4年2月公開講座・シンポジウム「障害の重い人たちの生涯学習支援の現状と課題—様々な視点から支援を考えるⅠ」
- ・令和4年8月シンポジウム「障害の重い人の暮らしを支えるためにはⅡ」
- ・令和5年11月には、文部科学省が共催、主催 NPO 法人ピープルデザイン研究所が開催するフォーラム「超福祉の学校」に BONDS 初代部長が登壇して、神奈川県のカレッジと BONDS を紹介しました。

(田園調布学園大学共生社会学科教授 新井 雅明)

③ 明治学院大学

(a) 「学びの実り」ボランティア参加から訪問型学習支援の同行訪問へ

私は、明治学院大学で非常勤講師として勤務する傍らフュージョンコムかながわ・県肢体不自由児協

会で学習支援員を行っています。訪問型生涯学習への参加を学生に働きかけたことについて報告します。

担当する授業（特別支援学校教諭の免許取得を目指す学生のための講座）を受講する3年、4年生の学生及び学生相談を利用した大学院生1名に、リーフレット及び「学びの实りアート&ミュージックミュージアムミュージアム（学びの实り）」のチラシを配付し、「学びの实り」ボランティア希望の呼びかけを行いました。説明については授業終了後に概要を話し、訪問型生涯学習についてはリーフレットを参考にしてもらいました。そこで希望された学生にボランティア申込書を配布し事務局に提出するようにしました。

「学びの实り」1日目4名、2日目4名、計8名の学生及び大学院生の参加がありました。当日、ボランティアとして参加した学生は、会場準備、撮影、「大学生の部屋」の活動（ボッチャ体験）、カレッジ生を含む来客への対応などに積極的にあたり、「学びの实り」の運営に大いに貢献していたと思います。活動の合間に参加した支援機器の体験は、有意義だったという感想がどの学生からも聞くことができました。フォーラムを担当した学生は、「フォーラムの内容は、難しいところもあり十分に理解できたとは言えないが新しい学びがあり、参加してよかった。」という感想がありました。

また、来場者として訪問カレッジの利用者もあり、直接かかわる機会が貴重な体験だったようです。このことから、実際の授業の様子を知りたいと8名が全員同行訪問を希望してきました。

「学びの实り」後、改めて授業で同行訪問ボランティアの説明と参加者を募り、新たに3名が加わり現在11名の希望者がいます。そのうち1月末現在2名が同行訪問を実施しました。他の学生については、年度末試験が終わる2月より日程調整を図る予定です。

参加した学生とは、カレッジの授業前に打ち合わせをしました。カレッジ生の日ごろの授業の参加の様子、当日の授業内容や流れ、学生にお願いしたいこと（自己紹介、授業の補助）などを伝え、事前に知っておきたいことがあれば答えるようにしました。訪問時は、どの学生も少し緊張している様子でしたが、保護者がとても喜んで受け入れてくださることや、カレッジ生が学生をよく注目している姿に、ごく自然にカレッジ生に話しかけていました。学生の中には、タブレットで映像もまじえた自己紹介を準備している方もいました。

授業が進むにつれてカレッジ生の表出に気づき、返事や話しかける機会も増えていました。また、学習支援員の授業にも関心を持って「一緒に勉強ができた。難しいことを学んでいるのに驚いた。」という感想もありました。

教員を目指す学生にとって同行訪問が学びそのものであり、そのことをカレッジ生や保護者に伝えると「大学生の役に立っているんだって。学生の先生だったんだって。」と、とても嬉しそうにされていました。学生にとっても、自分たちに期待されていることや役割を実感する場面でもありました。

(b)参加した学生への聞き取り 大学院 2年生

(ア)参加動機

肢体不自由に関する授業を履修したことはありましたが、書籍や映像でしか学習したことがなかった

ため、実際に関わってみたいと思ったからです。また、特別支援学校で働くことが決まり、コミュニケーションの取り方や高等部を卒業したあとの生活のしかたなどに興味があったため、参加を決めました。

他にも、特別支援学校を退職された先生方がどのような授業、声掛けを行っているのか等、学べることが沢山あると思い、参加しました。

(イ) 参加前に思っていたこと

これまで肢体不自由の方と関わった経験がなかったため、コミュニケーションが取れるか不安でした。

(ウ) 参加後に思ったこと(感想)

関わっていくにつれ、少しずつコミュニケーションの取り方などが分かりました。短い時間のなかでも、ご本人の意思表示に気づくことができ、嬉しかったです。

他にも、ご本人だけでなく、ご家族の方のお話も聞くことができよかったです。

(エ) 今後、様々な人にこの取り組みに参加してもらうには、どんなことが考えられるか。

大学で募集するのであれば、ボランティアセンターなどを活用すると多くの方に周知してもらえるのではないかと思います。あとは、大学構内の掲示板に貼るなどでしょうか。

(明治学院大学非常勤講師 奥野 康子)

(c) 同行訪問に参加した学生の声

明治学院大学の取組にもあるように、今年度は、参加した学生に後日アンケート(聞き取りも含む)を実施した結果、次のような感想や意見が届けられた。

(1) 参加動機

ゼミの先生から話を聞いた。また、特別支援教諭を目指していることから、多くの経験のある学習指導員の方の授業を実際に見ることができ、勉強になると思ったため。	学習支援の場に関心があり、高橋先生の話聞いてやってみたいと思った。人との関わりや支援に関心がある。
ゼミの先生から紹介され、興味を持ったため。特別支援学校教諭になる予定だったため、学校以外の場で行われているボランティア活動に参加して、障害者支援のリアルを見てみたかった。	奥野さんのご紹介。学生ボランティアとして特別支援学校に行くことはありましたが、訪問教育まで参加させて頂くことはなかったため、訪問教育でどのような事をしているのかがわからず、とても興味がありました。
山口先生にお誘いいただき、将来教員になるに向けて、特別支援学校に通った子どもたちの卒業後の様子や生活について学んでみたいと思ったため。	ゼミの活動。
大学の先生に紹介していただき、自分が特別支援学校ではたらかたいと思っていたため、今後に生かしていけると思ったから。	・障害のあるひとの生涯学習に興味があったから。訪問型の支援は実際に自分の目で見て、活動内容や雰囲気を知りたいと感じていたから

(2) 参加前に思っていたこと

<p>自宅での学びになるため、限られた教材でできることが少ないのではないかと感じていました。</p>	<p>学校での授業は見たことがあったが、訪問授業は見たことがなかったことから、どんな内容や教材を使うのか想像がつかなかったです。</p>
<p>不安があった。授業はどのように進み、自分はどうサポートすればよいかわからない。カレッジ生について、高橋先生から話を聞いていたがイメージしにくく、どう接してよいかわからなかった。</p>	<p>自分にはなにができるのか？なにを話せばいいのか？とても不安だった。肢体不自由児と聞いていたが、実際に接したことがなかったため、会話の仕方やコミュニケーションのとり方は何が正しいのか悩んだ。 一方で、肢体不自由児と接する機会をいただけたことで、どのような人と活動ができるのかワクワクしていた。体験内容も ICT 活用と聞いていたので、半分勉強、半分遊びの気持ちで臨みたいと考えていた。</p>
<p>これまでいろいろな身体障害のある方とコミュニケーションをとったことはないため、不安はありました。</p>	<p>支援員の方々がどのような授業をしているのか学びたい。生徒の方が授業に対してどのように取り組んでいるのか知りたい。</p>
<p>重度重複障害のある方とほとんど関わったことがないため、どのように接すればいいかわからないという不安。</p>	<p>参加前後で大きな変化はなく、やはり障害があるなしに関わらず、誰もが一生涯学べる環境はあるべきだと感じた。障害があるから、簡単な内容とか、学ばなくていいとかではなく、みなが平等に学べる場を作っていく必要があると考えた。</p>

(3) 参加後に思ったこと(感想)

<p>楽しかった。カレッジ生と話をすることが楽しかった。話のやり取りを楽しんでいて「会話」が成立していたように感じた。表情やしぐさで、どう思っているかくみ取りたいと思った。</p>	<p>参加前は出来ることが少ないと考えていましたが、実際はそんなことはなく教材はとても工夫されていて勉強になりました。また、訪問教育は個での活動をイメージしていましたが、横のつながりもとても多く私も教員になった時は、この訪問カレッジで学んだことを活かしていきたいと感じました。</p>
<p>学習支援員の皆さんが訪問先のカレッジ生に「より良い授業を」という思いや教材研究の熱意に感銘を受けました。また、カレッジ生も活動に充実した表情で参加しているのがとても印象的でした。さらに、普段できない体験ができることから、新たなカレッ</p>	<p>率直に言うと、楽しかった!のひとことに尽きる。 特支について学ぶと、よく「学んでいることに気付かせないで成長させる、学ばせる」ことが大切であるということをよく聞いたが、まさにその通りだと感じた。季節の話題や、体験型の学習が多かったり、NPO 法人の方々やボランティア側の体験談を聞かせたりと、家と病院の往復</p>

<p>ジ生の興味や世界が広がることを感じました。そして、カレッジ生だけでなく保護者の方も支援員の方に相談や不安に思っていること話せる機会となっていると思い、訪問支援の大切さを感じました。</p>	<p>だけでは感じられないような体験を、カレッジ生と共に行けるように工夫されているのだと感動した。</p>
<p>皆さんが生き生きと世界に興味をもって取り組まれている様子が印象的でした。同じくらいの年齢の方であるのもあり、毎回とても楽しいです。</p>	<p>家族の方もとても協力的で、目線の動きなどから熱心に授業に取り組んでいる姿勢を見ることができたのがとても印象的でした。</p>
<p>今回関わることができた当事者とは、好きなものが一緒に、色々話すことができ、とても楽しかった。</p>	<p>参加前は少し不安もあったが、実際に一緒に勉強をさせていただいたことは貴重な経験になった。また、予定が合えば参加させていただきたいと感じた。</p>

(4) 今後、様々な人がこの取り組みに参加してもらうためには

<p>ボランティア活動に興味がある人に、積極的に知ってもらう。また、訪問カレッジでの活動についての内容を具体的に知ってもらう。</p>	<p>若い人たちは、「X(旧ツイッター)」や「インスタ」などを見ているので、そこに情報を乗せれば拡散してくれると思う。</p>
<p>どうしても学生には「ボランティア」というものに壁を感じている人が多い気がします。難しいかもしれませんが、ボランティアがやる事を明記したり、活動の様子動画をみられたりすると少しでもハードルが下がるのかと思います。SNSとかも学生はよく見るので、効果的かもしれません。</p>	<p>個人のお宅にお邪魔するというとハードルが高く感じてしまうが、実際に参加してみると受け入れる側も温かく受け入れてもらえることがわかった。 チラシにも書いてあるように、参加者や受け入れる家族側の感想を載せることはとても効果的だと思う。他にも、実際の活動を撮影した映像や、NPO 法人の方々やボランティア参加者の感想ビデオ、実際の活動内容を詳しく書いたレポートなどが HP があると、「自分でもできることがあるんだ!」と、もっと軽い気持ちで参加しやすくなるかもしれない。</p>
<p>すでに行われているかもしれませんが、大学のボランティアセンターに登録しておくことが考え付きました。</p>	<p>ゼミの中だけでなく、授業などで呼びかけや活動の紹介を行うことで少しでも興味のある学生が参加できるきっかけとなるのではないかと考えます。</p>
<p>今後、通常学級、特別支援学校で働こうと思っている人々に、様々な人と関わることは、教員人生に生かすことができると思うので、ボランティア活動を多くの人に伝えることがいいと思った。</p>	<p>障害がある方たちが、どれだけ制限がある中で過ごされているのかをより学びながら、差別されず、平等に学びの場があることの重要性を知ることが必要だと思うので、そういった情報提供の場や学びの場があるとよいのではないかと。</p>

(d) まとめ

「参加前」の大学生のアンケートからは、参加への不安の大きさが読み取れます。障害の重い肢体不自由児者と接する経験がないことに加え、個人宅へ訪問（訪問教育）することもあり、体験の内容がイメージできず不安が増幅しているようです。しかし、不安を押して参加してみると、多くの大学生が、同行訪問はかけがえのない体験だった回答しています。「参加後」の感想では、「楽しかった」「意思表示に気づけた」「ご家族の話が聞けた」「訪問支援の大切さを感じた」と綴られており、教員を目指す大学生には教材研究の面白さにも触れる時間にもなり、同行訪問を体験する意義は、大きいと言えます。

今後の課題は、「この活動を多くの大学生にどう知ってもらおうか」、「参加前の不安どう除くか」の2点に尽きるように思われます。

情報発信については、田園調布学園大学の取組の中にあるように周知活動が大切です。大学生のアンケートの「今後、様々な人がこの取り組みに参加してもらうためには」の回答に、活動の様子の動画配信や SNS の活用など、訪問カレッジの様子を知ってもらう工夫が記載されており参考になります。メディア等を活用し、積極的に情報発信を行い、訪問型生涯学習支援のすそ野を広げることが大変重要であると考えます。

そして、同行訪問参加の不安を除くためには、明治学院大学の取組にあるように、「学びの実りアート&ミュージックミュージアム（学びの実り）」の祭典行事に、ボランティアとして参加する事前体験が有効であると考えられます。また、田園調布学園大学のようにゼミの活動の中で、障害の重い方と直に関わるフィールドの一つとして、訪問型生涯学習支援を実践の場として活用する方法も増えると良いと思います。

何より、大学生にとっては、信頼できる大学の先生方の紹介・支援が安心材料になり、不安を超えて一歩踏み出す契機になっていると思われます。学習支援員が、大学のゼミやサークルに出向き、訪問型生涯学習支援の活動を大学生に直に紹介し、同行訪問のイメージを持っていただくことも、不安を取り除く際に有効であると思われます。

また、人材育成の視点で言えば、同行訪問は、到達点のないボランティアの体験と言えます。しかしながら、訪問を楽しみに待ち、心から喜んでくれるカレッジ生や家族の存在は、大学生に多くの事を考えさせているようです。障害の重い方やそのご家族との関わりは、自分を振り返り、相手の目線に立つことや多様な価値観を育成する貴重な体験になっていると感じます。

たった 1 度の同行訪問の体験であろうとも、参加した学生たちの今後の人生の中でどのように育まれていくか、同行している学習支援員の楽しみでもあります。

(4) 「人材育成」に関する考察

(a) はじめに

今年度は人材育成についての項では、大学生ボランティアの育成にしばって研究した。

重度障害者生涯学習ネットワークでは、訪問カレッジ（日野市障害者訪問学級では学級）のカレッジ生（日野市では学級生）のところの訪問授業に大学生に来てほしいという希望を強く持っている。それは、カレッジ生（学級生）が年代の近い人たちとの交流が必要である、ということが一番大きな要因だが、また同時に高齢化していく学習支援員（日野市では講師）の確保の観点でも必要な活動なのである。

しかし、なかなか来てもらえない現状があり、そこで、どのようにしたら来てもらえるのか、お互いの事情を確認することを今年の研究課題として取り組んだ。

(b) 現状での大学生ボランティアの参加の形

日野市障害者訪問学級、ひまわり project team、フュージョンコムかながわと3団体における大学生ボランティアの参加の形態をそれぞれに報告しているので、まとめて表にして比較してみた。（別表1）

別表1

実施団体名	日野市障害者訪問学級	ひまわり Project Team			フュージョンコムかながわ		
		首都医校（高度看護学科1・2年生）	医科歯科大学（医学部医学科、医学部保健衛生学科、歯学部歯学科）	立教大学大学院スポーツウェルネス学研究所	田園調布学園大学人間福祉学部共生社会学科	明治学院大学心理学部教育発達学科	鎌倉女子大学教育学部教育学科 國學院大學人間開発学部初等教育学科
連携大学学部・学科	個人（立教大学） 個人（明星大学）	担当教員が募集	経験のある学生からの声掛け	特別支援学校教諭からの紹介	新井雅明教授のゼミ講義 ボランティアサークルBONDS	奥野康子講師授業で紹介	大学教員授業等で紹介 事務局連絡
連携の場面	11月遠足（校外学習支援） 自宅訪問	新宿養護での集団学習	新宿養護での集団学習 自宅訪問	新宿養護での集団学習 学びの祭りフォーラム視聴	イベント参加1回（学びの祭り） 自宅訪問 今年度15回同行訪問実施（2024年2月時点）		
連携の回数・人数	1回（遠足時、参加大学生6名） その後の	年3-4回 1回 4-5名	月1-2回 1回 1-3名	年2-3回 1回1名	イベント参加1回 大学祭とぶつかり2大学は参加できなかったが13名が参加 自宅訪問		

	自宅訪問 1-2回				今年度15回大学生同行訪問実施 (2024年2月時点)
訪問時の 謝礼など	遠足時 (1600円 /日) 講師 (2,800円 /時)	謝礼無し	1500円 + 交通費 500 円	謝礼無し	イベント時 最寄り駅からの交通費実費支給 カレッジ生宅訪問時 交通費として一律2000円支給 いずれもボランティア保険加入。
大学生の 感想	貴重な経 験 コミュニケ ーションが とれてうれ しい	自己の職 業適性や 将来設計 について 考える機 会になっ た	大学の授業 で実感がわ かなかつた事 が、体験でき た、これを友 人に伝えたい	障害者ス ポーツの環 境をより良 くしたい	参加前は肢体不自由の方と係わりがなくコミュニケーションが取れるか不安だったが、関わるにつれコミュニケーションの取り方もわかり、カレッジ生ご本人の意思表示にも気付けた。教材の工夫も勉強になり楽しかった。ご家族の方のお話も聞いて感動した。
体験後	講師として 定期的な 訪問へ。1 月、2月と 個人宅へ の訪問ベ テラン講 師と同行。	同行の教 員が活動 参加中も その後も フォロー し、指導す る。	参加した学生 が、ひまわり HomeColle ge 参加を中心と した学生団体 創設を大学学 生課に相談中	研究を論 文に。重症 者のため の生涯学 習に関する 情報や知 識を積極 的に深めて いる	イベントへの参加から同行訪問の希望に繋がり、重度重複障害者への関心がより深まっている。 障害の重い方やその家族と関わる体験は、多くの事を学ぶ機会になり、個々の人生に活かされていくことを期待している。
備考					事業の啓発 活動。シンポ ジウム・講座 の実施

(c) 比較しての特徴は

ネットワークの中には、報告2のひまわり project team、報告3のフュージョンコムかながわ、など大学や専門学校に直接交渉をして、又大学教員と連携して、大学生を派遣していただけるようになり、それを継続して大学生の受け入れができていく先進的団体もあるので、まずその経緯を確認してみた。

【ひまわり Project Team の場合】

この団体を立ち上げた方が保護者であり、団体の立ち上げと同時に学校関係者への直接交渉で連携を確保したという経緯がある。

特色としては、新宿養護学校で行う集団学習の日程が決定した段階で首都医校の担当教諭へ連絡し、担当教諭が参加希望を募るポスターを作成し掲示板に掲示する。など、手続きがすでに習慣化していて、首都医校の中でも定期的な活動としてすでに定着している点にある。

また、高度看護学科学生とのことで、1-2年生とは言え将来の仕事への意識から重度障害者への興

味関心が強いというベースの理解があることも強みだ。同様に医科歯科大学医学部医学科、医学部保健衛生学科、歯学部歯学科では学生主体で呼びかけていること、将来的に経験を生かして患者と向き合う際に生かしたいとのキャリア形成の意識が高く、加えて、学生自体が学生団体を立ち上げようとしている点も意欲的では素晴らしい。

【フュージョンコムかながわ】

この団体の立ち上げ主体に特別支援学校校長経験者が多く、事業の当初から地域連携を目指していたことから、近隣大学に協力を依頼した。学習支援員が支援学校の退職教員が多く、カレッジ生の年代にちかい学生の同行訪問が必要だと考えたためとのことだ。連携大学は田園調布学園大学、明治学院大学、鎌倉女子大学、國學院大學と広く、特別支援教育など教育分野の学生が多いことが特色といえる。

田園調布学園大学の新井先生のご専門は共生社会学科であり、明治学院大学の奥野先生は特別支援学校教諭教員免許状取得を目指す学生の指導をされておられるので、教育学の学生が中心となっている。田園調布学園大学では、初めて参加した大学生が、大学にボランティアサークル BONDS 結成し3年目にあたる。次期部長も決まり学生間で、大学生の同行訪問が受け継がれている。

重度障害者の生涯学習を考える時に地域では、重度障害があることで問題を扱う担当が医療面、福祉面、教育面と分かれることがよくある。

今回の学生ボランティアの派遣の大学の傾向でもひまわり project team では医療系の大学との連携が強く、一方フュージョンコムかながわでは教育系の大学との連携が強いという印象がある。一旦途切れてしまったことでこれから再構築を目指している日野市障害者訪問学級の場合は、現在は医療系でも教育系でもなく市民ボランティア系あえて言えば福祉系？。今回遠足をきっかけとして、大学の理学療法学科の学生の参加があり、現在鋭意努力中の指導教官とのつながりができてくれば、医療系の学生との連携ということに近づいていくかもしれない。

(d) 定期的な訪問のできる大学生を講師として迎えることは可能か？

日野市ではかつて10年前まで、近隣大学の学生ボランティアサークルの学生が一度の体験としてではなく、定期的に訪問指導をする講師(学習支援員)となっていたことがある。その当時を知る保護者からは、大学生が1年毎に成長していく様子が、とても楽しく、うれしかったと聞く。実際、現在訪問学級生が日々通所している福祉作業所の副所長は当時のこの学生サークルの出身者である。

学生ボランティアサークルの中では重度障害者への対応や訪問の際の注意事項などを先輩から後輩へ伝えられていたし、同時に訪問学級でも年間数回の講師・保護者研修会や打ち合わせ会に学生の参加を促して交流ができていたという。学級生の障害の状況は今よりは少し軽く、医療的知識はそれほど必要のない側面もあったかもしれないが、発語のない肢体不自由の学級生との交流は大学生にとっては刺激的なハードなしかし貴重な楽しい経験であったと40周年記念誌の中で元ボランティアは書いている。

日野市の訪問学級では、過去の経験も踏まえて、学生ボランティアを1回限りの見学者というより、現

任の講師と協働的に訪問を続けていく講師としての参加を考えている。どのようにしたら、それが可能になるのかは、今年度同行訪問を始めた2人の大学生のようすにかかっている。どちらも経験豊富な講師と共に学級生と活動しているので、楽しみながら、お互いに市民としてのお付き合いのレベルからコミュニケーションをとれる関係になる事を目指していってくれることを願っている段階だ。共生社会の担い手として、障害のある人と定期的に会ってコミュニケーションをとることは必ずしも身体状況などの専門的知識や、特別支援教育の指導技術や手腕が無くてはできないことではない。学生ボランティアがその時にできる範囲での他者をおもんばかる力で勝負してもらうことは、学級生(カレッジ生)にとっては友人ともいえる存在であり、社会との触れ合いそのものの貴重な時間になるはずである。その中でお互いに学びあっていくに違いない。その点では日野市障害者訪問学級では毎年市と協働で市民全体に呼び掛ける形での「ハートフル・サポーターになりませんか?の講座」(旧講師養成講座)を開催していて、ここに大学生も参加することがある。

ボランティア大学生にとっては学業との両立が可能な範囲での活動になる。そこでこのような活動が、大学が必要と認めるキャリア形成支援として認められるとすれば、どうだろうか?

(e) 大学での学生のキャリア形成支援の扱いについて

昨年度の報告書の作成の中で、現在の大学生のキャリア教育に関して、文部科学省、厚生労働省、経済産業省の3省合意により「インターンシップをはじめとする学生のキャリア形成支援に係る取り組みの推進にあたっての基本的考え方」(平成9年9月作成、平成26年、平成27年、令和4年一部改正)が出されていることを知った。

これによると、大学等において学生のキャリア形成支援に係る産学協働の取り組みは『大学等での学修と社会での経験を結びつけることで、学修の深化や学習意欲の喚起、職業意識の醸成などにつながるものであり、その教育的効果や学生のインターンシップを始めとするキャリア形成支援における効果が十分に期待できる重要な取組である。』と述べている。そして、それぞれにとっての意義を次のように展開している。

①大学等及び学生にとっての意義 (詳細省略)

○キャリア教育・専門教育としての意義 ○教育内容・方法の改善・充実

○高い職業意識の育成 ○自主性・独創性のある人材の育成』

ボランティア大学生が体験した後の感想文で述べていることがこれらにあたっていることを考えると、現在のボランティア大学生の活動はそのまま、キャリア形成支援の活動であるといえる。

また、企業等における意義として

②企業等における意義(詳細省略)

○実践的な人材の育成 ○大学等の教育への産業界等のニーズの反映

○企業等に対する理解の促進、魅力発信 ○採用選考時に参照しうる学生の評価材料の取得』

ここで、《企業等》を《重度障害者の生涯学習》と読み替えてみると、ボランティア大学生の人材育成という面だけでなく、まさに、大学への重度障害者の生涯学習へのニーズの反映でもあり、理解の促進でも

あることが見えてくる。最後の○の評価については今後の検討が必要になると思われる。

ただ、問題はないわけではない。つぎにこの取組の推進の望ましい在り方については、留意事項としていくつか挙げている。

『(1) 大学等におけるインターンシップをはじめとするキャリア形成支援に係る取り組みについての留意事項(詳細省略)

- ①大学における取組の位置づけ ②実施体制の整備 ③取り組みの教育目的の明確化
- ④取り組みによる学習成果の評価等 ⑤実施時期・期間 ⑥形態の多様化 ⑦場の多様化』

など多岐にわたる。

単位の認定などについては、一定の水準を満たすなどの条件、大学の教育、専門教育の中での位置づけが明確にならなければならないなど、タイプ2, 3, 4などでは十分な検討が必要。またタイプ1に原則単位認定はないが、有益と判断されれば授業にとり入れるなど大学等の教育課程の中に位置づけることを含め検討することが必要である。と述べるなど、タイプ1-4別に扱っている。(別表2)

一方受け入れる企業等(重度障害者生涯学習と読み替えて)の側の留意事項もある。

『(2) 学生を受け入れる企業等におけるインターンシップを始めとするキャリア形成支援に係る取り組みについての留意事項(一部省略)

- ①取り組みに対する基本認識 ②実施体制の整備 ③経費に関する問題
- ④安全・災害補償の確保 ⑤労働関係法令の適用 ⑥適切な運用のためのルール作り』

以上、今後大学等の側の学生のキャリア形成支援のプログラムに入れてもらうようにするには、大学、訪問カレッジ側の双方でのいろいろな面での検討が必要だが、大きな流れとして、キャリア形成支援の中に位置づけられることははっきりしてきた。

重度障害者生涯学習ということについて、大学等教育の場でも周知してもらうことができ、ボランティア学生の活動が大学の教育のプログラムの中に位置づけられることを視野に入れて、今後も活動を継続していけると良いと思う。

(文責 大石恒子)

4 類型の各タイプの特徴

- ◆ 以下の4タイプの多種多様なプログラムの実施を通じて、学生のキャリア形成を産学協働で支援。いずれも学生の参加は任意
- ◆ タイプ3ならびにタイプ4が「インターシップ」に該当する活動

類型	取組みの性質	主な特徴
タイプ1： オープン ・カンパニー ※オープン・キャンパス の企業・業界・仕事版	個人・業界の 情報提供・PR	<ul style="list-style-type: none"> ● 主に、企業・就職情報会社や大学キャリアセンターが主催するイベント・説明会を想定 ● 学生の参加期間（所要日数）は「超短期（単日）」。就業体験は「なし」 ● 実施時期は、時間帯やオンラインの活用など学業両立に配慮し、「学士・修士・博士課程の全期間（年次不問）」 ● 取得した学生情報の採用活動への活用は「不可」
タイプ2： キャリア教育	教育	<ul style="list-style-type: none"> ● 主に、企業がCSRとして実施するプログラムや、大学が主導する授業・産学協働プログラム（正課・正課外を問わない）を想定 ● 実施時期は、「学士・修士・博士課程の全期間（年次不問）」。但し、企業主催の場合は、時間帯やオンラインの活用など、学業両立に配慮 ● 就業体験は「任意」 ● 取得した学生情報の採用活動への活用は「不可」
タイプ3： 汎用的能力 ・専門活用型 インターシップ	◆ 就業体験 ◆ 自らの能力 の見極め ◆ 評価材料の 取得	<ul style="list-style-type: none"> ● 主に、企業単独、大学が企業あるいは地域コンソーシアムと連携して実施する、適性・汎用的能力 ないしは専門性を重視したプログラムを想定 ● 学生の参加期間（所要日数）について、汎用的能力活用型は短期（5日間以上）、専門活用型は長期（2週間以上）★ ● 就業体験は「必ず行う（必須）」。学生の参加期間の半分を超える日数を職場で就業体験★ ● 実施場所は、「職場（職場以外との組み合わせも可）」（テレワークが常態化している場合、テレワークを含む）★ ● 実施時期は、「学部3年・4年ないしは修士1年・2年の長期休暇期間（夏休み、冬休み、入試休み・春休み）」「大学正課および博士課程は、上記に限定されない」★ ● 無給が基本。但し、実態として社員と同じ業務・働き方となる場合は、労働関係法令の適用を受け、有給 ● 就業体験を行うにあたり、「職場の社員が学生を指導し、インターシップ終了後にフィードバック」★ ● 募集要項等において、必要な情報開示を行う★ ● 取得した学生情報の採用活動への活用は、「採用活動開始以降に限り、可」 ● ★の基準を満たすインターシップは、実施主体（企業または大学）が基準に準拠している旨宣言したうえで、募集要項に産学協働基準準拠マークを記載可
タイプ4（試行）： 高度専門型 インターシップ ※試行結果を踏まえ、 今後判断	◆ 就業体験 ◆ 実践力の 向上 ◆ 評価材料の 取得	<ul style="list-style-type: none"> ● 該当する「ジョブ型研究インターシップ（文科省・経団連が共同で試行中）」「高度な専門性を重視した修士課程 学生向けインターシップ（2022年度にさらに検討）」は、大学と企業が連携して実施するプログラム ● 就業体験は「必ず行う（必須）」 ● 取得した学生情報の採用活動への活用は、「採用活動開始以降に限り、可」

4. 理解啓発

(1) 第2回「訪問カレッジ『学びの实り アート&ミュージックミュージアム』」の概要

- 1 期日 令和5年11月3日(金・祝) 午後1時~4時
11月4日(土) 午前10時~午後3時30分
- 2 会場 かながわ労働プラザ(住所 〒231-0026 神奈川県横浜市中区寿町1丁目4)
JR京浜東北・根岸線「石川町駅」中華街口(北口)徒歩3分)
- 3 主催 重度障害者・生涯学習ネットワーク ※文部科学省委託事業
- 4 後援 神奈川県、神奈川県教育委員会 横浜市教育委員会、
川崎市、川崎市教育委員会、相模原市、神奈川県社会福祉協議会
- 5 対象 どなたでも参加できます
※11月4日(土)のフォーラムは、事前申込をお願いします。「11 申し込み方法」参照
- 6 参加費 無料
- 7 目的

- (1) 国の障害者の生涯学習に関する施策の理解・啓発を推進する。
(2) 学校卒業後の学びの機会と場の実際について周知し、その意義について理解を広める。
(3) 学校卒業後の訪問型生涯学習の制度創設に向けた発信を行う。

※本事業は文部科学省「令和5年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」における「『重度医療的ケア者対象の訪問型生涯学習支援』に向けた実践研究」の一環です。

8 開催日程と会場

受付:1階ギャラリーにて受付を行い、各会場にご入場ください。 ※4階 会議室 9 スタッフルーム

日付	階	会場	午前	午後	
11月3日 (金・祝)	1	ギャラリー	<準備>	重度障害者・生涯学習ネットワーク 展示(ポスター、学生作品)	
	4	会議室5	<準備>	学び・ア クティビ ティ体験	①アートの部屋
		会議室6	<準備>		②朗読の部屋
		会議室7	<準備>		③大学生の部屋
		会議室11	<準備>	支援機器・教材体験/相談室	
	和室	休憩室			
11月4日 (土)	1	ギャラリー	重度障害者・生涯学習ネットワーク展示(ポスター、学生作品)		
	4	会議室 5・6・7	フォーラム第1部	フォーラム第2部	
		会議室11	支援機器・教材体験/相談室		
	和室	休憩室			

9 内容

(1) 受付・フォトスポット(1階 ギャラリー)

1階ギャラリーにて受付を行い、各会場にご入場ください。フォトスポットを設けますので、来場の記念に写真をお撮り下さい。

(2) 重度障害者・生涯学習ネットワーク展示

(1階 ギャラリー)

訪問型生涯学習支援等に取り組む会員団体の紹介と学生の学びをポスターと作品等で紹介します。

(3) 支援機器・教材体験／相談室(4階 会議室11)

学生が学びの中で使用している支援機器、教材や玩具等を会場で体験できます。各種スイッチ、おもちゃ、意思伝達装置等の相談も受け付けます。

(出展: あっきーの教材工房、スマイリングホスピタルジャパン学びサポート、ST@、おおきなき)

(4) 学び・アクティビティ体験(4階 会議室 5.6.7:

11月3日)

※YouTube ライブ配信

①アートの部屋(会議室5) 13:00~16:00 *
オリジナルアートを作ってみましょう。先着 30 名

講師: 白瀬綾乃 氏(バリアフリー造形教室みんなのアトリエ・臨床美術士)

②朗読の部屋(会議室6) ①13:00~13:45 ②14:00~14:30 ③15:00~15:50

*小説、童話、朗読劇等、物語の中に誘います。

講師: NPO 法人日本朗読文化協会 朗読ボランティアグループ<かもめ>

③大学生の部屋(会議室7) 13:00~16:00 *大学生企画の催し物。内容は楽しみにです。

協力大学: 田園調布学園大学、明治学院大学

(5) 生涯学習を推進するフォーラム(4階 会議室 5.6.7: 11月4日)

※YouTube ライブ配信

私たちネットワークでは、「いつでも、どこでも、だれにでも、学ぶ喜びを!」を合言葉に、医療的ケアの必要な方々の学校卒業後の学びを支えてきました。学ぶ喜びが、可能性の芽を育て、生命を強めています。その笑顔やまなざしが、人を動かしています。学び続けたいという願いを叶える機会と場を「ひろめる・深める」ことが私たちの使命です。想いをつなげ、形にしていくために「第4回 医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム」を開催します。会場参加 30 名ですので、事前にお申し込み下さい。

<第1部>学生の学びの発表とレクリエーション 午前 10:00~12:00

司会 片山由美(神奈川県教育委員会特別支援教育課・専門員)

①オープニングビデオ: ネットワーク会員団体の学生の学びの様子のダイジェスト

②挨拶 飯野順子(重度障害者・生涯学習ネットワーク代表)

鈴木規子(文部科学省 総合教育政策局 障害者学習支援推進室長)

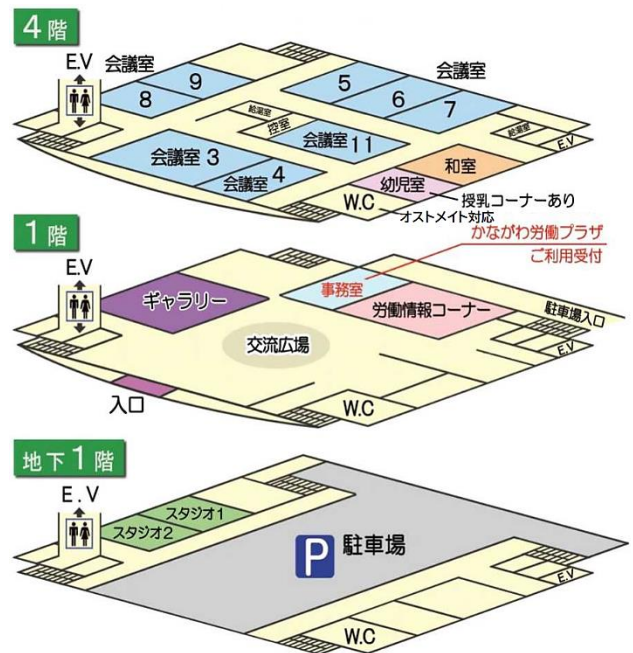
③来賓紹介

④学生紹介①オンライン西から東へ(リレートーク): 各地で学ぶ学生がオンラインで自己紹介

学生紹介②会場から : 会場に来られた学生の紹介

⑤レクリエーション活動: 会場に集うスクーリングです。普段、家庭や病院・施設で学ぶ訪問カレッジ学生と一緒に活動を楽しみましょう。

1) 立体切り紙パフォーマンス 11:00~11:20



大藪一樹氏(立体切り紙アーティスト・神奈川県立麻生支援学校卒業生)

高1の時に美術館で立体の切り紙アートと出会い、自分でもできるかもしれないと、我流で製作を始めた。下書きをせず、一枚の紙で表現する技法は、独自のもの。

2) マジックショー 11:30~12:00

TAKKi氏 オーシャン氏(マジシャン)

マジックコンテストで優勝経験があり、世界で活躍する TAKKi 氏による不思議なマジックの世界をお楽しみください。
*協力 一般社団法人ピッカ

<第2部>講演とシンポジウム 午後 13:00~15:30

テーマ「SDGsと障害者基本計画に基づき、訪問型生涯学習の制度創設を目指して」

国連総会採択のSDGs(持続可能な開発目標)に「すべての人々へ包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」が掲げられています。令和5年3月発表の障害者基本計画(令和5年度~令和9年度)には、「障害者が生涯にわたり教育やスポーツ、文化などの様々な機会に親しむことができるよう、訪問支援を含む多様な学習活動を行う学びの場やその機会を提供・充実する」とされています。障害のある方の生涯学習が、国際的な目標、国内の計画に入りました。この実現のためには、どのような課題があり、どのようなプロセスで進めるべきなのか討議したいと思います。

司会 新井 雅明(田園調布学園大学・教授)

①基調講演「『生涯学習社会の実現』に向けた文部科学省の取組」 (13:00~13:30)

鈴木規子(文部科学省 総合教育政策局 障害者学習支援推進室長)

②シンポジウム 「重度障がい者とともに切り開く『生涯学習社会』の未来」 (13:40~15:20)

- ・安部井聖子(東京都重症心身障害児(者)を守る会会長、内閣府障害者政策委員会委員)
- ・道躰正成(神奈川県福祉子どもみらい局参事監)
- ・津田英二(神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授)
- ・小林芳枝(訪問カレッジ Enjoy かながわ保護者)
- ・コーディネータ 飯野順子(NPO 法人地域ケアさぽーと研究所・理事長)

(2) 第2回「訪問カレッジ『学びの実り アート&ミュージックミュージアム』」開催結果

(a) 参加者数

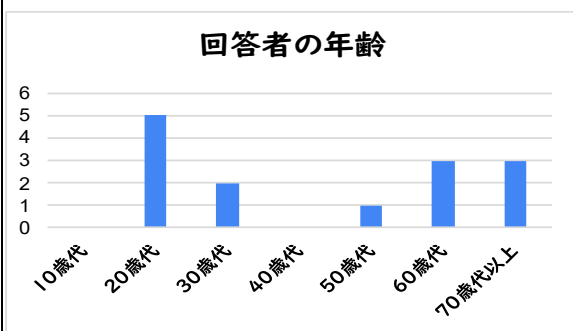
日付	参加形態	参加者数
1日目 11月3日(金)	会場対面	109名
2日目 11月4日(土)	会場対面	106名
合計		215名

(b) 「学びの実り アート&ミュージックミュージアム」参加者アンケート結果

11月3日(金)から11月12日(日)の期間、Google フォームを利用して回答。開催期間中はアンケート用紙による回答も受け付けた。回答数14。

問 1 回答者についてお答えください。

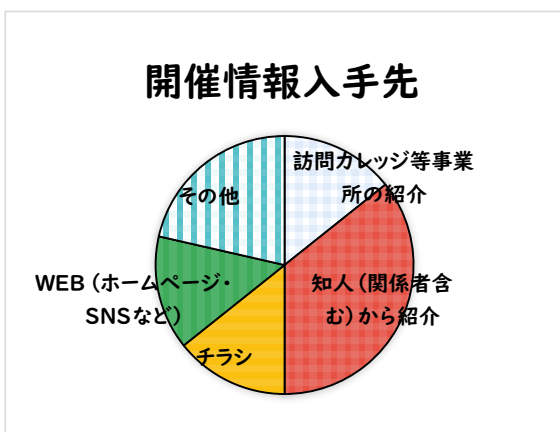
(1) 年齢 (n=14)



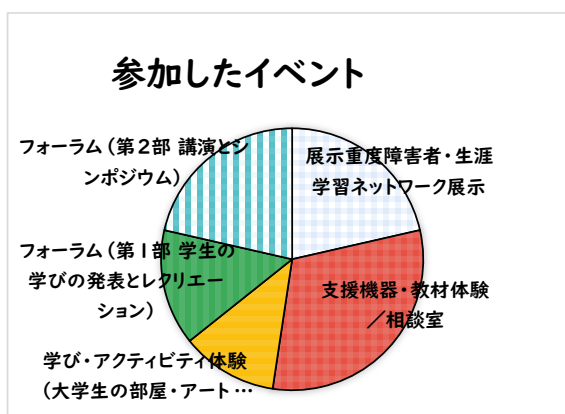
(2) 所属 (ひとつ選択) (n=14)

訪問カレッジの学生	1
訪問カレッジ生の家族	0
訪問カレッジ関係者 (支援者等)	4
学生 (中学生)	0
学生 (高校生)	0
学生 (大学生等)	0
教員等学校関係者 (小学校)	0
教員等学校関係者 (中学校)	0
教員等学校関係者 (高等学校)	0
教員等学校関係者 (特別支援学校)	2
教員等学校関係者 (大学等)	0
支援機関関係者	0
行政機関関係者	0
企業関係者	0
一般市民	1
その他	6

問 2 本イベントの開催をどのようにお知りになりましたか。あてはまるもの全てを選んでください。(n=14)

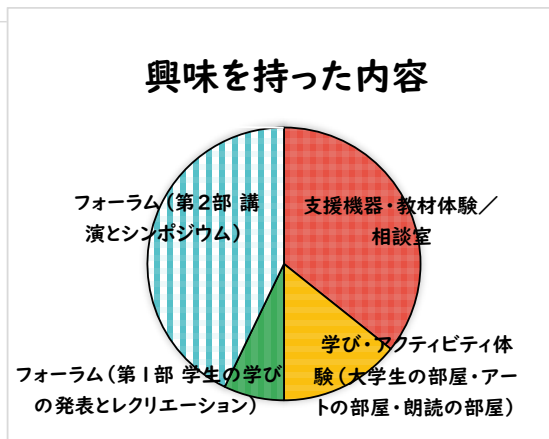


問 3 本イベントで、参加・見学・体験(直接・間接を問わず)したものを全て選んでください。(n=14)



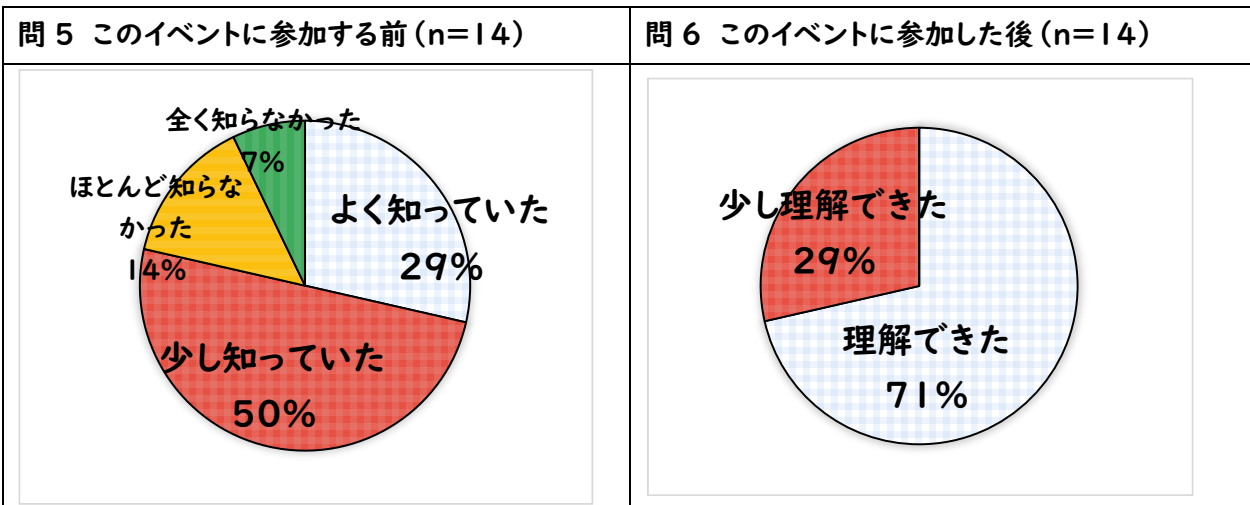
問 4 本イベントで、「一番興味をもった内容」は何でしたか?(参加、不参加問わず。一つ選んでください。)

(n=14)

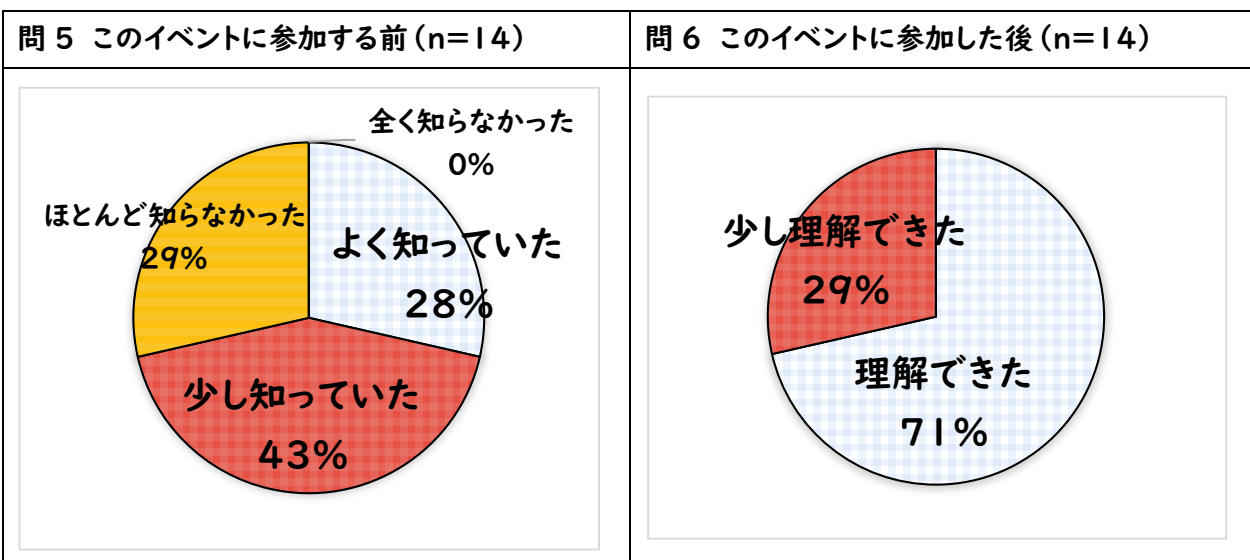


問 5・問6 このイベントに参加する前と参加後における違い

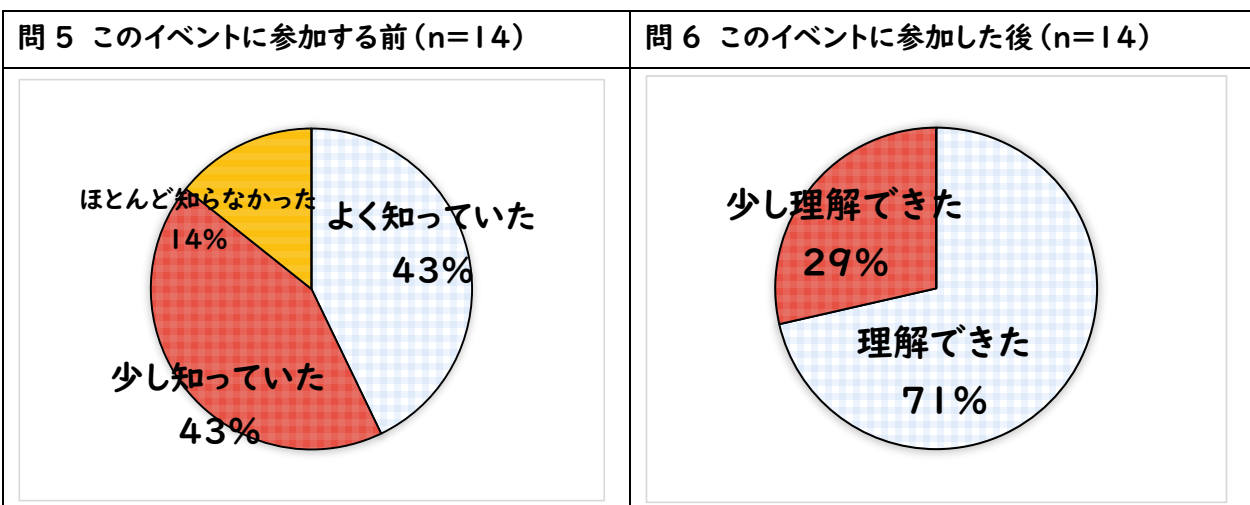
(1) 「訪問カレッジ」(訪問型学習支援)について



(2) 「訪問カレッジ」(訪問型学習支援)での「生涯学習」の取り組みについて

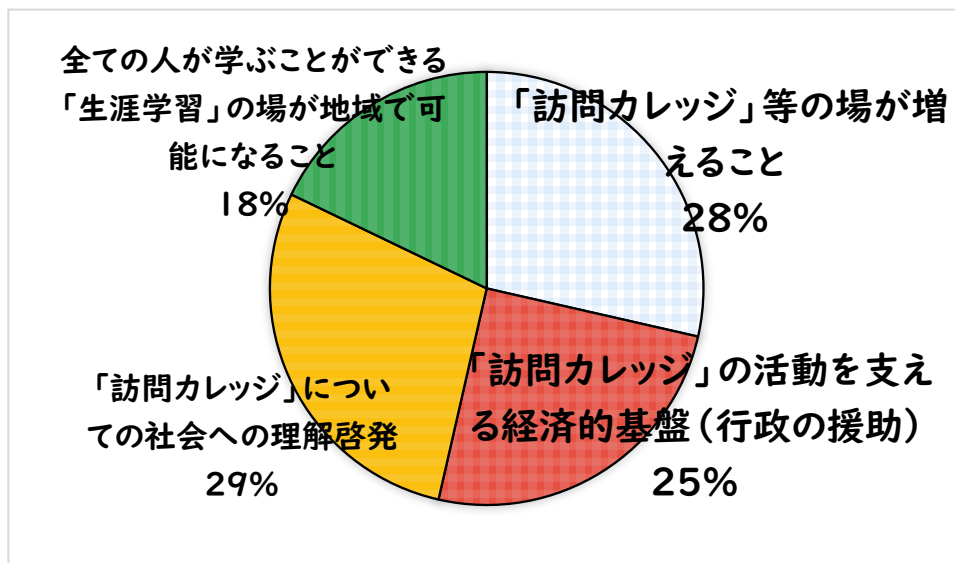


(3) 医療的ケアが必要な方々の「生涯学習」の必要性について



問 7 医療的ケアが必要な方々の「生涯学習」が、さらに充実するためにお聞きします。必要だと考える

ことを2つ選んでください。(n=14)



問 8 多くの方にサポーターとして参加してもらうためのアイデアがあれば教えてください。(自由記述)
(n=6)

- ・シンポジウムでも話題になっていましたが、現場の教職員のみなさんに、いろいろな場面で周知していくことが、まずは大切だと思います。
- ・普通学校の先生方にも知ってもらう。教員の経験をいかせる場でもある。最近は医療的ケア児童も普通小に通うことが増えて、認知度が上がっている。
- ・重症心身障がい者の実態を多くの人に知ってもらうことが良いのではないかと思います。例えば、同じ地域の高校と連携して特別支援学校と共同の授業を組み、学生時代から理解啓発を促したり、大学で教員志望の学生には資格取得の中で必ず重症心身障がい者との触れ合う場を設けるなど"
- ・思い付きですが、特別なスキルの提供として、数回同行した後は謝金がもらえるようになると、スキルアップしながら継続できるのでは？
- ・まずはこういう方々がおられることを知っていただくことが大事です。
- ・教育福祉関係の大学教員に PR すること → 学生がサポーターとして体験学習をする

問 9 このイベントをとおして、あなたの気持ちの変化があればお聞かせください。(自由記述)
(n=5)

- ・もっと多くの人に知ってほしい。文科省の追い風を生かしていけるといいと感じた。応援してくれる人を増やしたい。
- ・文部科学省の法令等が決まるまでに、多くの保護者の方々の強い意志があって、何度も訴え伝えたことでやっと文章として残る形になりつつある状況を知りました。また、そのような文章化を行うまでには必ずエビデンスが必要であり、保護者と自治体が連携できている団体を実践研究に採用しているということも理解しました。しかし、なぜそこまで行政や自治体は現場頼りになっているのかが疑問に

残りました。自治体を動かすにも保護者からの意思がなければ動かない、行政を動かすにも保護者と自治体が動かなければ認められない状況はおかしいと思いました。私は大学院で重度身体障がい者のスポーツに関する研究をひまわり Home college さんにご協力いただきながら研究をしています。私たち研究者にもはたすべき役割があると痛感しました。"

- ・変化というよりは、社会教育で語られる生涯学習と、この取り組みにおける生涯学習に違いがあると感じた。
- ・指の動きで会話できるなど人それぞれの学習の仕方を感じました。
- ・更に地域でこの分野が発展してほしいということ、より強く感じました。

問 10 「訪問カレッジ」(訪問型学習支援)へ期待することがあればお聞かせください。(自由記述)
(n=5)

- ・質のいい実践を続けるには専門的技術や知識が必要ではあるけど、研修や冊子を作って、少しでも壁を低くできるといい。地域に立ち上げるにはどうしたらいいかの研修?もあるといいかもしれません。SNS で呼びかけてもらって。制度化する具体的方法を詰めていければ。
- ・SNS などでもっと広報活動に力を入れると、啓発に繋がるのでは。
- ・訪問カレッジとして文章化されるまでにはかなりハードルがあることに気付かされました。しかし、学びの種類や形態は障がい者に限らず、不登校の生徒や家庭の事情で学校に通うことができない多くの学生にも必要とされているのが訪問型の学習ではないかと思いました。必要とされている教育を必要な形で多くの人に届けることは、今後も必要とされていく制度ではないかと思いました。"
- ・イベントで、各地の訪問型学習支援受講生がオンラインとリアル参加で自己紹介や活動発表をしたが、序盤のメンバーの発表時間が短かったと感じました。せっかくご自身の発表が終わった後も、オンラインで残っていてくださっていたので、時間が余ったなら、序盤に登場した方々に出番を戻して差し上げてよかったのではないかと思います。
- ・インターネットへの発信を積極的にやってほしいですね。財政的援助の制度化を国レベルからやってほしいです。

(c) 参加者レポート おおきな事務局 竹内理恵さま

第2回 訪問カレッジ「学びの実り アート&ミュージックミュージアム」に参加して
—医療的ケアの必要な重度障がい者の学びの成果を発表する文化祭—

1. 障害の重い方の学ぶ喜びとそれを支える家族の想い

私が参加したのは、2日目の「医療的ケア児者の生涯学習を推進するフォーラム」です。

冒頭で、飯野先生(NPO 法人地域ケアさぽーと研究所・理事長)が、訪問カレッジ@希林館学長の下川先生に届いた手紙を読まれました。数日前に旅立たれた学生さんの親御さんから、その直前まで授業を楽しんでいたことへの感謝の言葉でした。訪問カレッジの学生さんが元気に授業を受けること

ができるのは、親御さんの気の抜けない細やかな対応や体調管理などがあってのことです。ご本人の喜びが親御さんの心を和ます一助になっていたことはうれしいことです。

2. 「学び」がもたらす豊かさ

オンラインで各地で学んでいる学生さんたちから、自己紹介がありました。具体的な授業の様子（楽器の演奏、調理、ゲームなど）を披露してくださったり、写真とともに説明してくださったり、歓声上がる場面もあって楽しませていただきました。

版画美術館を訪れて、先生と1対1で異空間を満喫された方もいらっしゃいました。フードパントリーの代表として、iPadで挨拶したり受付業務を行ったりして地域の活動に参加されている方や、友人宅で開かれる朝市（月に2回）で、スイッチで操作できるようにしたミシンで作った巾着袋を販売されている方もいらして、まだまだ色々な授業が楽しめるのではないかと期待が膨らみました。

「まだまだ楽しいことがたくさんあると知った」という学生さんの言葉や皆さまの表情がとても良くて、ケアとは違う「学び」がもたらす豊かさを感じました。



▲重度障害者・生涯学習ネットワークをけん引する代表の飯野順子さん



▲フードパントリーでの受付をiPadのスイッチ操作で担当している岩村さんのデモンストレーション

3. 夢は世界へ、立体切り紙とマジックショー

レクリエーション活動では、「立体切り紙」と「マジックショー」が行われました。「立体切り紙」を私は初めて拝見し、下書きをせず1枚の紙から繰り出されるエビもサル（顔の表情まで表現）もカマキリも圧巻でした。「夢は世界で活躍する立体切り紙アーティスト!」というご本人とそれを支えるお母様の笑いが絶えないおしゃべりにも包み込まれました。

また、5歳の時に観た映画「ハリーポッターと賢者の石」で魔法に憧れたという TAKKI さんのマジック、それもこんなに間近で楽しめるとは思いませんでした。その鮮やかな手の動きと話術にどんどん引き込まれ、皆で楽しめました。話を聞くだけでなく、見ても楽しめる「立体切り紙」や「マジックショー」は、会場の雰囲気をも和ませてくれました。



▲立体切り紙の大菌さんと筆者

4. 誰一人取り残さない社会の実現

フォーラムでは、「生涯学習社会の実現」に向けた文部科学省の取り組みとして、SDGsの視点からみた障害者の生涯学習について、障害者学習支援推進室長の鈴木規子さんから説明がありました。「目標4:教育→すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」とあり、他の16項目全てと互いに連携しあって、だれひとり取り残さない社会の実現を目指すことを目標としています。



▲2015年9月の国連サミット:先進国を含む国際社会全体の開発目標として、2030年を期限とする包括的な17の目標(持続可能な開発目標:SDGs)を設定。

5. 声を上げ続けることの大切さ

「生涯学習社会」に向けても、国は、第5次障害者基本計画(令和5年度～令和9年度)の「生涯を通じた障害者の多様な学習活動」の中に「訪問支援を含む」と明記しました。さらに画期的だったのは、文科省の「学校卒業後の障害者の学びの支援推進事業」の令和6年度予算要求額の中で「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」として「重度重複障害者向けの訪問型学習プログラムも対象」という一文が組み込まれたことでした。

これは、フォーラムの終盤、東京都重症心身障害児(者)を守る会会長の安部井様のご発言で知ったのですが、「飯野先生を追いかけてきて、親としてできることはないか」と、この10年間、毎年制度化に向けて働きかけてきたことによって、それがやっと目に見える形になってきているのです。

未来に向けて、制度として確立させることの意義と、そのために諦めずに声を上げ続けている方がいる

ことを知り、「おおきなき」が果たす役割の一端も垣間見た気がしました。

安部井様（東京都重症心身障害児（者）を守る会会長）のお話の中に、東京の支援学校のお子さんが卒業を迎えた時に留年させたいと思ったという保護者の話から「学ぶ機会がなくなってしまうことの切実さ」が当時の文部科学省の大臣に届いたという話がありました。安部井さんは、ヘルパーさんに、「うちの子は、こんなことが好きです」とさりげなく伝えて、福祉の場で「学ぶ」機会を作られていました。輝くような笑顔が施設に入っても見られるようにしたいとおっしゃっていました。

私は、「学ぶ」機会は、高齢者や障害者の介護の現場でも必要なことなのではないかと思っています。ケアがちょっと早めに終わったら、一緒に好きな歌を歌うとかゲームを楽しむだけでも、世界が広がり会話が膨らみ、笑顔がこぼれます。その笑顔は周りの人も幸せにすることを実感しているからです。

訪問型生涯学習の創設に向けた試みは制度化することによって、自治体も巻き込み、財源確保や人材育成に向けた普及・啓発が行われる足がかりになることを改めて実感しました。声を上げ続けていくことの大変さも知り、感謝とともに微力ながらもおおきなきの活動を広めていきたいと思いました。

6. 現行のサービスの中での実現可能性を探る

道躰様（神奈川県福祉子どもみらい局参事監）からは、時代とともに理念も変化し、障害福祉サービスも色々な取り組みが考えられてきたことを伺いました。机上の空論に終わることなく、現場に浸透させていくことがさらなる課題だと思います。今後に向けて、提案されている「医療・福祉・教育等連携パス」に期待したいところです。

また、生涯学習については、新たなサービスの構築というより、道躰様も述べられていたように現行の福祉サービスに追加するような形（通所サービスで行われている「自立訓練」を訪問サービスでも行えるようにするなど）でしたら、取り組みやすいのではないかと思います。人材育成が課題になるかもしれませんが。

7. 学習者の思いに合ったプログラムを

神戸大学の津田先生は、「共に生きるための学び」が生涯学習であり、それは他者を深く理解し、互いに協力しあって、さまざまな困難を乗り越えていくために重要なことと捉えていました。生涯学習は、「学習者に即して色々なプログラムがあっていい。そこには学習者の思いが大事なのだ」と。

そして、神戸大学が18年前から取り組んでいる「のびやかスペースあーち」の活動では、重度障害者も含めた地域住民と学生、教職員が、多様な人たちに寄り添いながら、学習支援や子ども食堂、居場所作りなど色々な取り組みを展開していました。「ともに生きるための学びを通じ、『普通』『当たり前』を柔軟にして、ともに未来を切り拓いていきましょう」というメッセージが印象的でした。

8. 教育と福祉の連携

石川先生（訪問大学おおきなき副理事長）からは、支援学校では「コミュニケーション支援」に、福祉

では「意思決定支援」に取り組んでいる、これらの取り組みが連携して、生涯学習へと進んで行けたらいいのではないかと提案がありました。そして、今年、生涯学習ネットワークに新たに加わった、訪問カレッジ@きーぼ岡山をご紹介下さいました。支援学校の教師の経験のある方が、「どうやったら、重度の障害がある人の学習支援ができるか」を思案して、時には事業所のヘルパーとして、時にはボランティアとして現場に入り、学習支援を実践しているという画期的な活動でした。

9. 困難な人が未来を切り開く

下川先生（写真右：訪問カレッジ@希林館学長）からは、かつて、重度の障害があるお子さんは、就学猶予・免除されており、教育を受ける権利が喪失していたが、今は、卒業後についても色々な取り組みが行われており（訪問の家や共同作業所の活動など）、「困難な人が未来を切り開くのです」と明言されました。



飯野先生も「障害者の生涯学習」という言葉が根付いてきたのはこの 10 年間の成果であると振り返りつつ、この先に向けて、さらなる未来を切り開いていく使命があることも述べられていました。教育や福祉の現場で行われている know-how を共有し合っ溝を埋めることも大事。「重度の障害があっても、地域で豊かに生きること、人生の質を高めること」、それは、人との繋がりでできること。必要としている人がいて、その人に寄り添う小さな動きが大きな動きになっていくのだと語られました。

おおきなきが歩んできた 10 年が、こうした先駆者の方々に支えられていたことを改めて実感し、この先も共に少しずつ輪を広げていくことができたかと切に願いました。

(3) 「理解啓発」に対する考察

昨年度の第 1 回「学びの実り アート&ミュージックミュージアム」は、3日間開催ので、会場参加者とオンライン参加者の合計 330 名の参加があり、その約 1/3 の 103 名からアンケートの回収ができた。今回は、2 日間の開催中対面だけで 215 名あった。アンケートは残念ながら回収が 14 のみであった。なお、今回のオンライン参加は、YouTube ライブにしたことと回線及び設定のトラブルからライブ配信を直接見られたのは 10 人ほどであったが、録画配信も含めると 11 月 5 日～11 月 12 日の 1 週間で 150 回以上の再生が行われた。アンケート回答内容からも、本事業に対する期待が寄せられた。以上から、本イベントの目的はおおむね達成できたと考える。

なお、今回は 11 月 3 日（金）に神奈川新聞の記者の取材が行われ、11 月 4 日（土）の神奈川新聞に記事が掲載された。

(4)「学びの实り アート&ミュージックミュージアム」写真及び動画記録

(a) 写真





フォーラム (学生紹介)



フォーラム (学生紹介)



フォーラム:レクリエーション (立体切り紙)
大菌一樹氏



フォーラム:レクリエーション (マジックショー)
TAKKi氏 オーシャン氏



フォーラム (基調講演)



フォーラム (シンポジウム)



運営スタッフ



運営スタッフ

(b) YouTube 動画

「ネットワーク」紹介 (3分)	1日目 学び・アクティビティ (1時間33分)	2日目 ライブ配信記録 (5時間26分)
		

(c) 展示ポスターの写真





Ⅲ おわりに

「つくる」「ささえる」「つながる」

重度障害者生涯学習ネットワーク 副会長 成田裕子

カレッジ生の文化祭「学びの実りアート&ミュージックミュージアム」の2日目は、各地の学生紹介から始まりました。神奈川のカレッジ生はぶっつけ本番でしたが、「〇〇さんおはよう。下飯田のお天気はいかが？」と声をかけると、呼びかけの声にしっかり目で挨拶。「藤沢のお天気は？」と呼びかけた彼は当日が二十歳の誕生日でした。午後のシンポジウムでは、母から「彼の20年とこれから」の話があり記念日になりました。「世界を幸せにしたい」切り紙アーティストの親子からも「希望」が伝わります。

カレッジ生の楽しむ姿、学びを希求する意欲、豊かな人生を願う家族の想いが、この事業の発信力・推進力の源です。

私たちは2019年に訪問型学習支援を神奈川に立ちあげ、ネットワークの一員になりました。2022年から文部科学省の研究委託事業の事務局として、研究計画にある「運営・地域連携」及び「理解啓発」を担当しました。立ち上げたカレッジを『神奈川モデル』と称し、【訪問型学習支援の持続可能な展開】に向け、連携協議会で方策を検討し、関係機関や行政との連携を模索してきました。委員は生涯学習課・障害福祉課、特別支援学校長、教員養成大学関係者、福祉関係者、芸術・スポーツ関係者等に依頼しました。その結果、次年度から「ボランティア活動推進基金による神奈川県との協働事業」として活動できる見通しがついたことは、成果の一つと言えます。

また、目力で「僕の話聞いて」と語るカレッジ生の写真を表紙にした「リーフレット」を作成しました。それを携え関係先を回り、3,500部の配付を短期間に終え、増刷もしました。カレッジ生の授業の写真は、学びに向かう真摯な姿を伝える大きな力となりました。他にも大学生の同行訪問やゲストティチャーの参加、朝市への出店など、連携機関や支援者の増加に繋がる方策を探し、楽しくチャレンジを重ねてきました。連携協議会を開催した成果が『神奈川モデル』として、今後、花開くことを期待しています。

シンポジウムの最後に会場から「まだまだ訪問型生涯学習支援は世の中に知られていない。これからだ」との声がありました。制度化に向けて、現在の「点」の事業を、「面」に広げる必要があります。これからも、全国各地で地域やニーズに合わせた多様な学びの場や機会を「つくり」、ネットワークで「ささえ」、地域を「つなげる」活動を推進することが重要です。

今後一層のご支援・ご協力を賜わり、誰もが学び続けられる社会を目指し、着実に歩み続けたいと思います。